

遊牧論
その他

今西錦司 著

秋田屋

613
7
612
人文

京都大学図書



8680631573

人文科学研究所

遊牧論

その性質

分類編別書

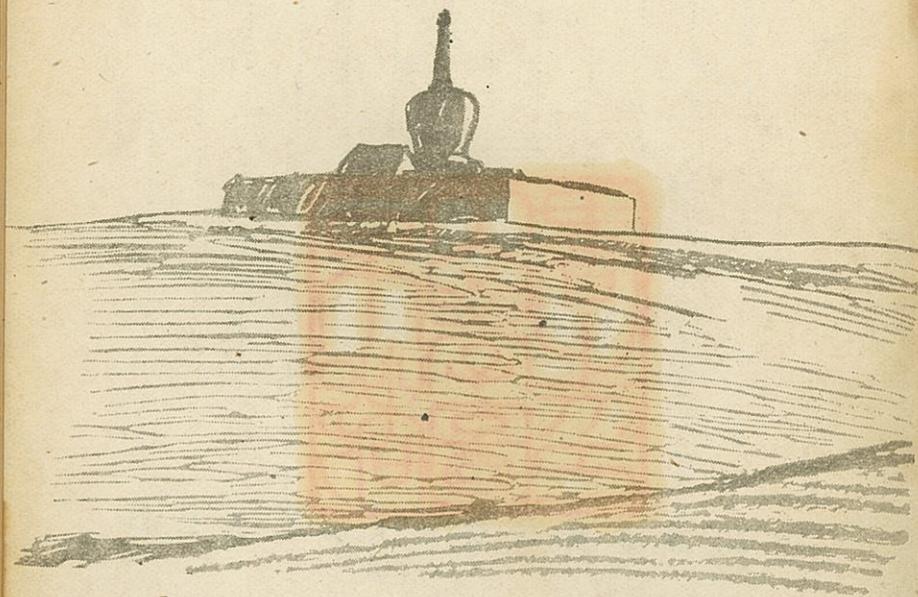


科
613
7
文

遊牧論

そのほか

今西錦司著



秋田屋

目次

草原の自然と生活 一

遊牧論 二

遊牧論への註釋 三

砂丘越え 三

肅親王牧場にて 三

砂丘越え 三

タムチン・タラ 三

ヤハル印象記 三

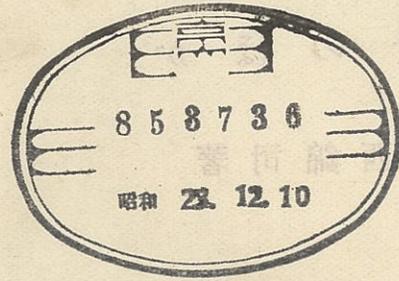
張家口落ち 三

動物記 三

犬 三

狼 三

あとがき 三



田 村

遊牧論そのほか

装釘
挿書
地圖
・
梅棹忠夫
和崎宣夫
榊原始更

草原の自然と生活

今夜はわたくしに、蒙古の草原とそこで營まれてゐる生活について、話しせよということであり
ます。多分この場合、草原というのは自然としての草原であり、生活というのは、人間としての蒙
古人の生活が豫想されてゐるものと、考えてよいであります。ところで、自然としての草原と
いいますが、そこには、この自然としての草原を成り立たせるべき風土、すなわちそれに特有な
氣候や土壌がなければならぬ。また一口に草原といつても、蒙古の草原は、アフリカやアメリカ
の草原には見られぬような、植物の種類から成りたつてゐるであらう。だから、自然としての草原
を研究する自然科学は、氣象學・氣候學・土壌學・植物學等の各分野にわかれて、これを一括して
研究する草原學といつたようなものは、まだできあがつてゐないのであります。

一方で蒙古人の生活の方も、その經濟現象は經濟學者が研究し、牧畜關係のことは畜産學者が研

究する。またその風俗慣習については民俗學者が研究するといったように、この方もまた生活現象を一括して研究するというような學問がない。それで、草原の自然と生活というような題でお話する場合には、いきおい、あちらこちらの分野で研究されたことがらを、拾いあつめてきて、これを體裁よく羅列するといった、いわば百科辭書的な取りあつかい方になつてしまうのが、普通のようにであります。

しかるに、わたくしの専攻致しております生態學という學問は、現象をばらばらにほぐして、その一つ一つについて研究するというのではなく、なんでも現象と現象とのあいだの關係を、とらえようとする。だから、氣候や土壤といったような無機的な自然と、植物のような有機的の自然とを、その相互間の關係という立場において、これを一つの視野のなかにもつてくることができる。さきほどいつた、草原學というような學問も、それゆえ、生態學の立場においてなら、成立させることができるのではないかと思われます。じつは、わたくしは、そういつた草原學をうちたてるべき研究機關として、蒙古草原のどこかに、ひとつ立派な草原研究所を、つくつてみたいと願望してゐるものがあります。

人間の生活というものが、自然から絶縁しては成り立たない以上、生態學はやはり、自然と人間

というものを、別々には考えないで、これを兩者の關係において、とらえようとする。それも、ただ單に現在の關係をみただけでは、關係の真相はまだつかめてゐない。これをつかむためには、こうした關係の成りたつたことのおこり、それから後の變化といったことが、一ととおり明らかにされねばならない。生態學にはその方法論として、歴史が求められるのである。そして、その結果として導きだされてくるのが、關係の進化であり、生態ということ、生物とその環境とのあいだの關係の現われ、と解するならば、それがすなわち生態の進化に他ならない。それゆえわたくしが、草原の自然と生活について、生態學の立場から話そうということになると、そこで取りあげるはその自然と生活との個別的な現象よりも、むしろ自然としての草原を成り立たすための諸關係、あるいは自然において草原の占める關係位置というようなことから、つぎにはこの草原において、人間としての生活を成り立たすための諸關係、あるいは草原の生活において人間の占める關係位置というようなことに、なるであらうと思う。

そして結局は、人間の、自然としての草原に對する働きかけぶりの、生態學的價值判斷ということとを、生態進化史を通じて、試みてみたいと思ふのでありますが、そのまえに、もう一つイントロダクションを入れさせてもらいたい。それは、より一般的な自然と人間との關係、あるいは自然に

對する人間の働きかけ、の進化史を紹介することでありまして、これを一應のみこんでおいて、それから人間の草原に對する働きかけを、理解してもらおう方が、段取りがよいであります。

x

そもそも自然とは如何なるものであろうか。われわれは自然というものを、たとえば天体の運行に見るごとく、寸分の狂いもない數學的正確さをもつた、秩序ある體系であつて、そこでは人間の感情などというものは、およそ無關係な、冷やかな法則がすべてを支配してゐる。一見無秩序のように見えることでも、その根底には必らず法則があり、その法則にしたがつて現象が生起してゐるのである。けれども、いまだ人智の至らぬところがあつて、その法則のすべてがわかるには至つてゐない。自然科学者というものは、このようなわからぬ點を研究して、最後にこの自然の法則を發見することを、目標にしてゐるものである。

このような自然——それは自然科学的自然である——の考え方が、いまだはいわゆる社會の知識層のあいだに、かなり擴がつてゐるのではなからうかと思われる。そして、こういう自然の考え方

にふくまれてゐる大きな特色の一つは、自然が自然である所以は、それが超自然的でないということである。たとえば、われわれは日蝕や月蝕は、ある一定の原理にしたがつて起る天体現象であることを知つてゐるから、こういう現象が起つたからといつて、未開社會で見られるように、騒ぎたてはしないであらう。しかるに多くの未開社會では、かかる異常な現象は、超自然的なものがわれわれになにか恐るべき災害を興えようとする、前兆に他ならないと考えて、その超自然的なもの御機嫌をとるために、そして、それによつてその災害を未然に防止するために、いろいろなことをするのであります。

病氣や死ということも、われわれはこれを、一種の自然現象と考えてゐる。というのは、われわれはもはや厄病神というようなものの存在を考えなくなつたし、また病氣になつたり死んだりすることが、なにもかの悪意や魔術によるものである、というように考えることもないからであります。そしてこういう自然の考え方なり見方なりをするようになってきますと、起こりうべくもない災害に對して、いたづらに心配する必要もなくなるかわりに、また起こりうべき災害に對しては、適當なる處置を講ずることによつて、これを實際に未然に防止することも、可能となつてくるのであります。われわれは多くの傳染病が、微菌の傳播とその繁殖によつて引き起こされるものである。

ことを知つておますから、日頃から衛生に注意し、萬一罹病した場合にも、その處置を誤るようなことはないのですが、蒙古人などはまだこのような見方が徹底してゐない。蒙古人のあいだに花柳病が相當蔓延してゐることは、しばしば話題にのぼるところであり、またそれは、ある程度まで事實でもありますが、當の蒙古人は残念ながら、いまだに花柳病が傳染病であるということを知らないために、あるいはどうして傳染する病氣であるか、ということを知らないために、たとえば淋病は馬にのるから起る病氣であり、蒙古人は男女ともに馬にのるから、したがつて誰れでもかかる病氣である、というように考へてゐるのであります。そしてこれを治癒するにも、同じように傳染病の何たるかを知らぬ、喇嘛僧のあやしい祈禱や施薬ぐらゐに頼つてゐるのでありますからこれでは蔓延するのも無理はない次第であります。

たとえ馬にのるから自然に起る病氣であるとしても、しからばこの自然に起る病氣を、何とかして起らぬようにする工夫はないものか、というように考へないで、自然に起るのだから致し方がない、と至極あつさりあきらめてしまふ。この點は漢人の、いわゆる没法子といつた態度と、全く同じであります。つまり、ここに自然に對する見方の相違が、歴然と現われてきてゐるのであります。自然というものに、超自然的なものを假定しないという自然の見方は、また先ほど申

し上げましたとおり、自然とは法則にしたがつたものである、という自然の見方であります。それゆゑこの見方からすれば、自然の法則性が理解できてゐないゆゑに、自然が自然でなくて超自然になつてしまふのである。しかるにもし、自然の法則というものが、明確に把握できたとしたならば自然はもはやわれわれの外にあつて、不意にわれわれを襲撃してくる敵ではなく、それはむしろわれわれとともにあつて、われわれがそれを利用し開拓することによつて、われわれの生活を豊富にし、また向上させることのできる、われわれの財産である。法則というものがそれ自體は、いかに人間の感情をふくまぬ、冷やかなものであるかも知れないが、法則を人間につかまれた自然は、もはや奔放な野獸のような自然ではなくて、それは人間によつて馴らされた家畜のような自然である。われわれが家畜に對して抱きうるのと同じような、親しみもてる自然である。すなわち法則さえこちらがつかんだならば、その馴化はいつでもできるといふ意味で、その自然はすでに人間の制御下におかれた自然である、ということができるのであります。

自然を人間の外にある神聖なもの、神秘なもの、人間の力をもつてしては改變できないものとして考へてゐた自然の見方を、古い見方としますならば、これに對して自然の秘密をあばき、自然を人間の制御下におこうという新らしい見方のほうは、また自然を人間の利用の對象として眺めようとい

うところに、大きな特色が認められてよいのであります。もちろん生物といえども、自然を利用せず生活してゐるようなものは一つもない。しかし人間が生物から人間に進化し、道具を使うようになったからというものは、人間の自然利用度は、生物とはくらべものにならぬぐらゐに進んだ。自然物を利用して家をたて、着物をつくるのはもとより、火をおこすことを覚えて、いろいろなものを煮たぎして食うようになった。それも食物を自然から採集してくるばかりでなくて、生産の形式が、やがて牧畜乃至は農耕という形に發展していつたのは、一方からみればやはり自然利用の進歩である。農耕するにも、はじめは棒耜れなどを使つてゐたが、そのうちには鐵製品も用いられるようになった。

このようにして、人間は太古の時代から自然を利用してゐたことには間違ひはなく、また次第に利用するものも殖えつつあつたのであります。ただその利用のおこりが何處にあつたかといへばそれはつねに偶然的な經驗に導かれてゐたにすぎない、といえるのであります。その時代の人間に、われわれのように自然の法則が、知識として頭に入つてゐたわけでもなし、またもちろん、それを通して、自然を人間の力でどうしようといつたような、大それた考えをもつてゐたわけでもなかつた。むしろ、自然がある程度まで利用してゐたにもかかわらず、自然は人間の力でどうす

ることもできないものだ、というように考えてゐた。ギリシヤ人は、御承知のように、古代において、すぐれた文化を築きあげ、ひとかどの學問を發達させたから、あるいは自然の法則といつたものも、彼らのあいだでは、ある程度まで理解されてゐたものと、考えてよいだらうと思ひます。けれどもわれわれから見ると不思議に思われることは、ギリシヤ人が彼らの知識なり學問なりを、自然の利用という方面に對しては、ほとんど用いてゐないということでありませう。そして、それはどういふわけかと申しますと、ギリシヤ人の頭では、自然はすでにでき上つたもの、完成したものと、どういふように考えられてゐたからであります。完成したものに、これ以上手を加えたところで何になるだらうか、というのがギリシヤ人の自然の見方でありました。それがキリスト教の時代になりませうと、自然というものはすべて神がつくつたものである。神のつくつたものであるゆゑに、人間がこれをどうしようするといふわけには行かぬものである、というように考えられてゐた。その何れの場合に致しましても、自然というものは、すでにつくられたもの、出來上つたものとして、人間に與えられてゐる。だから人間は必要に応じて自然を利用することはあつても、自然を制御下におくとか、自然を改變するとかいふような考えは、全く浮かんでくるはずはなかつたのであります。

それが今日のように、自然に對する見方ががらりと變つてまいりましたのは、いふまでもなく

ヨーロッパにおいてルネッサンスというものを經た結果であり、それによつて科學というものが、勃興してきた結果に他ならないのであります。そして、ここでなおもう一つ注意しておきたいと思ひますことは、自然はつくられたものであり、それ自体として完成したものである、というような見方による自然は、また變わらない自然であり、動かない自然であるということです。神は永生であるというのと同じような意味で、このような自然はまた絶對的なものであります。ところが、近代人の發見した自然は、じつはそのようなものではなかつた。自然の本性は變わらないこと、あるいは動かないことにあるのでなくて、じつはその正反對に、變わることにあり、動くことにある。たとえば高い山でも何萬年、何百萬年とたつうちには、浸蝕されて次第に低くなつてゆく。地球の表面というものも、だから、昔と今とでは全くちがつた相貌を呈してゐただろう、ということ在地質學が教えた。すると一方ではまた、生物という生物はすべて、地球のもつと若かつた頃には比較的簡單な体制の持ち主にすぎなかつた。それが次第次第に進化をとげて、しまいはとうとう人間のようなもので生まれてきたのである、ということを生物學が教えた。このように自然はつねに動き、つねに變つてゆくものである。變化こそは自然の本性であるということが、次第にはつきりとしてきた。それゆえ、もしなにか變わらぬことがあるとするならば、それは變化の起る

遊牧論

遊牧論

ことを、抑制してゐる條件が存在してゐるからである、というように考える。そこで自然の變わることを發見した近代の人間は、自然がそのように變わるべきものであるならば、ひとつ自然の法則にしたがつて、みづからすすんでこの自然を變えてみよう。もしも變化の起ることを抑制してゐる條件があるならば、その條件を取りのぞくことによつて、變化を起こしてみよう、というように考えはじめたのであります。

もつとも、こういつた自然の正体を曝露し、はじめに自然の法則をつかんでいつた人たちは、必らずしも自然の利用ということを考えてゐなかつたかも知れない。けれどもこれらの人たちの齎らした、自然の新らしい見方のまえに、古い見方はもはや完全になりたなくなつてしまつた。古い見方は壊滅したのであります。だから全くなにもとらわれることなく、誰れしもが新らしい見方をとるようになってきた。そしてこの新らしい見方による自然というものに對して、人間は、さきにもべましたように、これを大いに利用しようという立場をとるようになった。自然の法則がつかめ、自然の知識が増せば、自然はそれだけわれわれ人間のものとなつたのである。われわれのものである以上は、またそれだけこれを活用すべきである。もはや自然と人間との關係は、絶對的なものでなくて相對的なものである、というのが近世以來の考え方なのであります。そして實際に

自然は近世以來大いに利用されることとなつたのであります。自然の利用度を比較したならば、近世以前と近世以後とにおいて、いちじるしい相違が認められねばならないのであります。そしてこの自然利用の御先棒をかついでゐる機械というものさえ、近世以後の産物であるところ、われわれは興味をおぼえるのでありまして、機械はたしかに自然に對しては人工の最たるものの一つなのであります。しかし機械は決して昔のように、偶然の経験から産みだされたものではなくて、自然の法則をのみこんだ近世人が、その合理性に立脚して工夫したものであるところ、どこまでも機械というものの近代的性格が、認められねばならないと思つてあります。すなわち自然の法則を求める科學の進歩は、機械の進歩を産み、機械の進歩はまた科學の進歩を助けるというように、この兩者の交互的な促進作用がみられるとともに、また一方ではこの兩者の進歩が相俟つて、自然の利用を高めつつあるのでありますから、こういう點では、現代はなお科學の時代であるとともに、機械の時代であり、それとともに自然の利用ということも、これからさきまだどこまで進むものか全く豫想もつかない次第であります。

x

いままで述べましたところを、ここにも一度まとめてみますと、つぎのようなことになるのでないかと思われまゝ。自然というものは昔から存在してゐた。そして人間は昔から、なんらかの形において自然を利用することにより、その生活をつづけてきた。しかし、人間の歴史を通じて、自然の利用度はひたすら上昇の一途をたどつてゐる。今日ではいわゆる稀元素というものにさえ、すぐぶる重要な利用價值が認められるようになってきた。自然の利用が自然科學の發達と結びついてゐる以上、人間の自然に對する知識というものも、また自然の利用度に關聯して、今日まで向上しつづけてきた。ただし人間生活の他の面も、これと同じように高上してきたかどうか、ということは別問題である。たとえば人間の道徳性というものは、かえつて昔の方が健全だったのでないだろうか。藝術も昔の作品の方が、すぐれてゐるのでないだろうか。自然の利用といつても、それは所詮人間の物質生活に關係したものが、その大部分を占めてゐる。だから今日の文明は、科學文明乃至は機械文明であるといわれるのと同時に、またしばしば物質文明であるともいわれるのであります。われわれはたしかにこの文明の恩恵に浴して、その生活を豊富ならしめてもゐるが、その一面では、いわゆる文明人が、みづからの産みだした科學の力、機械の力によつて、日々何千人何萬人という大殺戮を行なつてゐる。戦争は古今を通じて行われてきたが、戦争の慘果は、この文

明がすすむとともに、甚だしくなるものと考えられないであろうか。このように考えてきますと、人間は昔の方がかえつて幸福だったのではなからうか、というような疑いが、起こらないにもかぎらないのであります。けれども幸福とは何ぞや、といったような問題に觸れないで眺めたところでは、人間はやはりたしかに進歩してゐる。向上してゐる。少なくとも自然に關する正確な知識と、それを應用した自然の利用という點において、現代ははるかに古代や中世を凌駕してゐる。これだけは覆がえすことのできぬ事實であると思ひます。そして、それとともに人間に對する自然の立場がかわつてきた。あるいは人間の自然に對する見方がかわつてきた。自然はもはや人間以上の神秘的存在でもなければ、人間に對立した異質的存在でもない。自然は、人間がこれを最大限度まで利用してゆかねばならぬ一大精力源である。人間が他の遊星へ移住するようなことが考えられないかぎりすなわち、地上に生まれ、地上に縛られた人間が、地上に榮えんとするかぎり、人間のとるべき道はこの精力源の活用ということを描いて他にはないのであります。それでくりがえし申し上げますが、道徳や藝術や幸福に關することはいざ知らず、人間の自然利用と、これを誘導する自然科学とは、今後ますます進歩發展してゆくだろう、ということがいえるとともに、こういう立場からみた自然というものは、ヒマラヤの山頂でも太平洋の海の底でも、すべて人間と關係がある。いまはまだ

利用されてゐなくても、すでに自然科学の對象となつてゐる以上、關係はできてゐるのである。だから人間との關係から完全に絶縁された自然、自然のための自然といつたようなものは、もはや今日この地上に存在する餘地がなくなつた、といつても過言ではないのであります。わたくしのこれから述べます自然というものも、またもちろん、こういう見方に立脚した自然、こういう關係におかれた自然に他ならないことを、御承知おき願ひたいと思つてあります。

x

ではこんどは、以上にのべましたような自然の立場から、蒙古の草原、自然としての蒙古の草原を見てみようと思つてあります。いいかえるならば、自然に法則があり、秩序があると考へた場合に、如何なる法則にしたがい、如何なる秩序を維持するべく、蒙古の草原は現在ある如く位置づけられてゐるのかと、いうことになるだろうと思ひます。

いつたい蒙古はよくいわれるように乾燥地帯に屬してゐる。いわゆるゴビの礫原というものは外蒙にはいつてゐるために、わたくしはまだ行つたことがないけれども、そこはじつに見渡すかぎり

一木一草も生えてゐない荒涼たるところであるらしい。草が生えてゐないから、もちろん放牧するわけにもゆかないので、そこには蒙古人も蒙古人の家畜も見いだせない、全くの無人地帯、無住地帯がひろがつてゐるのである。ゴビからもつと西の方へ行きますと、新疆省には有名なタクラマカンの大沙漠というのがあります。これは礫原のひろがりではなくて、アフリカのサハラなどに見られるような砂丘の連続であります。ここにもやはり廣大な面積にわたつて、無住地帯が見られる。そしてそこが無住地帯であるわけは、やはり草木が生えてゐないということに歸因する。しかし、これをも一つつこんで考えますならば、草木が生えないということとは、草木の利用すべき水がない。根をおろすべき土はあつても、その土に水がふくまれてゐないから、けつきよく、土の中の養分を植物は利用することができない、というわけであります。しからばなにゆえ土に水がふくまれてゐないかという、それは雨の降り方が足らぬからである。雨は少々降つても蒸發する方がはげしいから、蒸發によつて失なうところを補いきれない。入りが少なくて出が多い、いつでも赤字を出してゐるといふ次第であります。だからこういう地帯では尻無し川ができる。川の水も蒸發して減るばかりで、補給がつかないから、流れてゐるうちになくなつてしまふのであります。

かりに乾燥地帯とは、雨の降り方の少ないところであるとしても、世界の乾燥地帯というものは、赤道に近いところにあるものもあり、蒙古あたりのように、よほど北の方に偏よつてゐるものもある。また内陸にあるとかぎつたものではなくて、アラビアや濠洲などでは、海のそばから沙漠がひろがつてゐる。これでは法則も秩序もあつたものではない、という印象を受けやすいのであります。しかしそれはきつと、法則をまげ、秩序をみだしてゐる條件が存在してゐるからだ、というように考えていただきたいのであります。大体地球上を一樣のものと考え、たとへばすつかり海で掩われてゐるものと考えますと、緯度三十度あたりに、比較的乾燥した地帯が現われる、すなわち雨の少ない地帯ができることになるのであります。しかるに地球上は海ばかりでもなければ陸ばかりでもない。そこにもうすでに一つの攪亂條件が具えられてゐるところへ、陸地の形というものが、これはどうみても合理的・合法的なものではない。なぜ四國が蝙蝠の羽をひろげたような形をし、北海道が赤いのような形をしてゐるか、などとたづねられても、これはちよつと返答のしようがないのであります。そのうゑ地表の形だつて、山脈の位置や高さ・走向などというものについては、大づかみな原則論は成りたつとしても、個々の場合を律するような法則がはたして得られるかどうか。しかもこういつたことがすべて條件となつて、雨量の分布に關係してくるのでありますから、乾燥地帯が雨の降り方の少ないところであるといふことに間違いないとしても、しからばな

ぜ蒙古は雨が少ないのか、なぜ蒙古から中央アジア、イラン・イラックをへて、アフリカへと、アジア・アフリカを横断する一大乾燥圏が存在してゐるのであるか、という問題になつてきますと、すでにいろいろな學説が呈出されてはゐますが、まだまだ研究の餘地が残されてゐる、といわねばならないのであります。

いづれにしても、地上の大部分のところでは、降水量の方が蒸發量よりも多いのであります。だから、この過剰の水を生物が充分に利用した上で、なおその餘りがあるときは、川にしてこれを海へ放出する。ところで海はなんといつても陸よりも廣いのでありますから、そこから蒸發した水蒸氣の一部をまた陸地に送つてきて、そこで雨として降らせる。こうしてしよつちう海と陸とのあいだで、水のやりとりができてゐるために、生物は生きるに必要な水にことかかない、というのが、まずわれわれの棲まう陸地の常態なのであります。したがつて、降水量よりも蒸發量の方が多くてその極端なところでは、草木の利用するべき水がえられず、ために完全な無任地帯・無生物地帯をさえ生ずる乾燥地帯というものは、陸地の常態をはずれた、あるいは常軌を逸した、いわば一種の惑星的存在である。

草木も生育せず、また人間も棲んでゐないという點で、乾燥地帯の礫原や沙漠にくらべられるべきところを他に求めたならば、極地、とくに南極の大氷原というものが、まつさきに思い浮かんでくるのであります。ここは岩山と氷河よりないので、草木にとつては、根をおろすべき土がないから育たないのである。沙漠のように水さえあれば育ちうるというのは、いささか條件を異にしてゐるのであります。けれどもここに大氷河が發達してゐるということは、極地が寒い、氣溫が低いということを反映してゐるのであるから、ちつともおかしくはない。常軌を逸してはゐない。氣溫の低いときには雨が雪となつて降り、その雪が年々歳々とけ切らずに積もりつゝつて、ついに氷河になるといふのは、當然だということになるのであります。

すなわち原則的にいへば、このように極地で氣溫が最も低くて、赤道附近で最も高くなるというように、緯度に沿つて溫度の傾斜があるということは、自然にみられる秩序の一つなのであります。だから溫度的にみれば、生物にとつて、極地は溫度が最も低いという點で、最も棲みにくい、したがつて最も利用價値の低い土地であるということになつても、この自然秩序の一環をなすものである以上、それは惑星的存在であるというわけにはゆかないのであります。しかるに溫度的にみれば、あるいはこの自然秩序の立て前からいへば、當然もつとよい土地であつてしかるべきはずのところ、雨が少ないばかりに、草木さえ育たぬ地帯が生じてゐるというのでありますから、たとえそこ

にはそうなるべき理由があつたとしたところで、乾燥地帯というものは、一應これをもつて秩序をみだす惑星的存在である、と見なすことができるのでないかと、考える次第であります。

いまこのことを生物の立場、とくに植物の立場から考えてみますと、温量雨量が適當な範囲内にあるかぎり、そこには草も生えるであろうが、いつまでたつても草より生えないといつたようなときは、なにか特別な條件がはたらいてゐるのであつて、その條件をのぞけば、いつかは必ず樹木が生えてくる。すなわち森林の發達をみるのであります。もちろんこの森林はどこでも同じ類型のものではなくて、熱帯には熱帯特有の森林が見られ、温帯には温帯特有の森林が見られるというように、森林そのものの配列にもまた一つの秩序が認められるのであります。とにかくこの地上では、降水量の方が蒸發量よりも多いという氣象的常態に對應して、極地のような温量の乏しいところをのぞけば、地上の大部分は、植物的には原則として、森林に掩われるのが常態であると考えてもよいのであります。しかるに乾燥地帯といわれるところには、その中心部に草木の生ぜぬ裸地もあるけれども、また一方では御承知のように、樹木の生えてゐないただの草つ原が、廣大な面積にわたつてひろがつてゐる。これは惑星的存在としての乾燥地帯が、この森林で掩われるべきであるという原則を、みだしてゐる證據である。そしてこれは、さきほどのべましたのと同じ説明法に

よるならば、その上に、一人前の樹木がそだつにたるだけの水がふくまれてゐないから、樹木はそだたないのであるけれども、草や灌木ならなんとかそだつにたるだけの水がふくまれてゐる、ということになるのであります。もちろん雨が少ないためにこうなるのであることは、さらに雨の少ない乾燥の中心部に至れば、そこはもはや草や灌木の生育さえ許さぬほどに、土が水をふくまなくなるからお解りであろうと思ひます。

雨が少ないということも、これをもう少し詳しくわしくみてみると、蒙古の草原などは、年によつては相當雨の多く降ることもある。雨でなく、雪のかたちをとつて、たくさん降ることもあつて、そんな年には、家畜がえさに困つて、つぎつぎに倒れてゆくという、蒙古人の生活にとつては、恐るべき打撃の一つである、雪害の生ずることもあるであろう。しかしまた、その反對に、雨や雪の非常に少ない年もあるから、一年だけをみたのでは、樹木がそだちそうなものだと思われ場所でもこのようなひどい早魃の年のことを考えると、實際には樹木のそだつ見込みがないのである。だから、雨が少ないといつても、その少ない雨が毎年平均して降つてくれるのだつたら、まだしも有難いのであるけれども、それが不平均に降る、年によつて雨の降り方に、いちじるしいむらがある、というところに、また一つ、乾燥地帯の特徴がある。惑星的存在としての乾燥地帯の、手におえな

さが、こんなところにも認められるのであります。

こういうわけで、植物の立場からいえば、必らずしも樹木の方が草本よりも高等であるというようには、一概にいえないのであります。ただ植物の自然利用乃至は土地利用という点からみますと、植物生産量の大きい森林というものは、生産量の少ない草原よりも、けつきよく植物的な土地利用のすすんだ、植物の生活状態を現わしたものである。だから生産とか土地利用とかいうことを持つてくれば、植物の立場において、森林となるべき土地は、いわば地價の最も高い一等地であり、草木の生育さえもゆるさぬ乾燥地帯の礫原や沙漠は、利用價値のない最劣等地ということになるのであります。ところで乾燥地帯の存在は惑星的だといいましたが、そうだからといって、この惑星的な乾燥地帯の攪亂の結果、一等地のまん中に、無生物的な最劣等地が突如としてひろがるといふようなことはなく、森林的な一等地と沙漠的な最劣等地とのあいだには、この兩者をつなぐ中間的なものとして、そこに草原的な中等地の見いだされるということは、攪亂は攪亂であつても、單に無秩序な混亂ではない。むしろそこにはこの攪亂に處する秩序が、すでにちゃんと作られてゐるといふように考えたいのであります。これをいかえたならば、植物と乾燥的自然とのあいだには、すでに一種の妥協が成立してゐる。一時的な平和乃至は平衡状態が成りたつてゐる、と申し

てもよいのであります。

これで乾燥地帯にみられる草原の、自然的乃至は植物的位置づけというものが、簡單ながら一應できたかと思つてあります。つまりそれは植物の側からみれば、一種の前哨地帯である。乾燥がいまよりはげしくなつてくれば、それは後退するであろうが、反對に乾燥度が弱まるときには、いつでも前進しようと待機してゐるものであります。そしてひと口に草原といい、前哨地帯といひましても、その草原にまたいくつかの類型があり、前哨といつても、ほんとうの最前線にでてゐるものと、そのあとにつづくものといつたように、乾燥中心をとりかこんで、森林がでてくるまでのあいだには、草原のなかにいく段かの構えができてゐるのであります。その詳しいことについてはまたいつかお話しする機会があるかと思つてあります。

x

植物の土地利用乃至は自然利用というものは、いま申しましたように、自然の状態——とくに氣候状態といつたような無機的な自然の状態——と、すこぶる緊密な關聯をもつてゐますから、植物の

生活状態をみて、逆にその自然状態を判断しようということも、ある程度まで許されてくるのでありまして、これはもともと植物というものが、それだけ無機自然的・物質的な存在である。それだけ自然に依存する點が多く、反対に自然に對して、みづから調節してゆくという能力の、乏しいものであるということに他ならないのであります。しかればこの點で動物というものは、植物にくらべてどちらがつてゐるであらうか、ということをも、つぎに考えてみたいと思ひます。動物というものは植物にくらべて、その種類の數もうんと多いのでありますから、そのなかには實にいろいろなものが含まれてゐる。しかし、自然に對する調節能力というようなことを取りあげ、そしてこれを考えようというのならば、變溫動物と恒溫動物、もつと通俗的にいへば、冷血動物と溫血動物とを區別してみるのも、この問題に對する一つの手がかりを、與えるものであらうと思はれる。

さて恒溫動物にはいる動物といへば、かすかすの動物の中でも、鳥と獸とにかざられてくるのであります。人間もまた動物とみればこの中にはいります。そして、これ以外の動物はすべて變溫動物である。變溫動物というのはその名前の示すように、外界の溫度によつて自分の体温の左右されるものであつて、外界の溫度が高くなれば体温もそれにつれて高まり、それがさがれば体温もまたさがる。この點では植物もやはり變溫的であり、變溫的ということは、要するに一般物質の屬性である。

りますから、生物が變溫的であるということは、それだけその生物が物質的である、逆にいへば、いまだそれだけ無生物的であつて生物的でない、ということにもなるのであります。そしてたしかに、鳥と獸とは、人間をのぞいたすべての生物のなかでも、もつとも新らしい、もつとも進化のすすんだものである、ということができるのであります。それとともに、鳥と獸とは、この恒溫性ということによつて、植物や變溫動物が、その自然は利用できない自然であるとして、見棄ててゐたような土地、たとえばさきにもちよつと申し上げた、南極のような土地にも、棲みつくことに成功した。南極には鳥を代表するものとしてペンギンがあり、獸を代表するものとして海豹があるのであります。

しかし變溫動物の方は、極端に氣温のあがる場所へゆけば、体温があがりすぎて、ために蛋白質が分解し、生活機能がとまつてしまふであらうし、また極端に氣温のさがるところでは、体液が凍結して、ために身体の組織が機械的に破壊されることになるであらう。だから彼らに好ましいところというのは、適當な溫度をもち、しかもこの溫度が年中變わらないようなところである。つまり自分の身体を恒溫にするためには、彼らは外界の恒溫を求めねばならないのでありますから、この點に、外界の溫度の如何にかかわらず、自分の体温を一定にたもちうる恒溫動物と、大いに異なる

ところがあつたわけではありません。

ところでこのような条件を具えたところ、すなわち變温動物の理想郷はどこであるかといひますとそれは熱帯なのであります。熱帯というところ、ひとはすぐに耐えられぬような暑さを想像するようであり、實際はそう温度はあがらない。平均気温はせいぜい二十六七度ぐらいであります。けれども熱帯の熱帯たる所以は、この程度の気温が年中つづく、したがって年中夏であるといふところにあるのであつて、これがまた變温動物からみれば、熱帯を居ごちよくしてゐる最大の条件でなければならぬ。變温動物のみならず、これは植物一般にももちろんあてはまることである。だから熱帯には物すごく植物が繁茂し、怪物のような大きい樹木が生育してゐるばかりでなく、變温動物の方でも、大きな蛇や鱉をはじめとして、あらゆる種類のものがここに集まつてゐる。も一歩進めていへば、ここにゐるかぎりには、鳥や獸もあるいは恒温動物になる必要はなかつたかも知れぬ。恒温動物がほんとうにその恒温性にものをいわせるべき場所は、熱帯外の地でなければならぬ。あるいは、鳥や獸のでてきたところには、熱帯はもう植物と變温動物とで満員だつたから、彼らはいきおい熱帯外へはみ出していつて、そこでその恒温性にものをいわせることとなつたのであろう。かくして、熱帯に鳥獸がおらないわけではなく、また熱帯に蛇や昆虫がおらないわけでもないが、ごく大

づかみに生物の分布を見渡したところでは、よくいわれるように、熱帯が植物と爬虫類以下の變温動物の世界、温帯が獸の世界、寒帯が鳥の世界という世界の棲みわけが、一應成りたつてゐるものとみてよいでありましょう(註)。

ところでもしわれわれが、植物の土地利用を評價するのに、植物的生産量をもつてした如く、動物の土地利用もまたその生産量——たとえば、その動物の重さと一定面積内におけるその個體數の積——といつたもので現わすとすれば、温帯が獸の世界であるといつても、實際はその温帯の中で、常態的な温帯、すなわち降水量が蒸發量より多くて森林が發達するような、温帯の濕潤な部分よりも、むしろ同じく温帯には屬するであろうが、常態的でない、いわゆる感星的存在としての乾燥地帯において、はるかに獸類の土地利用がすすんでゐるのでなからうか、と考えさせられる點の少なくないことは、ここで特に注意に値すると思はれるのであります。そもそも、乾燥地帯は植物的立場からみて、森林がそだたないようなよくない土地であつたから、草原が發達したのである。そしてこの土地を悪くしてゐる原因を、雨の少ないことに歸しておいたのであつたが、雨が少なくなつたつねに乾燥したところというものは、温度的にこれを見ると、気温の較差の甚だしいところであるといふことになる。晝間はさざぎるものなき太陽の直射をうけて、気温もあがるが、地

表の温度になると、も一つ高くあがる。世界で一番氣温の高くなる場所も赤道でなくて、じつは赤道にちかい乾燥地帯であるといわれてゐるのであります。

すると草はよし生えてゐたところで、地上に、あるいは地上からたいしてはなれずに生活しなければならぬ多くの變温動物にとつては、この高温もつらいし、また晝夜の氣温の差がはなはだしきということも好ましくない。それで草原や沙漠では、これをさけるために、用事のないかぎり、なるだけ土の中にもぐりこんで、生活しようとするものがふえる。土の中へもぐると、この温度の變化が少なくなるからである。それにしても變温動物の種類数や個體数が甚だ少ないということは彼らの立場からみても、やはり植物の場合と同じように、乾燥地帯はあまりよいところではないといふことを、現わしてゐるようであります。しかるにこういう利用度の少ない土地へ獸がはいつてきて、しかもここで、他の土地においてよりも榮えるようになったということは、植物や變温動物にない、無機的自然に對する彼らのすぐれた生理的調節能力にもよるものであるけれども、これを自然利用という點から見れば、これは注目すべき土地利用上の價値の轉換である。つまり、植物乃至は變温動物の立場からみて價値の低かつた土地へ、恒温動物たる獸が出てきて、その立場から新たな價値を見だし、新たな價値を興えることとなつたのであります。そしてこの價値

の轉換をやつた獸というのは、いうまでもなく大型草食獸としての有蹄類であり、その中にはいまは家畜となつてゐる、馬・牛・駱駝・山羊・羊といつたようなお馴染みの獸から、その他いろいろな種類の羚羊などがふくまれてゐるのであります。

しからばどうしてこういう獸たちが、乾燥地帯の草原に價値を見だし、そしてそこに棲みつくようになったか。そのくわしい歴史は、もつと化石の研究がすすんだ上でなくてはわからないのであります。しかし、さきに注意しましたように、自然は變つていくことをもつて本性としてゐる。惑星的存在としての乾燥地帯というものも、長いあいだにはその中心が移動したり、あるいはその乾燥の及ぶ勢力範圍に消長があつたりして、ちつとも差しかえないのであります。多分あまり遠くない過去において、乾燥地帯の範圍がもつとひろがつてゐた時代があつたのでなからうか、といふことを考へてみる人も少なくないのであります。たとえば氷河時代の末期ごろに、いまよりも乾燥寒冷な時代があつたと假定してみますと、いまはシベリアの森林をへだてて別かれてしまつてゐる北氷洋岸のツンドラすなわち凍原と、蒙古のステツベすなわち乾原とが、一とつづきになつて、ツンドラ的な獸としての馴鹿が、純草原性の獸と境を接してゐたようなことも、起こりえたのでなからうか、と思われるのであります。いづれにしてもこのような大草原にのりだして、そこを生活の

場とすることに成功した、有蹄類の特徴の一つは、大群をなして遊牧生活をするということであつた。群れの起原ということについても、いいたいことがあります。今夜は割愛して、とにかく群れ生活と大草原の遊牧生活とは、有蹄類において、一つに結びついた生活様式をつくりだしてゐたのであります。草原の獸としてはなお有蹄類の他に、鼠あるいはそれに類した獸も相当見いだされるが、これらは何といつても体が小さい。だからその生産量というようなことになると、やはり有蹄類に、一歩も二歩もゆづらねばならない。すなわち草原の獸としては、彼らは有蹄類ほどに支配的なものではない、と見ておいてもよいであろうと思われる。

x

そこで最後に、この乾燥地帯の大草原へ、人間を登場させることに致したいと思ひます。氷河時代の末期には、もちろんもう人間は登場してゐて、そのころは、これらの有蹄類の他に、すでに絶滅してしまつたが、かのマンモスなどという巨象とも、共存してゐたのであります。ところでこれらの有蹄類も、今日のアジアの乾燥地帯に關するかぎり、馬も駱駝も、野生の群れがあるという報告

はあるけれども、もはやその数はごく少ないものでありまして、みなさんが奥地旅行をなさつて、自動車の上からみられる馬や駱駝の群れは、放し飼いにしてあるから一見野生のもののようにあつても、あれはみな持ち主のある家畜なのであります。そこで人間はいつたいいつごろから、この草原の王者たちを手なづけたものだろうかといふ、家畜の起原といふことが、また問題となつてくるのでありまして、これについてもいろいろ説がありますが、今夜は申し上げてゐるひまがありません。ただここでこの問題に關して、こういうことを一つ注意しておいてもよいかと思ひます。それはよく物好きな人が、狼の子やなんかを拾つてきて育てるように、馬や羊を一匹二匹と手なづけていつて、次第にそれを全般に及ぼしていつた、というようなものでなくて、すなわち人間の生活の中へ獸をとり入れていつたのでなくて、むしろ獸の群れの中へ、獸の生活の中へ人間が入つていつた。群れの生活をそのまま認めて、人間はただ協力者としてこれに参加することによつて、次第にこれを掌握し、支配するようになった。そこにいわゆる人間の遊牧生活の起原が認められるのでなからうか、と考へられることでもあります。

なぜここでこういふことをいつたかといひますと、われわれの現在見るところの人間の遊牧生活として、たとえば蒙古人の遊牧生活といふものを見てみますのに、なるほど蒙古人には蒙古人とし

ての牧畜技術というものも、その發達が認められないわけではないでしょうが、蒙古人の遊牧はその本質的な點においていままお彼らの家畜の、獸としての遊牧から、一步も出てゐないのでなからうか、という印象を受けるからであります。いいかえるならば、彼らの遊牧は、畜群に引きずられた遊牧である。これをも一つ強くいえば、草原の自然乃至は土地の利用という點では、大型草食獸がでてきてその價値の轉換をやつたまま、その價値標準というものは、これらの獸がたとえ家畜にかわつたとはいえ、いまだもとのままの動物的價値標準にしたがつてゐて、そこに少しも人間による、あるいは蒙古人による價値の附加、あるいは利用度の増大ということが、認められないのではなからうか、ということに注意したかつたのであります。支那の農民のことを評して、ある外國人が四千年のあいだ少しもかわらぬ農民だといつたが、蒙古の遊牧民に對しても、やはりこれと同じような批評を興えうるのではなからうか、と思われるのであります。

こうはいつても、わたくしは決して蒙古人をけなしたり、輕蔑したりするつもりはないのである。けれども蒙古人が、たとえすぐれた牧畜技術をもつてゐたところで、これをもつてわたくしは、蒙古人を指して、われわれの用いるような意味での牧畜技術者であり、畜産専門家である、というわけにはゆかぬのであります。たしかに蒙古人が牧畜をやつてゐるといふことは、自然になつた生活様式であるだろう。蒙古人の衣食住をくわしく調べればしらべるほど、それらのものは蒙古の自然なり、また蒙古人の牧畜生活なりにうまく適應してゐることがわかつてくるであろう。しかし、わたくしはこうしたことに感心するまえに、蒙古人がどうして牧畜をはじめ、どうして今日のような衣食住の様式を採用するようになったかを、考えてみたいと思ふのであります。彼らはたして彼らの生活様式が蒙古の自然にかなひ、その自然を利用してゆく上に最も能率的であると考えてゐたであらうか。問題はここにある。

蒙古人の祖先にだつて、農耕を試みてみる機會が全然なかつたとはいえない。しかるに彼らが牧畜に専心するようになったといふのは、牧畜の方が農耕よりも、自然の利用上より合理的であると考へたからではなくて、いわば トライアル・アンド・エラー 試行錯誤の結果として、牧畜の有利さを知つたから、それに固執していつたのである。衣食住の様式や、その他の慣習というものも、もとをただせば大ていは原理的にこれと同じような偶然の經驗の産物である。それを結果から見て、自然によく適應してゐるといつて感心するのなら、動植物の生活だつてやはり自然によく適應してゐるのである。もつとも動植物にだつて、生活をよりよくしようという傾向のあることは、認めておいた方がよいかも知れぬ。しかし、大型有蹄類が草原に榮えるようになったのは、原理的にいへば、やはり偶然の經驗

の蓄積によるものであるといわなければならない。ところで蒙古人がこれを家畜化するようになったということも、また偶然の経験に導かれたものであるとするならば、蒙古人の牧畜がいまなお自然利用という点において、動物的價值標準から脱し切れないであるということも、深く咎むべきではないのであつて、これをいい換えたならば、蒙古人にとつての家畜は、家畜といつてもいままお自然として彼らに與えられた家畜である。だから家畜の自然生活に對する尊重こそ彼ら遊牧民の傳統と見なされねばならない。したがつて家畜による動物的價值標準が、またただちに蒙古人にとつての、價值標準となつてしまふわけでありますから、これではわれわれがいくら雪害にそなえて乾草を貯えろ、傳染病にそなえて豫防注射をしろ、といつてみたところで、いままでもあまり反應のなかつたことも、あるいは當然といわねばならないかと思われる。

つまり蒙古人には自然を改變し、これをあくまで利用しようという氣がなかつた。あるいは氣があつたかも知れないが自信がもてなかつた。自信がもてないということは、自然に對する知識なりその原理法則といつたものが、しつかりとつかめてゐないからである。蒙古人の家畜は自然としての家畜であつて、家畜としての家畜でないといつたことも、もし自然としての家畜に對する正確な知識がつかめてゐたならば、その家畜はいつまでも自然としての家畜にとどまつてはゐないで、い

まごろはずでに、家畜としての家畜になつてゐたはずである、という意味を含んでゐるのであります。だから家畜の増産などというまゑに、まづ蒙古人の頭をきりかへ、蒙古人に新らしい自然の見た方を教えることが必要なのではないかと思われます。もつともこうした必要は蒙古人ばかりにあるのではなくて、四千年の農民である漢人に對しても、やはり同様に必要なであります。漢人が蒙古人の土地を侵害して、その耕作限界を次第に奥地に向かつて進めつつある、という事態は、しばしば問題として取り上げられてきたところでありますが、これは決して想像されるような、蒙古人と漢人との心理的對立を、前提としたものではないのであります。ただ悲しむべきは、一方が四千年の遊牧民であり、他方が四千年の農民であるために、お互いにその傳統を墨守することは知つてゐるが、ほんとうに自然を利用してゆくということを知らないものである。

しからば自然の利用とくに土地利用の原則といつたようなものがあつて、ここは農耕をやれ、ここは牧畜をやれ、というように指示できるものであろうか。ごく大づかみなことでよいならば、原則が必らずしも無いわけではない。たとえば南方へゆけば水稻の二毛作乃至は三毛作が可能となるが、そういうところでは、けつきよく單位面積内の收容人口が多くなるのは當然であります。換言すれば、一定人口を支えるべき生産が、比較的小面積の土地で足りるということである。ところが

だんだん北方になるにしたがつて、二毛作が一毛作となり、裏作がきかなくなる。それには氣候の制約ということがまづ考えられるのであるけれども、土地ということに着眼すれば、土地の生産量の減退であり、したがつて一定人口を支えるのに、それだけ多くの土地を必要とする。しかるに耕作に要すべき土地が廣くなるということは、労働力を餘計要するということになりまずから、いきおい南方における集約農業が、北方では粗放農業に變わらざるを得ないとともに、労働力の不足を補うものとして、ここに畜力というものが考えられてくるようになる。そうなると、また家畜を飼うべき土地というものが必要となつてくるから、一定人口を支えるに要する土地は、いよいよ廣くならざるを得ない。

ところでこのような有畜農業がある限界までくると、もはやそんなにしてまで價値の低い悪條件の土地で、人間の食う植物の栽培に専念しないでも、その主要作物を家畜の食う植物に切りかえて生産の目標を畜産品にもつていつた方がよいといふところがでてくる。いわゆる酪農とは、こうした土地に見いだされる、農業を加味した牧畜を指したものであります。すると蒙古において、どうしても耕作のきかぬような土地は別として、耕作もきき牧畜もできるといふ土地で、蒙古人と漢人とが、それぞれ牧畜と農耕とを固執して、一方は他方を顧みないといふことは、これを土地利用と

いう立場から見れば、なんら意味のないことであつて、それよりも兩者を結合して、酪農を發達させた方が、けつきよく土地利用度を高め、また肉や牛乳や、バターやチーズといつたような、われわれの必要物資を多量に生産することになるといふことを、蒙古人も漢人もお互いに知らないところからくるのであります。

それはまた、土地利用上からみて、乾燥地帯の缺點の一つである、年によつて雨のふり方にむらがあるということに對しても、一步すすんだ有效な手のうち方である。といふのは、農業と牧畜との二本建てが、すでに一種の多角經營として、危険率を分散させる可能性をもつばかりでなく、實際に酪農として、飼料作物の栽培に主力を注ぐことになれば、雨の少ない乾燥のつよい年がきて、たとえ人間向きの作物の收穫が駄目になるようなことがあつても、飼料作物の方は、實のらなくとも家畜の役にはたつから、乾燥による被害の程度がうんと緩和され、せつかく作つたのになんにもならなかつた、というようなことはなくてすむのであります。もちろんまた、その栽培によつて、冬季の飼料が確保されてくるのであるから、これによつて雪害を、ある程度まで少なくしうるのはいふまでもない。そして、この飼料作物の栽培という酪農の農業面を、農業に達者な漢人が主として分擔することになつてもよいわけでありませう。

なお最後に、念のためも一ついつておきたいことは、たとえ蒙古の牧畜に農業をとり入れ、酪農的に發展さしてみたとところで、そのもとをなす家畜や飼料作物が、動物でありまた植物である以上は、彼らの自然に對する價值標準を、根底から變えてしまうというわけには、ゆかぬであろうというのであります。動物や植物はいくら馴化してみても、しよせん人間のつくつた機械のようなわけにはゆかない。彼らの自然に對して持つてゐる最小限度の要求は、これをかなえてやらねばならないということであります。すなわち動物や植物という生き物を相手にしてゐるかぎり、人間が自然を改變し、自然を支配するといつても、そこにはつねに但し書がついてゐる。蒙古といつてもその蒙古には、どこまでも蒙古の植物的自然や動物的自然の香りが、消えさらない蒙古である、ということになるのであります。もちろんわれわれの利用すべき自然としての動物や植物は、すこぶる古典的な存在ではあるけれども、利用すべき自然はなにも動植物にかざられてゐるわけではない。

そこでかりに地下の埋藏資源というものを考えてみるのであります。すなわち草原や沙漠の下から、鐵や石炭がたくさん見つかつたとする。するとここで蒙古の自然に對する價值標準というもの

が、また一變するのではないかというように考えられる。植物的價值標準において低く評價された草原が、動物的價值標準で高く評價されるようになったといつても、人間の社會はいままで農業を中心として展開し、發展してきた。つまりどちらかといへば、植物的價值標準にしたがつてきたといえるのであります。だから、その中からはついに一つの都會をも發生さすに至らなかつた、遊牧社會の蒙古は、いつまでも邊疆扱いにされてきたのであります。しかるに鐵・石炭といつた地下資源の開発によつて、蒙古の草原にかりに重工業をおこすというようになりますと、開發する相手は生物でなくて物質であり、これを處理するのは直接人間のつくつた機械と人間の呈供する勞働力とである。そして人間も機械とともに、自然に制約されるところの甚だ少ないものである。換言すれば、人間や機械にくらべて自然に制約されることの多い、動物や植物の立場といつたものを媒介しなくても、これははじめから人間の立場で、人間の意志と技術とで、ことを押しすすめてゆけるのである。すなわちそれは純粹な人間の價值標準にしたがつた自然の利用である。そこに考えられる重工業的蒙古というものは、それこそはや植物的自然や動物的自然を完全に超越した、人間の創作にかかる蒙古である、といえるのでなからうかと考えられるのであります。

重工業的蒙古などといつても、それがはたして實現性のあることかどうか、わたくしなどにはよ

くわからないのでありますから、ここではただ一つのユートピア論として聞いていただければよいのであります。これによつて蒙古草原における自然と生活とのあいだの交互關係が、植物的立場から動物の立場をへて、最後に純粹な人間の立場に移つてゆくとき、そのあいだに見られるであろう變化が、一應生態進化史的に説明できたとすれば、それでわたくしの今晚の話はその目的を達したことになるのであります。

註 熱帯産の哺乳類と温帯産の哺乳類との種類數の比は六九對三一である。しかるにこの比は爬虫類では九對一〇になる。(Rahn, O. 1939 Amer. Nat., vol. 73, p. 37)。

遊牧論

遊牧というのは牧畜の一形態である。したがつて牧畜がただちに遊牧であるということは、一般的には成り立たないのであるけれども、ただ蒙古の牧畜乃至は蒙古人の牧畜をいう場合には、われわれは子供のときから、その牧畜がただちに遊牧であるというように、考え慣らされてきてゐるのである。

しからは遊牧とは、どんな型式の牧畜であるだろうか。遊牧というと、だれでもが最初に考えやすいことは、いわゆる水草を求めながら、家畜の群れを追つて、あてもなく放浪の旅をつづけてゆく、ジプシー的な生活であろう。廣い中央アジアを隅から隅までさがしまわれれば、どこかにそんな生活をしてゐるものがゐないともかぎらぬ。しかし、遊牧というのは、原則的にはこのような流浪の生活でなくて、たとへば生活のために、しよつちゆう移動することを餘儀なくされるにしても、

その移動には地域的にみておのづから一定の限界がある。つまり、一定の遊牧圏あるいは遊牧地といつたものが、存在して然るべきでなからうか、という考えを持つに至つたのは、わたくしが、動物社會學に興味を覚えるようになってから後のことであつて、とくに、この問題に關しては、熱帯地方の森林にすむ猿の社會生活の、詳細な觀察報告が、わたくしに少なからぬ示唆を與えてゐると思ふ。

すなわち、わたくしはこれらの報告(註1)で、熱帯の森林の梢上に棲むある種の猿が、一つの群れをつくりながら、枝から枝をわたつて、食物となる果實をあさつて歩く生活を知つたのであるが、彼らは幼児を養う目的、あるいは食物を貯藏する目的で、他の動物がつくるような巢というものが全然なくつくらない。したがつて、彼らには巢によつた、多少とも持続的な定住生活というものが全然なく、一年中動きまわつてゐるにもかかわらず、その移動の範圍が、一定の地域内に局限されてゐるというのであるから、ちよつと奇妙に感ぜられないでもない。しかしこれは、そういつた生活をしてゐる猿の群れが、ひろい森林の中に、ただ一つきりより存在してゐないと考へるから、もつと自由に歩きまわれればよかりそうなものだ、ということにもなるのであつて、實際は、森林がひろければひろいだけ、そこにはそれだけ餘計に、同じような群れの存在することが、豫想されねばならな

いのである。するとそこにおのづから、群れと群れとのあいだの交渉ということが生まれてくる。そしてもし、他の群れと無益な鬭争をするよりも、できるかぎり鬭争を避けることによつて、自分の群れの平和さを希求するのが、生物にもともとそなわつた、一種の種族維持本能の現われであるとするならば、他の群れの存在を無視して、みだりに歩きまわるかわりに、お互いが繩張りをつくつて、その繩張りの中に落ちつくといふことは、それが當然の歸結であると、いつてもよかりそうに思われるのである。

ではこのように、一つの動物群が、一定地域内にあつて、食物を求めながら移動をつづけて行くといつた生活様式を、なんという名で呼んだらよいであろうか。猿の群れは、たしかに家畜を飼つたり、その家畜を追つて移動したりしてゐるわけではない。けれどもわたくしは、こういつた生活様式を指して、しばらくこれを遊牧生活(nomadism)と呼びたいのである。それはもはや牧畜とは、一應はなれた意味における遊牧であり、しかもこの場合は、動物の生活様式としての遊牧である。しかし、この動物の生活様式としての遊牧を基礎にして、やがてそのうえに、人間の遊牧生活が打ちたてられるようになれば、そこにはすでに、その遊牧生活が牧畜に展開する、あるいは牧畜に結びつく契機が、含まれてゐるものといひうるであらう。

そこで當然、牧畜の起原論にも觸れねばならないことになるが、牧畜の起原は、また同時に家畜の起原ということでもある。だからわたくしも、この邊でいよいよ猿の群れのすむ、熱帯の森林をはなれて、われわれの研究の舞臺である、内陸アジアの草原に、眼を轉ずることとしよう。そしてそこで猿のかわりに、われわれがまづ見出した動物は、放牧された家畜の群れであり、家畜を別とすれば、^{ホウヤシ}黄羊の群れであつた。いづれにしても、それらはみな群れであり、そのうゑ家畜に數えられる五つの動物——馬・牛・羊・山羊・駱駝——も、野生の黄羊も、ともに動物としては、同じ一つの有蹄類に屬する、いわば近しい間がらのものばかりである。

熱帯の森林と乾燥地帯の草原、猿と有蹄類といへば、ひとは餘りにもかけ離れすぎてゐて、比較が困難なところから、その一つをもつて他を律するようなことは、とうてい望みがないと考へないだらうか。わたくしといへども、この點では類推の危険をおおいに感ずるものである。しかし熱帯林の猿と、ステツペの有蹄類とが、おなじ遊牧という生活様式を採用してゐたところで、このような生活様式を成りたさせるべき條件が、それぞれに揃つてゐるのであつたならば、なにも不審がることなどはないのである。そして、ここで注意しておきたいと思ふのは、すでに氣づかれた方もあゝるかも知れないが、動物における遊牧といふ生活様式が、多少とも持続的な群れ生活というものに、

結びついてゐるといふことである。つまり、群れという持続的な集團が生活してゆくためには、その集團の生活を保證するに足るだけの食物が、つねに用意されてゐなければならぬのであつて、この問題さえなんらかの方法で解決がつかならば、群れは必らずしも移動しなくとも、固定生活を營んでゐてもよいはずである。動物のなかでも、蟻や蜂のような昆虫の集團生活に、このような固定生活の例がみられるであらう。

けれども自分で食物を生産する手だてのない大動物が、群れをつくつて生活しようということになると、一地にながくとどまつてゐたのでは、たちまちにして食物の缺乏を來たすであらうから、群れの移動といふことが、どうしても必要となつてくる。だから遊牧生活は、こういつた動物においては、群れ生活を實現するために、當然要請されねばならない一つの生活様式であるだらう。そんなら孤獨生活をしてゐる動物に、遊牧という生活様式が考へられないであらうか、といへば、それは考へられても一向差しつかえないのであるが、ただ孤獨生活者と遊牧との結びつきは、群れ生活者の場合ほどには緊密でありえない。いいかえるならば、そのあいだに必然性が乏しいということではなければならぬ。

では大型動物のうちでも、どうしてある種の動物は孤獨生活をし、他の種の動物は群れ生活をな

すのであろうか。原則論として、肉食動物が群れ生活をしないのは、上にのべたような、食糧問題の解決しにくいことにもかかつてあると思われるが、また一面では、肉食動物の子供は、生まれてしばらくは獨りあるきができない。しかるに群れというものは、しよつちゆう移動してゐなければならぬものとすれば、こういう獨り歩きのできぬ子供を、親と一緒に運んで歩くふうがなにか無いかぎり、親子ともに群れから落伍しなければならぬであらう。そんなことでは持続的な群れというものの、成り立ち難いのはもとよりである。だから獨り歩きのできぬような子供をかかえても、カンガルは、これを腹の袋に入れて運べればこそ、群れをつくることのできるのである。同様に、猿はその子供を背中にのせても運ぶことができるけれども、また他の動物とちがつて、猿の四肢が物を握めるようになってゐるといふことが、その子供を母親の胸にしがみつかせるのに役立つ。母猿が子猿を胸につけて歩いてゐるところは、たぶん動物園でおなじみの光景であるに相違ない。

しかしこれらの動物にくらべると、生まれおちて三十分もすれば、もうすぐ獨り歩きのできるようになる有蹄類の子供は、もともと群れの生活に適するように出来上つたもの、とも見做せるのでなからうか。昭和十三年には、わたくしは自動車で内蒙古の草原を廻つたのであるが、そのときしばしば、競走でもするかのごとく、自動車と並んで走つた放牧馬群のなかに、當才の仔が入りまじ

つて、負けず劣らず走つてゐるのを見て、これでこそ群れがつくれるのである、自動車だから馬の走るのが無意味なようでも、これを狼に追われてゐるところと想像してみれば、この仔馬が一人前顔して参加してゐる馬群の行動に、いかに合目的性が含まれてゐるかを會得できると思つた。

しからはすべての有蹄類が、群れをつくるかというに、必らずしもそうではないのである。だいたひ孤獨生活をする動物であるといつても、同種の動物がよれば、異種の動物の場合とちがつて、そこには集團のかたちづくられる可能性が、多分に認められるとともに、群れをつくる動物のうちにも、くわしく見れば、その群れの構成が、持続的安定的であるというよりも、斷續的浮動的であるといつた方がよいもので、いろいろな段階のものがあつてよいのである。たとえば蒙古に多い黄羊の群れなどは、わたくしがいままでに見たところでは、あまり安定的なものとも思われない。つまり群れの構成にたえず變動があつて、大きな群れになつてみたり、またそれが小さくわかれてみたりしてゐるのでないか、そしていま、こういった浮動的な不安定な群れに對して、さきにも述べた熱帯林の猿の群れのような、持続的な安定した群れというものを、も一度考えてみると、その群れの構成員の大多數は、その群れの中に生まれ、その群れの中で大きくなつたものであるばかりでなく、同時にまた、彼らは彼らの後繼者とその群れの中にのこしてゆく。だからかりに、その構成

員はつぎつぎに變わろうとも、群れそのものは一つの群れとして、いつまでもつぎ得るところは、あたかもわれわれ人間における、家にもたとえられるべきものであつて、このような群れになるともはやそこに、一つの傳統なり個性なりを認めうるのでなからうか、とさえ思われるとともに、そういうたものの具體的な現われの一つが、そのうえにその群れの生活を成りたさせてゐる遊牧地の獨占であり、その獨占の主張ではあるまいか。すると、群れはつくつてゐても、その群れが持続的でなくて浮動的な黄羊のようなものにあつては、その群れの遊牧地というものも、また必ずしも一定してゐないであろうということになる。それは遊牧とはいいい得ても、もはや規準的な遊牧型式からはづれたものでなければならぬ。

乾燥地帯のステッペには、熱帯の森林にみた猿の群れのように、持続的な群れをつくつて、規準的な遊牧生活を営なむ有蹄類はゐないであろうか。中央アジアにつらなる廣い草原のどこかには、いまだに野生の馬・驢馬・駱駝・羊がすんでゐるといふ。牛もヤクでよければ、チベットにはその野生のものがある。けれどもこういつた野生大型獣の生活様式は、いろいろな點でその調査が困難なため、いまのところはごく斷片的なことしかわかつてゐないのである。だから彼らの習性に立脚して、個別的にその家畜化のあとを辿るといふようなことは、いまのわれわれとして、とうてい望

みがたいところであるが、蒙古で家畜として飼育されてゐる五種の動物のうち、牛をのぞいた他のものは、いづれも野生種がをり、しかもその野生状態において、馬・羊・駱駝は、そのいづれもが群れをなしてゐるといふことを手がかりとして、わたくしはこの邊で、牧畜の起原ということにやささか觸れてみたいと思ふ。

牧畜の起原を論じたものには、二種あつて、一つは人間が狩獵生活から發展して牧畜生活に移つたと考へる、いわば狩獵起原説(註4)であり、他は農耕生活から派生的に牧畜生活がはじまつた、あるいは農耕生活の存在を前提として、はじめて牧畜生活が可能となると考へる、農耕起原説(註5)である。いづれにしても、牧畜が最初から牧畜として存在した、ということとはちよつと考へられないうが、そうかといつて、牧畜の起原が一元的なものと考へる必要もなさそうである。狩獵からはいつた牧畜も、農耕と結びついた牧畜も、どちらもあつてよいとわたくしは思ふけれども、ただこの内陸アジアの乾燥地帯にみられる牧畜だけを、問題として取りあげられる場合には、どうも狩獵起原説の方に歩があるのでないだろうか。

面白いことに、この内陸アジアの牧畜地帯は、その一面においては農耕地帯と接觸してゐる。た

たとえば内蒙古では、牧畜地帯の南に農耕地帯がつづくが、その農耕地帯とは、それから南の方にかけて、全支をおおい、さらに南方諸島にまでも及ぶ、膨大な農耕地帯の一前線である。しかるに他の一面において、この牧畜地帯は、狩獵地帯とも境を接してゐるのであつて、その推移の模範的なものを、わたくしは先年歩いた滿洲の大興安嶺で、認めることができた。そして、大興安嶺とは、われわれがそれを通してシベリア的なものを擷もうとしたごとく、まさしく、全シベリアに擴がる森林的狩獵的な世界の、一尖端を形成するものであつた。

牧畜地帯のこういつた關係位置を考へるとき、農耕地帯から眺めた牧畜は、とかく農耕起原説に傾くであろうし、反對に、狩獵地帯からみた牧畜は、狩獵起原説となる懼れがあるのでなからうか、とも考へられる。それからまた、農耕起原説のうちには、從來の公式的な、狩獵——牧畜——農耕という發展段階説(註2)に、反對せんがための反對といつたところが、感ぜられないでもない。しかし、われわれが大興安嶺のオロチオンを調査した結果からいふと、牧畜から農耕に發展するといふことはいざ知らず、狩獵から牧畜に發展するのは、まことに自然的であつて、條件さえそなわつてゐたならば、狩獵生活者というものはみな、牧畜生活者に轉向したのでなからうか、という印象をうけたほどである(註7)。

では、その條件というのは、どんなことであらうか。大興安嶺の狩獵生活者が、その狩獵の對象にしてゐる動物は、リスのように純粹な商品用の動物もあるけれども、自家用とくに食糧源となる動物といへば、やはりノロ・アカシカ・シベリアエルクジカ(ハンドハン)などという、有蹄類でなければならぬ。ところでこういつた森林ステツペ乃至は森林を棲み家とする有蹄類は、同じく有蹄類ではあつても、森林的な環境が、大きな群れをつくつて行動するのに不適當なためか、常態ではほとんど群れらしい群れをつくらぬ。そして、持続的な安定した群れをつくらぬといふことは、さきにのべたとおり、これらの動物の遊牧圏そのものが、一定してゐないことを意味するであらう。だから森林の狩獵生活者は、まづ第一に、彼らのねらう動物を捜しもとめねばならぬ。獲物をもとめて彼らはその居を轉々と移すであらう。けれどもそこにはつねに、獲物にあぶれるかも知れないという危険率がつきまとつてゐる。それが狩獵というものの性格なのだから、仕方ないようなものの、できるならばこういつた危険を少なくして、生活の保證をより確實にしたいと願うのが、ふつうではなからうか。

そこでもし、獲物にあぶれたときの用意として、平素から獲物となるべき動物を何頭か手許に保管しておいて、必要に應じてこれを殺すことができたならば、狩獵生活の危険性が減殺されるのみ

か、そのときはすでにその狩獵生活のうちに、牧畜生活の入りこんできてゐることを認めねばならないであろう。おそらく仔連れの雌を射つて、その仔を生捕りにするような機會も、少なくはないであろうと思われるから、そういうつた子供のと看から馴らしたものを殖やして、大興安嶺のオロチヨンが、いまごろはノロヤエルクジカを、ある程度まで家畜化してゐてもよかりそうなものではないか。それにもかかわらず、彼らの所有してゐる家畜が、彼らの棲まう森林とはもともとあまり縁のない、ステツペの馬か、そうでなければツンドラの馴鹿であるというのは、どうしたわけであろうか。

おもうに、彼らがこんな他所からの借り物で、しんぼうしなければならなかつた第一の理由は、彼らがその生活場所としてえらんだ森林のなかに、家畜となるに適した動物がゐなかつたからであろう。われわれはどんな動物でも、馴らせばかならず、わけもなく家畜化するものとは思わない。仔獸を馴らして大きくすることはできても、それが繁殖しないようでは、單なる馴化であつても、いまだ完全な家畜化とはいいがたいであらうし、かりに繁殖が可能であつても、そうして繁殖した畜群が、人間と共同生活を營なむような性質のものでなくては、その家畜化も牧畜といふところまでは發展しがたいであらう。つまり人間からはなれて野生にかえりたい、もとの古巢の自然にかえ

りたい、という傾向の強い動物は、家畜となるに適した動物とはいえない。あるいは家畜とするには、骨の折れる動物であるといつてもよいのである。

すなわち、まづ動物自身に、家畜となるに適した性質をそなえてゐるかどうかが問題であり、またそうした適性に乏しくても、その家畜化のために人間が骨を折りさえすれば、すべてがすべて望みのないものでもなからうと考へるのであるが、ただ、獸を追つて轉々と居をかえて行かねばならないような狩獵生活者にとつては、それだけの骨折り、あるいは骨折りに値する施設を望むことが難しいであらう。だから第一の條件として、そこに家畜化するに適した動物を得ることができなかつたならば、その狩獵生活は自己發展的に牧畜生活に移る契機を、もはやもたないものと見做してもよいのではないかと思ふ。そして森林地帯の狩獵生活者が、家畜化するに適した動物を求めえなかつたということは、じつは、そこに群れをなす動物がゐなかつた、ということに結びついてゐるというのを、わたくしは主張したかつたのであつて、それはつぎに、われわれが舞臺を、森林からステツペへ移すとき、おのづから明らかとなつてくるであらう。

いまわたくしは、われわれのステツペに、まだ牧畜といふものの始まらないときのことを、考え

てゐるのである。そして、さきにも述べた如く、廣い内陸アジアの一部には、いまでも野生の馬や駱駝があると、ころから推測して、おそらくその頃には、いまみる家畜の群れにかわつて、こういった野生の有蹄類が、ステツペを我がもの顔に横行してゐただろうと考へるのである。ただし、どういふ種類の動物がゐたのかは、なおはっきりとは斷言できない。おそらく野生の馬や羊は、どこにでも居つたであろう。野生の山羊はどちらかといえば山岳地帯に、野生の駱駝は鹽生植物の多いゴビ地帯に、多かつたであろうという程度までは、われわれの現在もつてゐる、彼らに關する生態の知識から、立論しても間違ひはあるまい。ただ牛だけはヤク以外には、内陸アジアからその野生種が知られてゐないばかりでなく、ヤクと現在われわれのみる家畜としての蒙古牛とのあいだには、直接的な系統上のつながりがあるとも考へられないから、牛に關するかぎり、ここではしばらく觸れないこととしたい。

羊に關しても、ステツペに野生の羊が居つたと考へることに對しては、疑いをはさむひとが少なくないようである。羊も元來は山羊と同じように山岳地帯をえらぶものらしく、野生の羊は大い岩山の住民と相場のきまつたものであるが、トルキスタンの方へゆくと、いまでもステツペにすむ野生の羊があると、わたくしは内蒙古のステツペにだつて、もとは野生の羊がすんでゐた

可能性は、充分にあるだろうと思ふのである(註11)。家畜になつた現在の羊をみて、こんなおとなしい動物が、野生であつたら、みな狼にでも食われてしまわないだろうかといつた人もあるが、家畜となつて人間の保護をうけるようになったために、もともとおとなしい動物が、一そうおとなしくなつたということも、考へられるであろう。おとなしい動物がみな猛獸の餌食となつてしまうものなら、トルキスタンのステツペ羊だつて、とつくの昔に絶滅してゐてよかりそうなものだ、といわねばなるまい。

さてこういつた牧畜以前のステツペに、最後に人間を一枚加へることとしよう。いうまでもなくその人間は、狩獵生活者として、ここに登場してきたのであり、その狩獵の對象はこれら野生の大型獸であつた。そこには、もちろん黄羊もいまと同じように野生してゐたであろう。そして黄羊は群れをつくりといつても、その群れが浮動的な不安定な群れであるかぎり、その遊牧圏というものはつきりしないであろうことは、すでに注意したとおりであるから、ステツペの狩獵生活者も黄羊のようなものを追つてゐたのでは、森林の狩獵生活者と本質的に異なるところは、どこにも認められないのではないか。

そこで森林の動物や、ステツペの動物といへども黄羊などにはみられなかつた、持續的な安定し

た群れをつくり、したがつて規準的な遊牧生活をなす動物の存在を、わたくしはここに考えてみようと思うのであるが、これはいまのところ、まだ仮定の域を脱しきらないものであることを、一應お断りしておこう。そしてこのために、牧畜以前のステツペに生活してゐたと推定される野生動物のうちから、わたくしが馬と羊とを選んでくことをお許し願ひたいのである。それはすなわち、ステツペに野生した馬の群れなり羊の群れなりが、かの熱帯林の梢上に生活する猿の群れと同じように、血縁的・地縁的な一つの社會單位として、群れの維持と同時に、その群れのよつてたつ一定の遊牧圏を維持して、みだりに他を冒さないという、理想的な群れ社會をなしてゐたものと假定することに他ならない。

そしてもし、こういつた群れが實在してゐたと假定するならば、これに對して狩獵生活者の側には、いかなる變化が生じてくるであろうか。まづ、この群れは、それが結びつけられてゐる一定の遊牧圏から、逃げ出すおそれがないであろう。したがつて狩獵生活者は、狩獵における第一前提ともいふべき、獲物の搜索乃至は發見という負擔から解放される。彼はもはや獲物にあぶれるかも知れないという心配をする必要がない。群れはかならずその遊牧圏内のどこかに居るにきまつてゐるからである。その遊牧圏というものが相當廣い地域にわたつてゐて、群れの存在を確かめるのに手

遊牧論

間がかかるようなら、彼はその群れについて群れの存在を見失わぬように移動をつづけることもできるであろう。そうなると、群れの遊牧にしたがつて動く人間の方も、知らぬ間に一種の遊牧形態をとつてゐる。それは牧畜以前において、すでに遊牧してゐるとさへいえるのでないか。換言すれば、人間の遊牧は、動物の群れの遊牧に誘發されて、すでに狩獵時代からはじまつてゐるものといふことができよう(註5)。

こうした群れの遊牧圏内に入りこんで、群れと一緒に行動してゐるあいだに、その狩獵生活者は、いつしかその群れが自分に與えられた群れであり、自分の所有にかかる群れであると考えようにならないだろうか。そして、もちろん一般の狩獵生活者にあつても、彼の獲物となるべき動物を尊重して、濫獲をつつしむという傾向は認められるであろうけれども、このように所有意識が明確になつた場合には、いま一段とその傾向が強められるにちがいない。しかも、こういつた群れが一つならず存在してゐるとすれば、そのそれぞれの群れに結びついて、その群れを自分のものと考え、狩獵生活者の複數的存在が、また當然豫想されてよいことになるから、そうなるとその所有意識は、もはや他の者に對する占有意識でさえある。それは他の者に對して自分の所有物の尊重を要求するかわりに、自分もまた他の者の所有物を尊重しなければならぬ立場にたつことである。かくして

ステツペの狩獵生活者は、ある意味では狩獵本來の自由さを奪われ、いまは互いに自分の所有に歸した群れの維持をはかるといふことに、心をくばらねばならないのである。

ここで一つの疑問が呈出されないだろうか。その疑問というのは、こういう段階に立ち至つた狩獵生活者が、はたして群れを維持しつづ、しかもこの群れのみによつて、その生活を保證されてゐたであろうか、といふことである。この點で、馬の群れをつかんだ狩獵生活者が、それだけで生活し得たとはちよつと考へにくい。馬は繁殖力が低くばかりでなくて、その生長速度もまたおそいからである。しかし馬の群れだけでなく、もし彼が羊の群れをも同時につかんでゐたとしたならば、かりに雌を百頭含んだ一群から、年に四、五十頭の増加は、わけもなく得られたであろうから、生活を考へる以上は、馬群の獲得よりも羊群の獲得といふの方が、あるいは先決問題でなかつたかとも思われる。いづれにしてもここまでくれば、もうその動物の群れと狩獵生活者との關係は、純粹な獲物と狩獵者との關係を超えて、家畜と牧畜者との關係にほぼ接近したものであることは、疑いの餘地がないであろう。けれどもまだこの段階にあつては、狩獵生活を清算し切れなかつたであろうと思はれることは、彼らがおそらく、自分の所有に歸した動物を、できるだけ殺さぬようにしたいといふ願望から、食糧源の一部の獲得を他の野獸、たとえば黄羊のようなものの狩獵に期待

してゐたといふことも、また考へられてよいと思はれるからである。いづれは牧畜にうつるにしても、まだその一歩手前をさまよえる、遊牧的な狩獵生活とも呼んだらよいであろうか。

では、こうした遊牧的な狩獵生活が、どこで遊牧的な牧畜生活に變わると考へたらよいであろうか。牧畜生活と呼ぶためには、たぶん狩獵には含まれてゐない純粹な牧畜技術——たとえば搾乳であるとか去勢であるとかいつたような技術——が、その生活に取り入れられてくるようにならなければならぬ、とわたくしは考へるのであるが、それは、けもの群れと狩獵生活者との關係が、次第にへだたりのないものとなり、その相互依存性が次第に濃くなつてゆきさえすれば、いつかはこうした技術をうけ入れうる状態にまで到達するであろう。この場合に、こうした技術を彼らの社會内で生みだすか、あるいは他の社會から傳播してきたものをそのまま受け入れるかは、しいて問題とするには足りないであろう。要は、ステツペの狩獵生活者が、ステツペという環境と結んでおぼえて成りたつてであろうと思はれる、有蹄類の群れの生活圏にはいりこみ、個々の動物でなくて、群れそのものをつかんだところに、森林の狩獵生活者には見失われた、狩獵から牧畜への發展契機がひそんでゐたといふことを、わたくしは主張したいのである。

もちろんそうだからといつて、わたくしは、牧畜の起原が、このような経路をへて、狩獵から發展する以外に、他に道がなかつたといわうとするものではない。現在家畜となつてゐる動物をみると、その家畜以前の野生時代に、必らずしもそのすべてが群れをなしてゐたとは考えられない。だから彼らのなかには、定着的な農耕社會で、個別的に馴化せられて、次第に家畜化したようなものがあつても、すこしも不思議ではないし、またその邊に農耕と結びついた牧畜の起原が考えられたところで、あえて異議を申し立てるつもりもないことは、すでにのべた如く、わたくしが牧畜起原の一元論者でないことから明らかである(註9)。けれどもたいいていの人には、動物の群れというもののはつきりしないためか、かりに牧畜以前のステツペに、野生の動物が群れをなして生活してゐたことを認めるにしても、それらの動物は一應狩獵生活者の手によつて狩りつくされ、一應なにもなくなつたステツペを考えたいやうで、そこへどこからか牧畜生活者が、個別的に飼ひならした家畜をもつて、入りこんできたといふように考えたのであるが、こういう考えの一番の缺點は、おとなしい動物はみな猛獸に喰ひころされてしまふだらうという、あの簡單なものの考え方にあるのであつて、もしこの考え方のとおりに自然が動いてゐるものなら、おとなしい動物がみな喰ひころされてしまふとともに、こんどは猛獸の方で喰うものがなくなつて、餌さにこまつて絶滅しな

ればならないであらう。

これと同様のことは、獲物と狩獵生活者とのあいだにもいえるわけであつて、この説を是認するなら、いまだき、大興安嶺にしるどこにしる、地球上に狩獵生活者なんてもののあることがおかし、といわれなければならないとともに、ステツペを問題とするかぎり、會つてここにすんで野生の動物——黄羊をのぞいた野生の動物——をかりつくしたと考えられる、狩獵生活者の行方が、説明できてゐないことを知らねばならないであらう。もつともわたくしの説といえども、現在はお假定の上になつてゐる。その假定が氣に入らないといわれればそれつきりの話であるが、しばらく蒙古のステツペをはなれ、蒙古のステツペにおける牧畜の起原をはなれて、ひろく世界を見渡してみると、蒙古の場合には假定にすぎないことも、よそでは現實の事實として認められるというようないふことがないであらうか。

そしてこの點で、わたくしの乏しい知識のなかから、わたくしがここに、北米のプレーリーと呼ばれる大草原を背景として、そこに展開したアメリカインディアンと野牛との關係を紹介しておくことは、無駄ではあるまいと思ふ(註8)。すなわち、インディアンは野牛を家畜化してゐない點では、いまだ狩獵の段階にあつて、これを牧畜の段階にあるものとは見做しえないにもかかわらず、

その野牛の群れの一つ一つは、どこそこの誰れの群れというように、ちゃんとその所有者、したがってその狩獵の権利者がきまつてゐたというから、その關係は、わたくしの假定したような、けもの群れとその狩獵生活者とのあいだの、理想的な關係から、多少ははずれたものであつたにしても、わたくしのいわゆる遊牧的な狩獵生活という状態を現わした實例として、取り上げることができるであろう。もつともインディアンが、この段階まできてゐながら、どうして牧畜生活に移れないのかという疑問がでてくるかも知れないが、それはおのづから別問題であつて、乾燥地帯の大草原と結びついて、そこに野生の有蹄類の群れが成立したというところまでは、アジアとアメリカとで同じであつたが、ただ、インディアンがアメリカのブレイリーに見いだした野牛という動物は、たぶん蒙古人の祖先がアジアのステツペに見いだした野生の馬や野生の羊にくらべて、どこか馴れにくいところでもあるのであろう。わたくしとしては、いまの場合、むしろこの野牛が野牛のまま、家畜化されるに至つてゐないところに、値打ちを見いだしてゐるのであつて、ここにわたくしの假定が傍證を求めようとしてゐるのは、あえて牧畜の起原論のみにかぎらず、すべて現在にたつて、史料のない過去の發展史を編纂しようとして試みるものの、方法論としては當然そこに據らねばならない、一つの常套手段に訴へたにすぎないのである。

牧畜の起原論が、意外に長びいてしまつた。しかしこれは、今日われわれが見る蒙古人の牧畜——とくに遊牧という名で知られてゐる彼らの牧畜を、理解するためには、どうしても試みておかねばならぬ一つの準備工作であつたということが、やがて明らかにされるであらう。ここに牧畜の一形態として取りあげられた遊牧というのは、家畜を放牧しながら、牧畜生活者が、ある地域内を移動してあるく、家財道具のみならず、家まですつかり持ち運んで、移轉をつづけてゆくことを、いうのであるから、チャハル盟にみられる蒙古人の場合のように、すでに固定生活にうつつて、移動を試みない牧畜は、嚴密にはこれを、もはや遊牧とは稱しがたいのである。そして、このことは、遊牧が蒙古人の牧畜にとつても、そのすべてでないことを示すものとして、注意に値するのであるが、シリントン盟その他では、なお一般に遊牧が、彼らの唯一の牧畜型式であり、おそらくチャハルで、現在固定生活をしてゐる蒙古人たちも、もとは遊牧をやつてゐたものと考えてよいのであらう。つまり遊牧をもつて、蒙古人の牧畜の基本型と考えることに、異論はあるまいと思う。

そこで問題は、どうして蒙古の、あるいは蒙古人の牧畜に、遊牧という型式が基本型として採用されてゐるのであるか、というところにはじまる。そして、この解答を、いまままで多くの人は、家

畜に對する食糧としての草の過不足ということに、求めなかつたであらうか。大畜群を一定の土地で飼えば、やがて食物となるべき草の不足をつけるときが、やつてくるにちがいない。そうすればそのときには、新しい牧野を求めて移動するより他なかうとは、まことに考えやすいことわりであつて、わたくしはじめは、遊牧の意義をどのように簡単に考へてゐたのである(註10参照)。

だから一口に牧野といつても、その牧野の種類にいろいろあつて、草のよいところも悪いところもあるとすれば、同じだけの頭数の家畜をもつてゐても、草の悪いところにすむものは、草のよいところにすむものよりも、餘計に移動しなければならぬはずである。草のよし悪しは、地形や土壤の關係で、局所的にも存在するけれども、内蒙古全體を見渡すならば、やはり雨量の多い周邊部ほど草はよく、反對に雨量の少ない、乾燥のつよい、より内陸的な中心部ほど、草が悪くなつてゐることは、これは事實である。そうとすれば、周邊部にすむものほど移動の回数は少なくてすみ、中心部にすむものほど、それは多くなくてはならない。わたくしが、昭和十四年ならびに昭和十九年の、二度の調査旅行にえらんだ調査の主題目は、かくして、内蒙古に認められる牧野の大類型を設定することと、設定された牧野の類型的な相違に應じて、そのうえにたつ人間の生活様式——この場合ならば牧畜様式——にも、はたしてここへのべたような相違が、見いだされるかどうかを確かめることにあつた。

かういつた目的に沿うため、わたくしが昭和十九年度に選んだ調査路線のうちには、周縁的な、もつとも雨量の多い、したがつてもつとも草のよい、太僕寺右翼旗から、内陸の、乾燥中心と考えられる、外蒙のゴビ地帯を目指して、東南から西北にひいた一線がふくまれてゐた。そしていま、この路線を歩いた結果として、内蒙古のステツペは、類型的にはこれを三つの型にわち得られることが、ほぼ確實となつたのである。すなわちその一つは、周縁部の雨量の多い、乾燥の程度の弱い地方に認められる、シバムギモドキをもつてその代表種とするような草原であつて、草が密生してゐるばかりでなく、高さもよくのびて、平均五、六十種に達し、シバムギモドキのほとんど純群落が現出してゐるようなところでは、その生産量も乾草にして、ヘクタール當り一五〇〇疋を下らない。これに對して他の一つは、中心部の雨量の少ない、乾燥の度合いの強い地方に認められる型であつて、背の低いハネガヤの一種をもつて、その代表種と見做したいと思ふのであるが、ここでは草の背が低いばかりでなくて、その密度も低く、草の株と株とのあいだに、ひろく地肌が露われてゐる。生産量も乾草にして、ヘクタール當り五〇〇疋を切るか切らぬかといつたところである。前者を重草原とすれば、ここはすでに輕草原である。そして周縁部の典型的な重草原と、中心部の

典型的な軽草原とのあいだに、いま一つの型を認めようと思えば、認められないこともないのである。それは重草原の代表種たるシムギモドキも、軽草原の代表種たるハネガヤの一種も、もはやそこでは優占することのない中間地帯で、ヨモギの類が比較的が多いところから、しばしばヨモギ草原とも呼ばれることのある、一種の中間草原を認めることである(註12)。

しからはこうした牧野の類型的なちがいに応じて、そこに見られる牧畜の様式にも、ちがいが認められたであろうか。それにはその牧畜が遊牧という型式をとつてゐる以上、さきにも述べたような移動の回数ということが、まづめやすになりはしないだろうか。そうすればチャハルの蒙古人に移動しないものがあるということも、一應はそこが草がよいからであるということによつて、説明されるであろう。そして、この點に關するわれわれの調査の結果を申せば、移動はチャハルの中でも、砂丘地帯にはいると現われはじめる。それも冬營地と夏營地とのあいだの移動であるから、年に二回の移動ということになるが、それから東スエト旗の、中間草原までくると、移動が三回になつて、冬營地と夏營地のほかに、秋營地というものが出てきた。われわれの通つた頃には、秋營地にあるものが多かつたのである。それがさらに、タムチン・タラの無住地帯をこえて、それより先の軽

草原へはいると、年四回乃至五回移動するというものが多くなつたが、われわれはついに國境までのあいだで、七回以上移動するといふものには出くわさなかつた。

いまこれだけを見たのでは、草のよいところで移動の回数が少なく、草のわるいところではそれが多かるべきであるという要請が、はたしてうまく満たされてゐるのかごとくである。そして、われわれの出あつた蒙古人は、なぜ移動するのかというわれわれの問いに對して、異口同音に、草が悪くなつたから草のよいところへ移動するのだ、と答えた。この答えに安心してしまつてもよいものだろうか。いやいや、われわれは、彼らのもと居つたところの草がいかに悪くなり、また彼らのこれから移ろうとするところの草がいかによいかを、確かめてみなければならぬ。そこまで確かめてみるのではなくては實態調査とはいへぬであろう。

さて調べてみると、じつにいろいろ意外なことがわかつてきた。まづ彼らの中には、移動するといつても、その移動距離の、豫想に反して小さいものが、少なくないのである。だいたいわたくしは、草のよしあしにかかわらず、家畜の放牧距離というものが一定と考えてゐる。それは羊のように、毎日家へかえつてくそ家畜を考えてゐるのであるが、羊ではこの放牧距離がせいぜい六軒ぐら

いであろう。つまり家を中心として、この六料を半径とした圏内で、羊は毎日草を食つてゐる。だから草の悪い土地だと、この圏内の草を羊がはやく食つてしまうから、早く移動しなければならぬ、というように考えてゐたのである。そしてこの考えからすると、草が悪くなつた放牧地をみすてて、草のよい新しい場所へ移動するときには、新しくえらぶ放牧圏が、悪くなつてみすてた放牧圏と重なるようでは意味をなさないから、理論上は、少なくとも十二料以上の移動が必要といふことになるであろう。しかるに蒙古人の多くは、草が悪くなつたといつて移動しながら、大ていへはもとの放牧圏内のどこかへ移るにすぎない。距離にして、二料三料と動くのはまだよい方で、秋營地と冬營地とが百米ぐらゐり離れてゐなかつたり、極端なものになると、夏營地と冬營地との距離が三十米というようなものさえあつた。

もつとも一地に長くどまつておれば、家のまわりの草は、家畜が食うよりも、むしろその踏みつけのために次第に荒らされるであろう。しかしそれなら、チャハルで固定生活をしてゐる蒙古人の場合にだつて、同じように起こることではなければならぬ。夏營地が丘の斜面にあつて、冬營地の方は、そこから百米もはなれた谷間の、ラクダガヤの繁みのなかにあるなどという例をみると、冬になつて雪が積もつたとき、ラクダガヤを家畜の飼料にするという意圖が、含まれてゐるようになる。

思われるが、また冬の寒風をさけて、人間がラクダガヤの繁みを求めるといふ、どちらかといへば家畜本位でなくて、人間本位の移動のようなどころさえ、うかがわれぬではない。

放牧圏が一定であるという考えからはまた、もし草の状態が同じであつたならば、その圏内に放牧された家畜数が多ければ多いほど、それだけ早くその草をくいあらしめてしまうことになるから、したがつて家畜の大所有者は小所有者よりも、頻繁にその放牧地をかえねばならないといふことが、要請されるであろう。われわれの調査によると、この傾向はたしかに現象としては認められたのであるけれども、この場合も移動の理由を、はたしてわれわれの豫想したような、家畜と草との關係に歸してしまつてよいかどうか。そこにもなお疑いをさしはさむ餘地が残されてゐるように思われるのである。たとえば家畜の大所有者といふものは、家畜管理の必要上からいつても、その家族数が多い、すなわち一軒の家の労働力が多いのが普通である。だから移動もやろうと思えば簡単にできるが、労働力の少ない、家畜の小所有者は、同じように移動したくてもできない。したがつて結果からみれば、大所有者の方が餘計に移動してゐることもなるであろう。こういった小所有者のうちには、大所有者にくつついて、その家畜を大所有者の家畜の中に入れ、みづからすすんでその管理の勞を買つてでてゐるものもあつて、こんな場合には寄生的な小所有者の方も、大所有者と一

緒に移動する。しかしこんな関係が成りたつてゐなくても、立寄れば大木のもとというやつで、なにかうまい汁を吸おうと思つて、大所有者のそばへは、つねに小所有者がたかろうとする傾向が認められる。そして蒙古の習慣として、知らないものが傍らにきて、包^{ポウ}を張り、放牧をはじめても、文句がいえないというのであるから、大所有者の方でそれがうるさいと思ふならば、たかつてくる小所有者たちをまくために、再々移動をくりかえすより他に手がなからう。すなわち、牧畜とはなんの関係もない、こういつた社會的條件も、また大所有者の移動回数を多くするのに手傳つてゐるといえるのである。

放牧圏を一定とみれば、草がよくないほど餘計に移動しなければならぬ、という考えからすれば、同一類型の牧野のうえでも、冬になつて雪のために草がかくれた場合には、夏よりも餘計に移動しないと、話しが合わないことになるであらう。われわれがタムチン・タラ以北にゐるとき、すでに雪は降りつもつて、ステツペは白凱々の雪野原と化した。この雪のために、かくれてしまつた牧草の量は意外に多く、被覆度によれば約六〇パーセント以上の減少に相當した。すなわち雪のふる前は五〇パーセントの被覆度をもつた牧野も、この雪のために、一夜にして二〇パーセントの被覆度よりない牧野と、同價値にまで顛落したことになるのである。だから雪がつもつたのちは、

被覆度二〇パーセントの、草のあまりよろしくない輕草原にゐると同じつもりで、冬のあいだに一回や二回の移動は、當然試みる必要があると思はれるのに、蒙古人たちは、もうここは冬營地だから、春になるまで動かないといつて、一向に涼しい顔をしてゐるではないか。もつとも積もつた雪があとで消えてなくなることもあるが、また家畜が雪を足でかき分ければ、その下には草のあることだから、顔面通りの價値の減少ではないであらう。それにしても、ここでもまた、われわれはその理論的考察が、蒙古人の遊牧の現實にぶつつかつて、無慚にくだかれたことを知るのである。

そして、最後にわたくしの持ちだす例こそ、もつとも皮肉なものの一つであらう。草が悪くなつて移動するものなら、つねに新しい、家畜によつて荒されてゐない牧野を求めてゐるところにこそ、遊牧生活者の面目があるのでないか。しかるにある蒙古人の家族が、このあいだまで、そこで放牧してゐて、たぶん草が悪くなつたといつて立ち去つたそのすぐあとへ、他の蒙古人の家族がやつてきて、そこで放牧をはじめたという例に、われわれは一際ならず出くわしたのである。そして、この後からきた蒙古人もまた、聞けばかならず、草が悪くなつたから引つ越してきたというにちがいないであらう。だからわれわれは蒙古人が、一たいなにを標準にして草のよし悪しを判断し

てゐるのか、もうまるで見當がつかなくなつてしまふそうだ。そして、このことをさらに強調しておくために、ここにもう一つ例をひかして貰おう。わたくしはさきに、チャハルの蒙古人が固定生活をしてゐるのは、その草がよいからだといつておいたが、内蒙古中で、おそらくチャハル盟の東南部とくらべて、草のよい點ではこれにまさるとも劣るまいと信ぜられる、シリントン盟のウジムチンの蒙古人たちが、固定生活どころか、内蒙古で、あるいは一番移動回数が多い遊牧生活を營んでゐるかも知れない、ということをも、われわれはたいどう解したらよいであろうか。ウジムチン旗は、わたくしも一度通つたきりで、くわしくは調べてゐないが、その北部地方では移動回数が、年に百回にも及ぶといわれる。これではいくら力んでみても、牧野のよしあしによつて、遊牧の移動回数がきまるものとはいへない切れないのである。

では蒙古の、あるいは蒙古人の牧畜型式として知られた、遊牧なるものの意義を、どこに求めるべきであろうか。この點に關して、わたくしは、遊牧というものが、なんらの合目的性も持たずに成立したものは、やはり考えたくない。むしろそれは合目的性をもち、意義をもつてゐた習慣が、その後において、その合目的性なり、意義なりを失なつた、そしてただ習慣として残つてゐるとい

うところが濃厚なのでなからうか、と考へてみるようになった。ここで、わたくしはいま一度、牧畜以前の、遊牧的な狩獵生活における遊牧を考へたいのである。もちろんわたくしは、その場合に、すい分思ひ切つた理想化を試みてゐるかも知れない。しかし原則的にいつて、その遊牧は、動物の群れに誘導せられた遊牧であつた。それだけで、その遊牧の意義は充分であつた。ではそれが、牧畜技術の導入によつて、遊牧的な牧畜生活にかわつたとき、ただちにその意義を見失つてしまふものだらうか。

そこでちよつと横道にそれるようだが、遊牧する牧畜生活者と牧野との關係、つまり遊牧する人間の移動回数と牧野の草のよしあしといつた關係の中間項として、「應遊牧する家畜」といふものを考へてみたいと思ふ。わたくしはさきほど論じた放牧園では、羊のことを考へてゐたのであるが、羊という家畜は厄介な奴で、羊群にはどうしても一人の管理者——羊飼ひ——が必要である。なぜ必要かというに、狼から羊群を護るといふことも考へられるけれども、羊群というものは、草を喰ひに出て行くときはひとり出ていつて、あとから羊飼ひが追つかけて行くのであるが、かえるときにはひとりでは歸えられない。だから羊飼ひの方で夕方になれば、羊群を家の方へ追わねばならぬ。それが羊飼ひの一番重要な仕事であつて、これが一番重要な仕事であるから、また羊飼ひとい

うものは、子供でもつとまるのである。

しかし、ほつておいたら家にかえらないのは、羊ばかりでなくて、馬でもそうである。牛も仔牛を家においておくと、母牛は乳をのましに夕方かえつてくるが、仔牛をつけて出せば歸えつてこない。そして、このように野原に家畜を飼いつばなしにして、そこで自由に繁殖することをもつて、もつとも純粋な放牧と考えられないだろうか。けれども放牧が純粋になるほど、一方ではその牧畜性が減少してゆくことも、また否定しがたいであろう。純粋に放牧された家畜が、みづから求めて歩く遊牧圏というものは、もはや野生状態における群れの遊牧圏と異なるところがないであろうか。この點では野生の群れの遊牧についてあるく遊牧的な狩獵生活者の遊牧と、純粋に放牧された家畜の群れの遊牧についてあるく遊牧的な牧畜生活者の遊牧とのあいだに、ほとんど差がなくなつてしまふ。すなわちこの場合の牧畜生活者は、家畜の遊牧に誘導されて、彼みづからも遊牧してゐるといわねばならぬ(註6)。

しからばこの場合に、野生の群れなり畜群なりは、なぜ移動してあるくのであろうか。草が悪くなつたからであらうか。馬でも牛でも一とところに縛りつけておくならば、そこから動くことを許された範囲内の草を、きれいに、なめたように食つてしまふものである。けれども自然状態にあつ

ては、彼らは決してそのような食い方をしない。彼らはつまみぐい式に、あるいは間びき式に、一面の草の中から拾いぐいをしてあるく。まことにもつたない食い方のようなだが、考えようによつては、こういう食い方だからこそ、草の方はほとんど被害を蒙らないで、いつまでも彼ら動物の生活に適し、彼らを養いうるに足る良好な牧野の状態を維持してゆけるのである。もちろん動物の方の数がべらぼうに多くなれば、このような食い方でも、牧野の状態は悪くなるものと見てよい。しかし自然状態では動物の繁殖力に一定限度があり、またその行動力に一定速度があつて、群れの大きさとものに、おのづから一定の大きさがきまつてくるとともに、また群れの行動半径というものも、おのづからきまつてくる。そして、かくしてきまつた群れの遊牧圏というのが、その群れを養つてなお充分に良好な状態を維持しうるに足る廣さの牧野から成り立つてゐたであらうというのが、生態學で考えるところの自然の均衡とか、自然における動物と植物との調和とかいうこと他ならない。そしてこの場合もまた、遊牧的な狩獵生活が行われてゐる場面と、純粋な放牧による、遊牧的な牧畜生活が行われてゐる場面とで、異なるところはなはずである(註10)。

すると純粋な放牧という、原始的な牧畜生活において行われてゐた遊牧は、草が悪くなつたために移動してゐたものではないのである。わたくしはその時代がどのくらいいつつたものか知らない。

しかしこの時代の移動乃至は遊牧という生活様式が、ステツペの牧畜生活者の骨の髄まで浸みこんで、彼らが次第に家畜を馴致し、次第にその家畜を彼らの家の周囲に引きよせるようになったときにも、なお彼らはむかしの習慣からはなれることができずに、むしろそうすることによつてかえつて、彼らの馴致した家畜に對する一種の奉仕として、彼らは遊牧をつづけた。そこに草が悪くなつたから、家畜のために移動するという、おそらく彼らの社會の傳統的な口實も生まれたことであつたらう。こうして彼らの社會の傳統となつた、遊牧という生活様式が、いつしかその本來の意義あるいは目的を見うしなつたところに、かのウジムチンあたりに見られる、百回以上の移動といつたような現象も生じてくる。そうならばそれはもはや、遊牧のために遊牧し、移動のために移動してゐるといふ點で、一種の適應アダプテーションの行きすぎであるだらう。

しかし、遊牧という生活様式が骨の髄まで浸みこんでゐたのは、牧畜生活者ばかりでなくて、じつは彼らの馴致した家畜もまた、そうであつたといふことを、忘れてはならない。だから、蒙古人にすれば家畜に奉仕するつもりで、遊牧してゐるのかも知れないが、その結果においては、遊牧がつづけられてゐるかぎり、彼らの家畜から、その野性としての遊牧性を、いつになつてもなくするわけには行かぬであらう。つまり蒙古人の放牧が、この家畜の遊牧性に奉仕してゐる以上、家畜に

引きずられて、いつまでたつてもその遊牧はやめられないといふことになつて、牧畜者と家畜との交互關係が、それ以上に發展できない。そういうところで發展がとまつてゐるのが、蒙古の牧畜なのである。

すなわち、わたくしのこの遊牧論に誤りのないかぎり、蒙古の、あるいは蒙古人のとつてゐる遊牧という牧畜型式は、牧畜としてはごく原始的な、純粹な放牧時代の遺風を、ただ習慣的・慣性的にうけついでゐるだけであつて、これが決していままでに信ぜられたような、蒙古のステツペに適した唯一の、また完成された牧畜型式とはいへないのである。また、このようにすでにその目的を見失なつた形態から、われわれの望むような近代的な牧畜が、自發的に展開してくるものとも思えない。夏營地と冬營地とのあいだの三十米の移動をさして、あるひとは、少なくとも年二回の衛生掃除としては役立つてゐるだらう、と皮肉つた。わたくしといえども、蒙古人が牧畜のみで立つてきた人間として、その牧畜の細部にわたつては、いろいろすぐれた點をそなへてゐることを認めるが、蒙古の牧畜の飛躍的な發展を願うとき、その第一歩として、まづ傳統的な蒙古的遊牧の低調さを明らかにすることが必要であると感ずる。それゆゑ遊牧といふことが、いかに發生のふるい、人間的特質の少ない生活様式であるかといふことを明らかにするのが、この遊牧論の主目的であつた。し

たがつて、蒙古の牧畜が、現在の遊牧形態からいかにして脱却し、どのような新らしい形態に進化すべきであろうか、という問題に關しては、いづれ稿を改めて論ずるつもりである。

(一九四五・一・五 西スニトにて)

遊牧論への註釋

遊牧論への註釋というかたちで、書きくだされたものであるけれども、これは、奥地旅行中にしたためた前文の不備をおぎなうとともに、またこれによつて、その後における考えの發展を、明らかにしようとしたものである。だから、この註釋の2から11までには、これをつづけさまに讀んでもらつても、苦しからぬだけの一貫性が與えてある。そういう書きぶりがしてあるのである。ことさらにそうしたわけではなかつたが、なにしろ張家口を追われて、北平に假寓し、原稿もはたして持つてかえられるかどうかからないというときに、纏められるだけのものを纏めて、これを文字にのこしておこうと思つて筆をとつたら、こんなものになつた。これも敗戦の思ひ出につながる。遊牧論としては、もう一度体裁をととのえて書き改められるべきときが、こなくてはならないであらう。なお歸國後に筆をとつた「草原にのこしてきた問題」(學海、第三卷第六號所載、昭和二十一年九月)

も、やはりこの註釋のしつきとして、参照していただければ幸いです。文献については、畏友石田英一郎君に負うところが多かつた。あつく謝意を表する。

註一 熱帯の森林の樹上にすむ、猿の群れの社會生活をとりあつた論文というのは、しぎのよしのものである。

Carpenter, C. R. 1934 A field study of the behavior and social relations of howling monkeys (*Alouatta palliata*). *Comp. Psychol. Monog.*, vol. 10, pp. 1—158.

Carpenter, C. R. 1935 Behavior of the red spider monkey (*Ateles geoffroyi*) in Panama. *Journ. Mammal.* vol. 16, pp. 171—180.

Carpenter, C. R. 1940 A field study in Siam of the behavior and social relations of the gibbon (*Hylobates lar*). *Comp. Psychol. Monog.*, vol. 16, pp. 1—212.

註二 三段階説というのは、最初ギリシャのデイケーアルクが、太初の樂園時代の次に牧畜時代が、次に農耕時代が起こつたというにはじまる。これを西紀前五五年に死んだローマのルクレチウス(詩人にして哲學者)が、樂園というところを、最も原始的な狩獵民の經濟形態に置きかえたのである。その後この經濟發展の三段階説は、あるいは前史時代史が舊石器時代人を狩獵民、新石器時代人を牧畜民、青銅器時代人を農耕民と解したことなどによつて、いよいよその支持を得、古典時代より一九世紀の終りまで、ついに歐洲の學界を支配する學説となるに至つたのである。

これに對して一八世紀の終り以來、たとえばアレキサンダー・フォンホルトや、ヒルデブランド、ワイツ、バツハオーフェン、フリードリッピ・ラツツェルなどが、各自の立場からこれを批判し、例外的な場合を例證したが、民族學的な經濟研究の立場から、詳細な論駁をしたのは、エドゥアルト・ハーンである(加茂儀一、家畜文化史、三五七—三四〇頁參照)。

註三 ハーン (Hahn E. 1896 *Die Haustiere und ihre Beziehung zur Wirtschaft des Menschen.*) はかくの如く、從來の定説をくつがえして、家畜の農耕起原説を唱えたのである。しかし、この説の根據には二三の重要な假定があることを忘れてはならない。その第一は、野生動物が馴化されるためには、これを馴化する人間が定住生活をしてゐなければならない(加茂、二

七頁参照。したがつて、野生動物の馴化は、非定住的な狩獵民によつてでなくて、定住的な農耕民によつて行われたものである、という假定である。第二は、かくのごとき定住的な農耕民によつて、最初に家畜化された家畜は、牛——犬をしばらくのぞき——であり、しかもこの家畜化は、パピロニア地方の、ハックパウ Haakbau をやつてゐた農耕民によつて行われたといふことである。そのうえハーンは、この家畜化の動機を宗教的なものに結びつけて考へてゐる。だから、牛を農耕に使用したり、牛乳をしばつたりすることが、その家畜化の目的だつたのでなくて、そういつたことは、家畜化の結果として生じた副産物である、といふのである。第三は、遊牧民の起原といふことであるが、遊牧民といふのは、農耕民と同じように家畜をもつてゐる。しかし彼らの生活の場所は、農耕に適しないステツペであり、そこで彼らの飼つてゐた家畜は牛ではなくて、山羊であつた——ついで羊も飼うようになったが。ところでハーンの考へによれば、さきにあげた第一の假定により、この山羊や羊を馴化したものもまた、非定住的な狩獵民でなくて、定住的な農耕民であつたとしなければならぬであらう。すなわち、山羊や羊を家畜にもつた最初の遊牧民といふのは、狩獵民から発生したものでなくて、農耕民から派生した。換言すれば、山羊と羊をもつて、農耕地からそれに接續したステツペへ移つた農耕民が、遊牧民にかつた、とい

うのが、遊牧民の起原に對するハーンの假定である (Hahn, E. 1891 Waren die Menschen der Urzeit zwischen der Jagerstufe und der Stufe des Ackerbaues Nomaden? Das Ausland, Bd. 64, pp. 481—487)。

かういふ假定にたつてゐたから、ハーンはまた、遊牧民といふものは、はじめから、狩獵民のように自給自足の生活は、できないものときめてゐた。農耕民から出た彼らは、狩獵民とちがつて、家畜の乳を利用しなければ、彼らの生活はなりたない。すなわち彼らは、牛乳にならつて、山羊の乳や羊の乳を用いるようになったとき、はじめて農耕から獨立した遊牧民になりえたのである、といふことも、ハーンの農耕起原説には含まれてゐるが、それとともに、農耕民から出た彼らは、はじめから穀物なしには生活できなかつたであらう、という考へがあつた。そこで彼は、農耕地からステツペへ、この穀物その他の生活必需品をはこぶ馱獸としての驢馬が、やがて遊牧民のあいだに取り入れられ、つぎには、同じ目的のために駱駝が取り入れられた。しかるにこの駱駝が乗用にも供せられるようになるに及んで、ついに乗用獸としての馬が、遊牧民のあいだに登場するに至つた、と考へるのである (Hahn, E. 1913 Die Hirtenvölker in Asien und in Africa. Geogr. Zeitschrift hrsg. von Hettner, 19 Jahrg., pp. 303—319, 369—382)。

がハーンの家畜發生史であるが、駱駝や馬の馴化にしても、これをどこまでも非定住的な遊牧民が、自然から獲得したものでなくて、まづ定住的な農耕民が馴化したものを、遊牧民が借用し、それが次第に狩獵民にまでも傳播して行つて、ついには狩獵民も遊牧民化するようになるというところに、彼の農耕起原説の特色が認められるのである。

これを、われわれの立場から批判することを許されるならば、彼の説は單一起原的 *monogenetic* などところに、最大の缺陷が認められるといわねばならない。なるほど牛の馴化、したがつて牛の牧畜は、ハーンの考えたように、農耕民によつてはじめられたかも知れない。家畜の先祖と考えられてゐる原牛 (*Bos primigenius*) は、野牛 (*Bison*) のようにステップ地帯の動物でなくて、もともと森林地帯の動物であつたように考えられるし、またビルマ方面で飼つてゐるガヤール (*Bos frontalis*) は、明らかに森林地帯の動物であるから、森林地帯に居住した、プリミチブな農耕民との結びつきを考へることは、あとでのべる豚の馴化と、森林地帯のプリミチブな農耕民との關係についての、クノーの考へを普衍すれば、可能でないことではないであろう。けれども、純粹なステップの動物である、駱駝や馬の馴化までも、定着した農耕民の行爲に歸しようというところに、行きすぎがあると思われる。

それからもう一つ、ハーンの考えてゐる牧畜發生の舞臺は、西アジアとアフリカに限られてゐて、中央アジアも北アジアも、この舞臺の中心からは外れてしまつてゐることが、はなはだ氣になるところである。もちろんそれは、バビロン——エジプト——ギリシャ——ローマとつづいた、西洋史ではないかも知れぬが、一種のヨーロッパ的な歴史の見方に、忠實ならんとしたものであろうが、それだけにアジア的ではない。ハーンの眼にはアジアはおそえものにすぎないのである。そして、こういう點で、彼の農耕起原説は、汎バビロニズム *Panbabilonism* への一つのコントリビューションであつたともいえるであらう。

ところで、偶然このハーンの説を支持することになつたのが、一九〇四年にトルキスタンを探検したパムペリーである。彼はアナウの發掘物を調べた結果、つぎの二つのことを結論した。その一つは、アジアにおいては、農耕段階は遊牧段階に先行してゐたということ、いま一つは、動物が家畜化される前に、中央アジアに住んでゐた人間は、その生活様式が、定住して農耕を營なむものと、非定住で、一定の地域内を移動しながら狩獵するものとの二つに、はつきりとわかれてゐたことである (*Punpelly, R. 1908 Exploration in Turkestan, vol. 1, p. 67*)。そしてここで、パムペリーは、この非定住的な狩獵民が、定住的な農耕民から、家畜その他を受け

とつたものと、假定してゐる (Ibid, p. 72)。すなわち、パムペリーの考えでは、農耕民から家畜をうけとつた狩獵民が、遊牧民となるのであるから、この點で、遊牧民を農耕民から派生したものと考えるハーンとは、遊牧民の起原ということに關しては、一致しないところがあるけれども、農耕が牧畜よりも古く、また野生動物の馴化乃至は牧畜が、非定住的な狩獵民によつてではなくて、定住的な農耕民によつてはじめて行はれたとみる點では、彼もまたハーンと同じように、牧畜の農耕起原論者でなければならぬ。

しかも彼の説には、これを根據づける發掘物があつた。その時代が、西曆紀元前約八千年と考へられる、トルキスタンのアナウの最下層からの發掘物中に、麥つぶが含まれてゐたにもかかわらず、同層からはまだ家畜の骨が一つも出てこない。だから、農耕の方が牧畜より古いということもいふのである (Ibid, vol. 2, pp. 435—437. ただしその年代に關しては、はじめに考へられた *Prehistoric Times* — Peake, H. 1927. *The beginning of civilization*. Jour. Roy. Anthropol. Inst, vol. 67, p. 34. などヨークは、アナウだけでなく、メソポタミヤのササの發掘物においても、定住してすでに農耕を營んでゐたと思はれる古代人が、家畜の骨を残してゐないことを指摘してゐるが彼自身は、必ずしも家畜化の農耕起原説を主張するものではない) — Ibid, p. 35 以下 Peake, H.

1928 *The origins of agriculture*, pp. 16—17。しかし同層からは家畜の骨がないといふだけであつて、家畜でない獸の骨ならば、もちろんその中にも含まれてゐたのである。野生の牛の骨も含まれてゐたといふのである。しからは牛の骨だけを見て、それが野生の牛の骨であるか、それとも家畜化された牛の骨であるかを、はたして的確に斷定しようとする方法があるのであるか。

アナウから出た骨をしらべたデュールスト Duerst によると、骨に現われた家畜化の證據といふのは、なによりも、野生のものにくらべて骨が小さくなつてゐること、多孔質で軽くなつてゐること、であるといふ。そしてアナウのより上層の發掘物中からは、その最下層から見いだされたような、大きな牛の骨は全然出てこないゆゑに、この大きな牛は、それと一緒に出てくる他のすべての獸と同じように、野生してゐたものにちがいない、と判斷されたのである (Pumpelly, *op. cit.*, p. 360)。しかし、家畜化されてから長年月を経るうちには、骨も小さくなり、軽くなり、また角もだんだん短かくなるといつた傾向が、認められてよいであろうが、家畜化されて間なしのものにまで、こういった特徴が、はたしてはつきりと出てゐるであろうか。つまり家畜化されたとたんに、骨の變化がおこるのでなかつたならば、骨だけ見て、たとえその骨が野生のもの

のと同じであつたにしても、それからただちに、その骨の持ち主が家畜化されてゐなかつた、といふことにはならないであろう。また一緒に出てくるほかの獸が、野生のものばかりであつても、牛だけはすでに家畜化されてゐた、というようなことがあつてもよいのでなからうか。

家畜化の起原については、バムペリーもデュールストも、とくに自説をたててゐるわけでない。かりに農耕が牧畜に先行してゐたということを認めるにしても、われわれは、このことと、家畜化の起原乃至は牧畜の起原ということとは、別の問題であつて、牧畜の起原を必らずしも農耕に求めなくても、たとえば牧畜は牧畜として、農耕とは別に發生したものであつてもよいと思ふのである。しかるにデュールストは、やはり、農耕が牧畜に先行したということと、牧畜の農耕起原ということとは、結びついてはなれぬものであると考へてゐるのであるか、彼の論文中には牧畜の農耕起原説として、自説のかわりに、ミュッケ *Mücke* の自家家畜化 *self-domestication* 説ともいふべきものを、引用してゐるのである (*Punpelly, op. cit., p. 435*)。参考のためにここにこの説を紹介すると、ミュッケも狩獵生活をしてゐたのでは野生動物の家畜化はむづかしいだろう、と考へるところはハーンと同様である。そこで乾燥地帯のオアシスに定着して農耕を營んでゐる人間と、そのオアシスをとりまくステツペで生活してゐる野獸とを考へてみる。ただ

これだけなら兩者は一應棲みわけをしてゐるから、そのあいだに發展的な關係は生じてこないかも知れぬ。しかるにある時期がきて、乾燥地帯の乾燥度が強化された。ステツペの野獸はそのために食が乏しくなつたので、オアシスに近づつてきて、ステツペにくらべればいつだつてよりよく繁つてゐるといふる、オアシスの草や、そればかりでなくて、すでにそこで人間のつくつてゐた農作物を求めた。他に求める食がないならば、彼らはそこをなれることができなない。そのうちにだんだんそこに住んでゐる人間にも馴れ、ついに人間に歸順して家畜となつたといふのである。人間の方から積極的に家畜化しようとしたのでなくて、動物の方から人間のところへ、自分で出かけてきて家畜になつたといふのだから、自家家畜化である。この説はハーンの宗教起原説もしくは崇拜起原説にくらべると、その考へ方が生態學的であつて、この點では農耕起原説中にも異色があるものと思う。もつとも乾燥がはげしくなつて、ステツペの野獸がオアシスに避難してゐるほどになれば、オアシスに住む人間だつて、そこで農作物がうまくできたかどうかかわらない。しかし、野獸と人間との關係は、平素なら野獸の方で人間をさける、といふ關係であると思はれるのに、それがあつた危機——野獸にとつてのみならず人間にとつても同様な危機——をおして、平素とは反對に、野獸の方で人間をおそれなくなり、人間の方でも野獸を脅かさな

で、両者がたとえばオアシスに集まつて、そこに兩者の相互依存的な共同生活が成立した。そして、危機が去つてもこの改善された野獸と人間との關係は、すでに家畜と人間との關係として、持續されて行くことになつた、というような家畜起原論は、危機というものが前提となつてゐるために、普通妥當性を標榜し、繰りかえしの可能性、したがつて實驗の可能性といふところに基礎をおいたものが自然科學である、と考へてゐる人たちから見ると、なんだか非科學的なインテキが含まれてゐるように思われるのが、あまり歓迎をうけないようであるが、われわれ生態學者からいふと、危機とは實在する現象であるばかりでなく、危機こそはしばしば進化の興奮劑でもあり、また促進劑でもあつた。すべて一回きりの、その意味でくりかえしのない歴史的な大事件は、危機に通じてゐる。危機を超えてゆくところに、歴史の動きというものも感ぜられるのである。人間による野獸の家畜化ということも、どこでも、またいつでも、繰りかえし行われてゐることではなくて、むしろ歴史的な事件と見るべきものでなからうか。もしそうとすれば、危機の生態をとりあげ、それをもつて説明しようとする家畜起原論のごときにこそ、これから次第にはんとうのうま味が認められるように、なつてゆくのであるまいかと思われる。

註4 このような考へ、すなわち野獸の家畜化ということは、いつかどこかで、危機をとおして結ばれた、野獸と人間との關係に由來する、一回きりな歴史的な事件である、という考へに、近い考へをもつてゐるのが、シュミット Pater Schmidt の、いわゆるウイーンの文化史學派であつて、この學派では、野獸の馴化乃至は家畜化という考へは、人間の歴史を通して、あるときある場所で發生した一回きりのものである。したがつて、個々の野獸の家畜化は、その野獸の棲息する個々の土地で行われたにしても、それらの家畜化が、それぞれ獨立に發生した家畜化という考へによつて、導かれたものではなくて、それは、最初に發生した家畜化という考へ、傳播、模倣、借用をとおして、世界のすみすみにまで擴がつた現象であるといふ、かなり極端なところまで行つてゐるのである (Flor, F. 1930 *Hausiere und Hirtenkulturen. Wiener Beiträge zur Kulturgeschichte und Linguistik. Jahrgang I. p. 12*)。ただここで注意しておきたいのは、この學派の考へと、わたくしのさきのべた考へとは、かなり近いけれども同じでない。しからばどこが同じでないかといふと、わたくしの危機説による家畜化は、この學派でやかましくいふ、家畜化という考への發生による家畜化よりも、も一步溯つた状態、換言すれば、家畜化という考へのまだ發生しないうちにおこつた家畜化、ということになりはしなからうかと思われる。

ことである。つまり危機説のねらいどころは、最初の家畜化が自然發生的に生じた、というところにあるのであつて、かりにそのすぐあとに、家畜化という觀念が成立したとしてもよいが、起原論としては、いままでも何にもないところへ、天から降つてでもきたようにひよつこりと、人間の頭に、あの野獸を家畜にしようという思いつきが浮んできた。そしてその思いつきを實行に移したところに最初の家畜化がみられた、というように考えるよりも、最初の家畜化はやはり野獸と人間とのなれあいであり、こういった關係が成りたつたところから、こんどはこれを見、これを聞いて、俺たちもあの野獸を家畜化しよう、家畜に持たうという考えが浮んできたとする方が、よりほんとうらしい、起原論としてはより着實なものと考え方でなからうかと思われる。すなわちウイーン學派の方が、少なくともわれわれよりも觀念的であるといえるであらう。

それから一つここで注意しておきたいと思うことは、家畜化という考えの發生についても、わたくしはウイーン學派ほどに嚴格な單源論者では、ありえないということである。われわれはウイーン學派ほど觀念的でないから、かりにある野獸の家畜化は、ある危機をとおしてはじめて成立したということを認めたにしても、これとは別個に、また別の危機をとおして、別の野獸が、同じような経過をへて家畜化されるようなことがあつても、あえて問うところではないのである。

それらはそれぞれ、その家畜化された野獸と人間との關係を問題にするかぎり、一回きりな歴史的な事件であつたと見てよいのであるから。またわたくしは、すべての野獸が、さきのにべたような危機説を満足さす状態において、家畜化されたものであるということを、主張しようというものではない。野獸はその種類の相違によつて、いろいろな點で同じでないのだから、その家畜化といつても、個々の場合によつて、必らずしも同一でなくともよいと考へてゐる。ある野獸は、危機説のとくようにして家畜化されたであらう。しかし他のある野獸は、それとは全く別個な原理と過程とによつて、家畜化されたということが、あつてもよいと思ふのである。

しかし、わたくしがウイーン學派をここに持ちだしてきたのは、こんなことを論ずるのが目的だつたのではない。實をいへば、ウイーン學派が、はじめてハーンの、牧畜の農耕起原説に一矢を報いて、これにかわるべきものとして、ふたたび狩獵起原説を正面に持ちだした、代表的學派と考へられたからなのである（たゞ Koppers, W. 1932 *Konnten Jägerwölker Tierzüchter werden? Biologia generalis*, Bd. 8, pp. 179—186 参照）。一應、彼らのいうところを聞くとすれば、彼らはまづ、家畜化という思いつきはじめて結びついた野獸は、犬であつた、そしてその家畜化は、前エスキモー的・古代北極的・文化地域 (Protoeskimoischen, altarktischen

Kulturgebiet) において、はじめて成りたつたという。ついで犬の家畜化乃至は飼養と、切りはなすことができないと考えられてゐる、馴鹿の家畜化乃至飼養が、前サモエドの文化地域 (Protosamojeden Kulturgebiet) において開始された。それからさらに、家畜化しようという考えがひろまつて、前アルタイの文化地域 (Protoaltaischen Kulturgebiet) において、馬の家畜化が行われた。そして、ここまではこの學派の主張する、家畜化という考えについての單元發生説で、系譜的に説明されてゐるのである。したがつて、この學派としては、犬についてその家畜化が古いものと考えられる馴鹿の家畜化が、定住的農耕生活を前提条件としなければならない、といつたようなことは、とうてい考えることのできぬところであつた。すなわちその前段階的な犬飼養者が狩獵民であるかぎり、これにつづいた馴鹿飼養者、もしくは馴鹿遊牧民の起原もまた、狩獵民に由來することを、認めざるをえなくなつて、ここにハーンの牧畜の農耕起原説に對立する、その狩獵起原説が成立するのである。

いまこのところをもう少し明らかにするために、フロールに引用されたコバースの言葉を、も一度ここに紹介しておくことも無駄なほゝなきと認む (Flor, F. 1930 Zur Frage des Ren-tiernomadism. Mitt. Anthropol. Gesellsch. Wien, Bd. 60, p. 305)。その言葉とは

「*Was ist zu sagen? "Hält man im Auge, dass wie G. Hatt so sehr wahrscheinlich gemacht hat, Renntierjäger mehr oder minder nach der Vorbild urzeitlicher Hundezucht die ersten Rentierzüchter wurden, und bleibt man ferner der Tatsache eingedenk, dass, relativ genommen, kein Tier so leicht und so einfach zum Haustiere wird wie das Ren, so glauben wir……, dass gerade im südlichen Sibirien, etwa irgendwo im Balkal-gebiete das Ren von urzeitlichen Jägern zum ersten Herdentier gemacht wurde……"* (Schmidt, W. und W. Koppers, 1924 Völker und Kulturen, I Teil, p. 514)。かくこれで、ウイーン學派は、馴鹿飼養を持ちだして、ハーンの説に眞つ向から對立した。すなわちこの學派の主張するところによれば、牧畜は農耕から發生したものではなくて、狩獵から發生したものである。牛が最初に馴化されたのではなくて、犬——馴鹿——馬の順序に馴化が行われた。遊牧民は農耕民から派生したものでなくて、狩獵民から派生し、發展したものである」といふのであるから、従來のハーンの定説とは、どこにも一致するところがないわけである。もつとも、この學派としては、いまのところ、牛および豚の飼養の起原に關しては、まだなんらはずきりしたことはいつてゐないのである (Flor, F. 1930, op. cit., p. 286)。しかし少なくともこの學派は、

ハーンの舞臺が西アジア—アフリカに局限されてゐたのに對して、これをアジアに擴張し、そして、最初に家畜化の發生したところが、ステツペと森林とに跨がつた、シベリアのサヤン山脈あたりでなかつたらうか、と想像してゐる (Flor, *ibid.*, p. 15, 109) あたりに、われわれとしては、なにか新鮮なものを感得してもよいと思われれるのである。遊牧文化というものを、それ自身固有な、系統的に、農耕文化とは異なつたものとして取り扱つてゐるところも、注意に値するであらう。それにもかかわらず、この學派が、自説を樹てるに急なるあまり、どこまでも家畜化の單元發生とその傳播とを固執した結果として、いわゆる遊牧文化圏以外にその起原をもつた、より南方的な森林的な家畜——たとえば牛や豚——に關して、ほとんど觸れるところがないのは、ハーンの舊定説に對する反駁として、なおわれわれとしては、多分に慚らなさを感ずる次第である。とにかくハーンは、牛を中心においてその説を樹ててゐるのであるから、ウイーン學派としても、牛をもつてきて當らなければ、ほんとうの正面衝突にはならないのであつて、第三者の眼からみると、いまのところこの兩學派は、それぞれその説のよつて立つ地盤——ウイーン學派の學説は、北ヨーロッパ・北アジア・中央アジアにつらなる地盤を占め、これに對してハーンの學説は、西アジア・アフリカにつらなる地盤を占めてゐる——に蟠居して、相對峙し、兩々相譲ら

ずというだけで、どちらか一方の説が他の説を完全にくつがえしたところまでは、來てゐないように思われる。

そこで、もう少し別の方面の文獻も漁つてみる必要がある。牛に關しては、野生のガヤールの馴化法に關して、ブレイムにも面白い記事が載つてゐるけれども (Brehms Tierleben, Bd. 13, p. 332, 1920) ここにはさきにもよつと觸れておいた、クノーの家畜飼養の起原、とくに豚飼養の起原に關する説を紹介してみたいと思ふ (Cunow, H. 1925 Die Entstehung der Bodenkultur und die Viehzucht, Köhner Vierteljahrshefte für Soziologie, Bd. 5, pp. 118—120) クノーもまたハーンと同じように、非定住的な生活をしてゐたのでは、農耕もやることのできないとともに、またもちろん、野獸の馴化ということもできないと考へた。したがつてこのことから、非定住的な、しかし家畜を伴なつた遊牧生活というものが、定住的な生活に先行した、よりプリミチブな發展段階を示すものであるという見方は、簡単に否定されてしまつて、家畜を伴なつた遊牧生活というものは、やはりどうしても、一度は定住的な生活を経なければ發展できないもの、と見なされてゐるのである。すなわち彼は「余はどこかである狩獵民族が、あらかじめ土地を耕作せずして、直接遊牧生活に移つた、というようなことを、確信をもつて證明し得る場合を

一つも知らぬのである」(高山洋吉譯 *Living Kano* 經濟全史、第二卷、二二九頁)とまで極言した。彼の説にしたがうと、最もプリミチブな人間の經濟生活は、狩獵採取經濟であつた。けれどもこの狩獵採取經濟と定住生活とは、必ずしも矛盾し、兩立しないものではない。ある程度の定住をしつつ、男が狩獵し、女が採取をしてゐるうちに、女の方で農耕に誘導されていつた。だから彼は、農耕が定住の豫定條件でなくて、定住が農耕の豫定條件であつたといふ(高山譯、前出、一二五頁)。こうした原始的定住生活において、狩獵に出る男子が、たまたま仔獸や、懷妊した牝獸をとらえたときには、これを殺さずに家へ連れて歸つて飼つた。あるいは飼ひならした。そこに彼は野獸馴化の起原を認めようとしたのである。しかし彼はこの場合に、ハーンが考えたように、牛のような大動物がまづ家畜化された、といふ説には反對してゐる。そして、はじめは飼ひやすい小動物から家畜化することを覺えていつたものだろうといふ。すると、豚ぐらいが格好の大きさの獸であつた。現に南方に住んで、いまだ農耕段階にまで達してゐない狩獵民族——たとえば大アングマン島の原住民、ミンコビー、マラッカ半島などにすむネグリート——が、小さい若い野豬を捕えたときには、これを垣の中に飼つておいて、大きくしてから食うということが知られてゐるし、ニューギニア北方のすでに農耕にはいつた民族にも、こういつた習慣が見られるとい

う。南方の森林地帯で、野豬を馴化して豚にした過程の一つとして、われわれはこういつた過程もあつてよいことを認めるが、ただこのような馴化法は、いわば野獸の個別的馴化法である。野豬のように森林地帯の動物で、平素からほとんど群れといふものをつくらないで生活してゐるものには、あるいはこういつた方法も適用されるかも知れないが、ステツペ地帯の群れをなして生活する動物に對しても、はたしてこれと同じ方法をもつて、その家畜化が行われたであろうか。クノーは羊や山羊のような動物も、このような方法で飼養され、家畜化されるに至つたであろうと考へてゐる(Cunow, *op. cit.* p. 120 高山前出、二二七頁)けれども、この點についてはわれわれとして、疑いなきを得ないのである。

註5 ウイーン學派を、牧畜の狩獵起原説を主張するものの代表者として紹介しておいたが、そこで取りあげられた家畜は、まづ馴鹿であつた。もちろん、一番早く家畜化された野獸は、犬であつたといふが、犬はちよつと牧畜の對象といふわけにもゆくまい。そういう意味では、牧畜の起原といふのは、また馴鹿飼養の起原といふことにもなるであらう。すると、ここでわれわれとして、狩獵民が、如何にして野生の馴鹿を飼ひならしたかということが、問題でなければなら

ぬ。犬はすでに飼われてゐてもよい。また犬からヒントを得て、馴鹿を飼いならそうと思いついたものであつてもよい。われわれの間うところは、この馴鹿の馴化に用いられた方法であり、馴化の過程である。それは同時に、狩獵民が馴鹿を家畜にもつた遊牧民に、かわつてゆく過程でもあるであろう。馴鹿飼養者はいづれも遊牧生活者なのであるから。すると、これはまた遊牧の起原という問題にもなる。もつともハーン流の農耕起原説にしても、山羊や羊を家畜にもつてステツペへ出た農耕民が、そこで定住的な牧畜をやらずに、どうして遊牧という生活様式をとつたのであるか、というところをつつこめば、やはりそこでも遊牧の起原という問題にぶつつからざるを得ないのである。しかるに、われわれからみてすこぶる不思議に思われることは、遊牧民が農耕民から出たか、それとも狩獵民から出たか、という系譜しらが、その中心問題の一つになつてゐるにもかかわらず、如何にして遊牧がはじめられるようになったか、という具體的な生活方法乃至は生活技術に關しては、ハーンはほとんどその注意を向けてゐなかつたらしいのである。ところでこれと全く同じように、ウイン學派の方でも、馴鹿遊牧民は狩獵民から出たということは、聲を大きくしていつてゐるけれども、馴鹿が如何にして馴化されるに至つたかということについても、狩獵民が如何にして遊牧という生活様式をとるに至つたかということについても

具體的なことはほとんど何もいつてゐないというのは、一たいどうしたことであろうか。馴鹿も、さきあげたクノ一の、豚飼養の起原に關する説のように、定住的な狩獵民によつて、個別的に馴化されていつたものであるうか。しかし、わたくしはクノ一の説を紹介した際に、これと同じ方法で、たとえば羊のような群れをなして生活する動物まで馴化できるであろうか、たとえ個別的な馴化はできて、家畜化というところまではたして行けたかどうか疑わしい、ということに注意しておいた。しかるに、馴鹿は群れをなして生活する動物の一つなのである。そして、群れをなして生活する草食獣のほとんどすべては、それ自身がまたその野生状態において、遊牧という生活様式をとつてゐるのである。

こういつた點を考慮に入れて、人間の遊牧生活——すなはち遊牧の起原——は、馴鹿の家畜化以前——すなはち狩獵時代——にさかのぼるべきであるということに注意して、この點に關するかぎり、われわれと同一の見解を發表してゐるのは、さきの Schmidt und Koppers の引用文中に名前のでてくる、ハットである。その原文というのは次ぎのこと—— 'The wandership of the reindeer nomadisms were, to some extent already a formed habit before the domestication began' (Hatt, G. 1919 Notes on reindeer nomadism, Memoirs Amer.

Anthrop. Assoc., vol. 6, p. 99).

註。つまり馴鹿の方で動くから、人間の方でもこれについて動かなければならなくなる。馴鹿が遊牧してゐるから、人間の方でもこれについて遊牧しなければならなくなるのであつて、「彼らの生活は決して人間の恣意によつて變化することはできないのである。彼らは全く彼らの件なつてゐる家畜の意志に従つて行動する。そこに遊牧民の本質がある」と「家畜文化史」の著者も言つてゐる（加茂、前出、六〇二頁）。だから、人間の方がまだ馴鹿を家畜化してゐない狩獵民であっても、馴鹿の群れの移動によつて歩かねばならない點は、すでにそれを家畜化した遊牧民の場合と、ほとんど異ならないのであつて、そこでハットも、遊牧の起原を狩獵時代に求めたのであり、またわたくしが本文で、「遊牧的な狩獵生活者」と「遊牧的な牧畜生活者」とを區別した所以でもあつた。サッパもまた、こつこつた點をばやく發表したことに對しては、ハットにつぐであらう。彼の原文では「Auch das Wandern mit den Renherden ist bei Renjägern und züchtern gleich, wie denn die Rennerhaltung sich gegenüber der Haltung anderer Haustiere vor allem durch den Wandertrieb des Ren unterscheidet」(Sapper, K. 1931)

Die anthropogeographische Bedeutung des Rentieres. Geog. Zeitschrift, Bd. 37, p. 602) とあつて、こつこつたことは馴鹿にかざられたような口調がもたらされてゐるけれども、わたくしはもちろん、この馴鹿のかわりに、同じように群れをなして生活する、ステツペの羊や馬をもつてきて、同じことが成立するであろうと考える。サッパはさらにつづけて、馴鹿がすでに馴化されて、狩獵が牧畜にかはり搾乳——すなはち狩獵にはなくて、狩獵から牧畜に發展したことを示す有力な技術の一つ——を行うようになって、馴鹿飼養者は依然として、遊牧生活をしてゆかねばならぬと云つて、「Allein die Lebensgewohnheiten des Ren zwingen auch fernhin zu nomadischer Lebensweise, der die ganze Familie sich ebenfalls zu unterwerfen hatte」(Ibid, p. 603) と記した。

それで、このように馴鹿もしくはその他の野獸の群れについて、狩獵民の時代から、人間が遊牧をはじめたといふことを認めるとするならば、この狩獵民が、たとえばクノーが豚飼養の起原について考えたように、この群れの中から個体を拾ひだしてきて、これを個別的に馴化し、家畜化したものとは考をにくいであろう。なんとすれば、遊牧的な狩獵生活者こそはまた明らかに非定住的な狩獵生活者であつて、かかる非定住的な生活者によつて、野獸が家畜化されること

の困難さは、上に紹介した、ハーン、ミュッケ、クノーラの口をそろえて主張したところであつたからである。けれどもそれは、どこまでも個別的馴化という一つの方法のみより考えないから、そういうことにもなるのであつて、われわれがいまここで考えてゐるような、非定住的遊牧的な狩獵民が、野獸の群れについて歩いてゐるうちに、いつの間にか、群れそのものとなじんでしまふ、いつの間にか群れそのものを家畜化してしまつた、というような、個別的馴化でなくて、いはば群れそのものの馴化乃至は家畜化ということの可能性を、この人たちは、おそらくまだ考えついでゐなかつたのちがいない。しかれば、ハットやサツパーは、この可能性をはつきりと認めてゐたであらうか。兩者ともに、遊牧的な狩獵民がこの群れをつかんでいつたという、重要な點を強調してはゐないけれども、ハットのつぎの引用文は、この家畜化の過程を説明したものとしつゝ、やはり最もしつかりしてゐると思ふ。すなわち 'It was a mutual interest—fear of wolves and mosquitos, peculiar appetite for salt and for human urine—which led to that symbiosis of man and reindeer, called reindeer nomadism (Hatt, *opt. cit.*, p. 109). 狩獵民が群れをつかんで家畜にしたということは、シレリウスもいつてゐるのであるが、彼のいうところは、狩獵民が大きな圍いをつくりその中に獸群を追ひこんで、これを馴らしたと

ころに、群れとしての家畜が成立した (Sirelius, U. T. 1916 *Über die Art und Zeit der Zähmung des Rentiers. Journal de la Société Finno-ougrienne*, vol. 33, pp. 4—10) というのであつて、こういう方法も實際には行われてゐるところがあるかも知れないが、これは多分、圍を用いて野生のものを捕える方法などと同じように、一たん家畜化ということが成立したのちに、用いられるようになった方法ではあるまいか。馴鹿家畜化の起原を説明するものとしては、わたくしはやはりハットの方をとるであらう。

註々　　こういふわけで、同じ狩獵生活者であつても、遊牧する野獸の群れのゐない、森林の狩獵生活者は、自己發展的に遊牧的な牧畜生活者とはなり得なかつた。これに反して、遊牧する野獸の群れと結びついたステツベの狩獵生活者なら、自己發展的に遊牧的な牧畜生活者となり得たであらう、という考えを得たのは、一九四二年に大興安嶺を探検して、その狩獵生活者を調べたことによるのである (伴豊「民族」、今西錦司編「大興安嶺探検誌」未刊、三〇六—三〇八頁)。そしてこういうことから考えると、遊牧的な牧畜生活というものは、もともと遊牧的な群れの棲息した、ツンドラ乃至はステツベにおいて成立したものである、ということが、はつきりいえる

のでなからうかと思われる。したがって、このことはまた、遊牧文化の固有性ということを支持することにもなるであろう。

註8 そこで問題となつてくるのは、北米のプレーリーに棲むインディアンと野牛の群れとの關係である。インディアンはどこへでも行つて、好きなように野牛を狩獵するわけにゆかなかつた。たとえ「北アメリカのプレーリー・インディアンは野牛のままの畜群に對して、所有權というようなものを持つており、この群れを他の者が所有することを拒んでゐる」(今岡十一郎譯、チヨノキ人文地理學の基礎知識、五一頁)とあるから、インディアンは、わたくしのいわゆる遊牧的な牧畜生活者ではなくても、すでにあるインディアンとある野牛の群れとのあいだには、特殊な結びつきができてゐたと見てよいであろう。しからは、どうしてこの狩獵生活者としてのインディアンがアジアにおける場合と同じように、自己發展的に遊牧的な牧畜生活者となることができなかつたのであろうか。これについて、わたくしは本文では、「インディアンがアメリカのプレーリーに見いだした野牛という動物は、多分蒙古人の祖先がアジアのステツベに見いだした野生の馬や野生の羊にくらべて、どこかに馴れにくいところでもあるのであろう」といつておいたが、これ

についてのクノーの見解を参考までに記すと、「狩獵がインディアンの肉に對する需要を十分に充たしてあり、したがつてインディアンは狩獵武器や條蹄で、はるかに容易に手に入れることのできる獸を、骨折つて馴致し飼育する動機を有しなかつた、という簡單な理由からである」(高山譯、前出、第一卷二二三頁、Cumow, *opt. cit.*, p. 113) というのである。しからは、アメリカに渡つてきたヨーロッパ人が、銃をもつて野牛の大虐殺をはじめた一八〇〇年代には、この理由からだと、食料の缺乏におびやかされたインディアンが、あちらこちらで野牛の家畜化を試みた、というようなことが當然あつてもよかりそうに思えるのに、そのような話しを一度も聞いたことがないといふのはどうしてであろうか。もちろん現代人の頭をもつてすれば、動物の馴化ということも、愛玩用のためとか、食用のためとかというように、それぞれの目的をもつて、計畫的にはじめられた行爲と見るのでなかつたならば、了解しにくいところがあるかも知れない。そしてたくさんある家畜の中には、こういう目的をもつて飼いはじめられたものもあることであろう。ファルフアイン F. Falz-Fein は現に、アメリカの野牛 *Bison bison* ではないが、これに近縁のヨーロッパの野牛 *Bison bonasus* を、飼ひならすことに成功してゐる。そして、それは大して難しいことではなかつたという (Brehms Tierleben, *opt. cit.*, p. 342)。ハーゲンベックの曲

馬頭を見ればわかるように、ライオンや熊のようなものだつて、ある程度までは飼いなすことができるのであるから、まして根のおとなしい、草食性の有蹄類なら、大ていのは飼いなするのであるにちがいない。けれどもわれわれは、動物の家畜化ということが、はるか古代に発生したものであることを忘れてはならない。それとともに古代人の頭を、現代人の頭をもつて律することをつつしまねばならない。そこで、個々の動物の馴化なら、いつどこでだつて行われてよいであろう、しかし、さきにのべておいたように、群れをなすけものは群れのままで家畜化されること、その家畜化に必要な前提条件であることを認めるならば、古代人に、はたしてこうした野獣の群れそのものを馴化しようというような意志が、動いたであろうか。自信がもてたであろうか。そうなると、ハットの共生説というような、人間と野獣との歩みよりを考えた方が、より合理的な説明になつてくるのでなからうか。しかしながら、共生説だけでは、なおインディアンが、どうして遊牧的な牧畜生活者にならなかつたかということの、説明としては充分でない。そこでいきおい、共生説に輪をかけた、危機説を持ちだしてきたのであるであつて、危機説の立場にたつときはじめて、それぞれの動物の家畜化ということが、それぞれに一つの歴史的事件として取扱われるようになるのであるとともに、インディアンが遊牧的な牧畜生活者にならなかつた

たということも、それが危機の相違にもとづく、アジアとアメリカの歴史的な相違として、説明されることになるのであらうと思われる。

註9 しかし危機をもつてきても、その危機が、それをとおして齎らされた変化を生みだしたのではない。そういう意味で、危機はどこまでも變化の開發者にすぎない。いかえれば、變化を生じ變化をとげるべきものが用意されてゐないところへ、いくら危機をもつてきても、なんにもならぬのである。危機がきたら一体になれるというところまで、あらかじめ人間と野獣との歩みよりができ、兩者のあいだの距離が、ちぢまつてゐなければならぬのである。危機とは化學變化における觸媒のごときものである。そしていまわれわれは、ここで危機を論ずることを目的としてゐるのではない。ある種の化學變化を開發するために、ある種の觸媒の存在が前提されるように、人間と野獣との關係が變化して、野獣の群れが家畜化されるためには、ある種の危機の存在が前提されることさえ承知しておいてもらつたならば、あとはふたたび一般状態における人間と野獣との關係を考えて、そこに家畜化の行われるような兩者間のアレンジメント、あるいはシチュエーションを、見いだそうというのが、われわれの目的であつた。ところで野獣の家畜化と

いつても、この野獸が一種類でないのだから、その種類のちがいに應じて、このシチュエーションもちがつてくるのが當然である。豚の家畜化と馴鹿の家畜化とが、同じ状態のもとで行われるはずがない。だから生態學の立場からいえば、それがどのようなものであろうと、家畜化または牧畜の單一起原説——すなわち農耕生活から生まれたという説にも、狩獵生活から生まれたという説にも、にわかには加擔することができないのである。また文化史學派の主張するように、家畜化という考えの傳播とか借用とかを認めるにしても、相手の野獸がちがえば、考えだけを受けついでのでは、どうとも仕方のない場合がでてくるのでなからうか。犬の家畜化をみた人間に、ただちに馴鹿の家畜化が方法的に可能であつただらうか。こういう點では文化史學派も、まだ古代人の能力を買いかぶりすぎてゐる。家畜化の自然發生、すなわち家畜が自然に人間にまで與えられるようになつた過程、というものに對する考えが足りない。そしてもしこの家畜化の自然發生ということを認めるならば、犬の家畜化と馴鹿の家畜化とが、なんの聯絡もなく、別個の状態のもとに、それぞれ別個に發生してゐたつてよいのでなからうか、と思われる。

しからばわたくしは、野獸の家畜化ということは、それぞれの野獸の特殊性に應じた、特殊な状態のもとに、それぞれ別個に發生したものであつて、そこにはなんらの共通性も認められない、

ということをやわんとしてゐるのであるか。しからず、別個に家畜化が成立したところで、そのあいだに家畜化に關する共通した原理が見いだされない、というわけのものではない。たとえばわたくしの考えるように、野獸の群れについて歩いた遊牧的な狩獵生活者が、家畜化の自然發生をとおして、そのまま遊牧的な牧畜生活者にかわりうるものとするならば、その狩獵生活者のもとする野獸の群れが、彼の生活してゐる土地のちがひによつて、北方のツンドラ地帯ではそれが馴鹿の群れであり、内陸アジアのステップ地帯ではそれが羊の群れであつたところで、この馴鹿と羊との相違にもかかわらず、その家畜化は同じように行われうるものとしなければならぬ。そこに一つの原理がある。しかもこの原理は一つであるにもかかわらず、この原理にしたがう以上は、馴鹿の家畜化と羊の家畜化とが、全然聯絡なしに、ツンドラとステップとで成立することの可能性が、考えられてもよいのである。そしてそこに、いままでの文化史家の考え方とはちがつた、家畜化の自然發生という、新しい觀點への基礎づけがある。

もつとも家畜化の自然發生といつても、それは、その家畜化される野獸が、群れをなして生活するところの野獸であることを、前提條件としてゐる。したがつてこの家畜化の成立は、そういう野獸の棲息するような土地、すなわち環境的にいえば、森林に掩われてゐない開放的な土地

としての、ツンドラやステツベに限定されてくる。しかし、それゆえにまたこの家畜化の自然發生説というものが、さきにものべたように、ツンドラやステツベに現在見られる遊牧という生活様式や、その他の遊牧文化の起原とも、密接に結びついてくるのである。換言すれば、こういった生活様式が、發生的にはかりに別々に導きだされたものであつても、それらは家畜化の自然發生ということをとおして、原理的には一つの範疇に入り、一つの類型をなすものでなければならぬ。そして、いまこういうことが認められるとしたならば、こんどは當然、自然發生によらない家畜化、すなわち、その家畜化される野獸が、群れをなして生活してゐないような野獸の家畜化は原理的にこれとは別な範疇に入るべきものとしなければならぬ。その家畜化の成立した場所も、野獸が群れをなして生活する、ツンドラやステツベを除外することになれば、それはどうしても、北方か南方かの森林地帯でなければならぬ、ということになつてくる。すると、そこには群れをなして遊牧する野獸が——猿の群れはしばらくおき有蹄類には——ほとんどゐないのであるから、その狩獵生活者も遊牧する必要がない。遊牧的な狩獵生活者でないということは、狩獵生活者であつても定住的でありうるということであり、それはまたその狩獵生活者に、農耕生活者に發展しうる契機が含まれてゐる、ということにもなるであらう。

人間のやつたことをくわしく調べたならば、もちろん部分的例外的には、遊牧生活から農耕生活に移つたようなものも、またその反對に、農耕生活から遊牧生活に移つたようなものもあるであらう。しかし、以上にのべたことからの歸結の一つは、遊牧生活と農耕生活というものは、發生の原理を異にしたものである。したがつて、そういう意味では系譜を異にし、系統的に一つにはならないものであるということであつて、これはかなり重要な歸結であると思う。なぜならば、狩獵——牧畜——農耕という系列を考えた、經濟發展の三段階説も、これを反駁して、狩獵——農耕——牧畜ということ唱えたハーンも、その牧畜というのは、遊牧民の行なう遊牧的な牧畜を考へてゐたのであるから、その點でかれらはいづれも、遊牧生活と農耕生活とを、簡單に一つの系譜におさまるもののごとく考へてゐた、といわねばならない。したがつてこうした従來の考へは、いまわれわれの立場から訂正をせまられることとなつてくるのである。もつとも牧畜といつても、遊牧的な非定住的な牧畜生活でなくて、非遊牧的・定住的な牧畜生活なら、農耕生活への發展の可能性と同じように、森林地帯の定住的な狩獵生活からの發展の可能性を認めてもよい。しかしこの場合は、クノーの説いた豚の飼養起原に見られるように、原始的な狩獵採取生活から狩獵農耕生活にうつるとともに、それがまた一方では狩獵農耕牧畜生活となつてゆくので、これ

らの三つの生活様式が、ときには全部同時に取りこまれてゐて、分離しがたい状態にある場合も考えられる。そしてそのうちに、狩獵が次第に揚棄されるようになった場合においても、農耕と牧畜とはそのまま分離せず、つづけられて来たかも知れない。われわれは豚を家畜化することによつて、ついに豚専門の牧畜生活にはいつたというようなものを知らないのだから。それが豚のかわりに牛であつた場合を考えてみても、それが役畜としてすぐ農耕と結びついてしまう可能性を考えると、やはり農耕生活と分離しない牧畜生活として、發展した可能性は充分考えられるのである。

牛の家畜化が、豚を家畜化したと考えられるような定住民と結びついたものか、それとも非定住的な遊牧民と結びついたものか、という問題については、わたくし自身にまだ確定的な資料がつかめてゐないので、牛に關しては本文でも言及することを避けておいたのである。しかしさきにもちよつとのべておいたように、家畜化された牛の祖先は、オリジナルなステツペの住者ではなく、むしろ森林地帯の動物であつたと考えられる。それは生態學的にいえば、牛の一族が棲みわけをして、ツンドラをジャコウウンが占め、チベットの高原をヤクが占め、南方の水邊を水牛が占めるようになったとき、ステツペを占めた牛はやはり野牛 *Bison* であつただらうから、そ

うなると家畜化された牛の祖先というのは、現在のガヤールと同じように、森林地帯を占めてゐたものと考えられる他ないのである。もつとも森林地帯といつても、その中に散在する草原へ行つて、その草を喰んでゐてよいのである。そして、一族の他のものと同じように、多少とも群れをつくつて生活してゐてもよいししよう。けれども何といつても森林地帯の住者であつたかぎり牛の群れにはツンドラやステツペの住者にみるような、遊牧と稱せられるべき習性は、たいして發達してゐなかつたのでなからうか。したがつてそこに豚の場合と同じような、森林地帯の定住的な狩獵民乃至は狩獵農耕民との結びつきが、考えられてもよいことになるのでなからうか。このように考えてくると、牛が乾燥地帯の典型的な遊牧民に、家畜として取り入れられたのが、比較的新しいことであるといわれてゐることとも、話しが合つてくる。たとえばクノーは、*Selbst von den Kirgisen Zentralasiens lässt sich nachweisen, dass sie noch von etwa zwei Jahrhunderten vornehmlich Schafe, Ziegen und Pferde finden. Die Aufzucht von Rindern und Eseln hat erst seitdem grössere Bedeutung gewonnen?* (Cunow, op. cit., p. 119) と記してゐる。ステツペの遊牧民にとつて、牛の飼養は、けつきよく一種の借用文化と見做されるべきものであらう。

さて、わたくしの考えるところでは、以上のごとく、家畜化の行われる舞臺、そこで家畜化される動物の社會形態、家畜化する人間の生活様式などから見ても、野獸の家畜化ということには、はじめから明らかに別々な二つの道があつた。どちらの道もその發端においては、人間の最も原始的な生活様式としての狩獵が、考えられてゐるけれども、その一つの道からのみ、今日見るような遊牧的な牧畜生活というものが展開した。しかし、その道はそのままでは農耕生活に通じない道であつた。農耕生活に通ずる道はもう一つの方の道であつた。ここに遊牧民と農耕民とのあいだに見られた、長い歴史的な葛藤に對する、宿命の種子が播かれてゐたともいえるであろう。では遊牧生活への道を、人間はいつごろから踏みはじめたものであろうか。この問いに對してわれわれの答えうるところは、最初の遊牧的な狩獵生活者にしろ、遊牧である以上は定住と兩立しない。だから人間が穴居生活をしたり、洞窟生活をしてゐたあいだは、まだこの道は開かれてゐなかつたものと、しなければならぬのである。最後にも一度わたくしの見解を、理想化し、模式化して、一覽表につくと次のごとし。

環	境	非森林 (ツンドラ ステツペ)	森	林
動物社會	狩獵社會	遊牧	非遊牧(定住)	非群れ
家畜化の徑路	自然的	人為的	狩獵↓牧畜(定住)	
生活様式の發展	狩獵↓牧畜(遊牧)	狩獵↓牧畜(定住)	農耕	
獲得家畜	馴鹿、羊、馬	豚、牛?		

註10 わたくしは家畜化の起原ということ、文化史的に考えるというよりも、むしろ生態的に考えることによつて、一應これを上掲の表が示すように体系づけてみる事ができた。そして、それによつてまた遊牧の起原ということに對しても、いままでに試みられたどの研究よりも、少なくとも原理的にはつきりした基礎づけを、與えることができたかと思う。しかしそのかわりに、われわれは生態學者として、さらに一層根源的な問題につき當り、その解決を引きうけるべく餘儀なくせられてきた。群れをなして生活する野獸の家畜化が、野獸と人間との双方からの歩みよりとおして、自然的に成立したものであるとする、家畜化の自然發生説までは、ハットなどもすでに思いついてゐたものとみてよいかも知れないが、この自然發生のための前提條件としての、

遊牧生活ということの起原になつてくると、それはその対象となつてゐる動物が遊牧するからである、というだけで、民族學者はもはや動物の世界にまで深入りしようとはしないから、しかるばこういつた動物が、なぜ遊牧するのであるかという問題になつてくると、これを引き上げるべきものは、生態學者より他にない、ということになつてしまふからである。それゆゑわたくしとしては、この遊牧の起原に關する最も根源的な問題に對しても、できるだけの説明を試みたつもりであつたが、遺憾ながら、動物生態學の方でも、まだこうした問題については、充分な研究ができてゐないので、いまのところは一つの假説とみておいて貰わねばならないのである。

一たい動物の習性を解釋する立場というものは、まづそれがその動物の存立上、必要缺くべからざる行爲としての意義を有するかどうかを、考えてみるのである。たとえば攝食とか、蕃殖とかいふようなことと結びつけて、説明できるかどうかということである。それで説明できればそれでよし、もしできないならば、つぎにはどのように考えてみるべきであるか。ところでまことにおかしな話であるが、いままでの動物學の傾向というものは、動物に、その存立上のいわゆる合目的な行爲より認めようとしなない、たとえそれ以外の行爲があつても、しいて見てみぬふりをする。だから、合目的な説明がつかなければ、つぎにはどのような説明をなすべきか、とい

つたようなことは、あまり考えてみる必要がなかつたのである。これだけのことを前もつて注意しておいて、いよいよ動物の遊牧ということを取りあげるのであるが、從來の習慣にしたがい、まづこれがその動物の存立上の、合目的な行爲であるかどうかを考えてみる。もつと具体的にいへば、それが攝食のため必要なことであるか、それとも蕃殖のため必要なことであるか、というようなことから考えてみる。すると、關係があるとすれば蕃殖でなくて、攝食の方となにか關係があるのでなからうかとは、たれしも考えつくところであるだろう。たとえば山崎氏は「遊牧生活というのは、ある動物が一定面積の繩張り地域を有してゐて、その内部において食物を求めて彷徨するものであつて、原則として營養的活動であるとなされてゐる。(中略)もちろん、一年間の季節的變化、生殖機能の週期的活動等が關聯して、遊牧生活中にも活動原動力の變化や群形態の改編が見られるのであるが、その基底には常に食物が支配する移動があると考えられる」(山崎正武 1941 動物の社會生活、六五頁)といつて、さらに移動の説明としては「草原の動物は、(中略)多數の個體を獲得しうる食糧に恵まれたものなのである。しかし狭い地區において如何に植物が豊富であつても、大群の動物が食う速度は植物の成長を遙かに凌駕するのであるから、動物は必然的に移動しなければならなくなる」(同上、八一頁)と記したが、この引用文のうちに、たぶん

従来からの考え方が代表されてゐるだらうと思う。

食物關係といふことは、生態學としても、とくに重視するところであるが、それは生態學の原理としての自然均衡といふことが、食物關係のうちに具現してゐると考えられるからである。すなわち、本文でのべたように「草の方はほとんど被害を蒙らないで、いつまでも彼ら動物の生活に適し、彼らを養うるに足る良好な牧野の状態を維持してゆける」ような草の食いが、自然均衡という立場からいふと、動物の側に要請されてゐるわけである。とくにステツペヤツンドラの植物社會は、環境が悪いせいであらうか、一旦破壊されると、その恢復になかなか暇どるものであるらしいから、これを悪くしないで持続さす食ひ方というのは、結局つまみぐい式の食ひ方ということになり、それは食ひ方としては、一箇所を食ひ荒らさないように、しよつちゆう移動して歩かねばならないことを意味するとともに、またこんな食ひ方をしてゐても、彼らが食つてゆくのに差しつかえないだけの廣い場所が、與えられてゐなければならぬことになるであらう。もちろん動物の方で、こういうことを意識して行動してゐるわけではないから、こういうように説明すれば、それが一應合目的な行爲と解されるにしても、それだけではまだかかる合目的な習性が、如何にして獲得されるようになったかの、説明ができてゐないことを忘れてはならぬ。

5。だからといつて、ワンドラトリーフ Wandertrieb ではもちろん説明にはならないであらう。これについて、いまわれわれの考へてゐることは、ただ言葉を変えただけで、やはり説明にはなつてゐないかも知れぬけれども、この移動といふことをもつて、こうした開放地に棲む有蹄類に具つた屬性と考へることである。ツンドラやステツペはもとよと森林地帯のように、有蹄類のような大動物にとつては、遮蔽された場所ではない。いしかえるならば、そこではいつでも敵の眼にさらされてゐるのである。だからヒルツハイマー M. Hiltzheimer の考へたように、ステツペに棲んでゐる高等動物は、森林に棲んでゐるこの動物の近縁のものにくらべて、進化してゐる (Brehms Tierleben, opt. cit. p. 322)。進化してゐるといふ意味は、この場合、感覺が鋭くなつてゐるといふこととともに、それに伴つて運動が敏活になつてゐる、といふことを含んでゐるのである。そして、そういうふうに進化してきた動物といふものは、敵がつけねらつてゐようとあまいと、もうじつとしてはゐられない。草を食つてゐるときとか、反芻してゐるときとか、腰てゐるときとかの他は、とにかく動いてゐることによつて調和が保たれ、調子がとれるような身体にできあがつてゐる。齧齒類のように、敵に追われたからといつて、身を入れるべき隠れ家のない彼らの、つねに緊張し、興奮しようとする神経は、ただ動くといふことによつてのみ、そう

した状態を中和され、そうした状態から開放される。だから動いてゐるということは、彼らの体制に伴つた一つの屬性であり、彼らの体制が要求する一つの常態である、というようにわたしは見たのである。すこし極端にいえば、樹をはなれた鳥に、飛ぶなどいつてみても駄目であるように、彼らに動くなどいつても、彼らはどうしても獨りでに動いてくるから動くのである。

このように、ツンドラやステツベの有蹄類が移動するのは、それによつて牧野の状態を良好に保たうなどということとは、全然縁もゆかりもないところに歸因してゐるのでないかと思われる。しかしこの移動ということも、うゑのように説明すれば、やはり一つの、環境に對する適應の産物だということになるであろう。どういう意味からにもせよ、動物にそのような移動を要求した環境というものは、またかかる動物の移動をとおして成りたつような環境である。それは結果論であるといわれるかも知れない。けれども自然均衡とか自然調和とかいつても、それらはけつきよくみな進化の結果に他ならないのではないか。もつとも單に移動ということだけに着眼するならば、森林に棲む有蹄類だつてやはり移動はしてゐるのである。ステツベに棲むもののような敏活さを現わさないかも知れぬが、やはり移動はしてゐるのである。そこでつぎに問題となつてくるのは、こうして移動する動物に、はたして一定の移動範圍、すなわち遊牧圏ともいふべきもの

があるとするれば、それはなにによつて決定してゐるであろうかということである。固定的な巢を持つたものなら、巢を中心にした行動圏というものが、おのづから定まつてくるであろう。しかし、そういった巢とか隠れ家とかいふもののない有蹄類であるゆゑに、移動するとも考えられる。しからば彼らは、移動に移動を重ねてゆくうちに、とんでもないところへ行つてしまふようなことがないであろうか。彼らの移動が遊牧にならないで、放浪となつてしまわぬであろうか。これに對して、わたくしは、熱帯林で梢上生活をする猿の群れからヒントを得て、本文では、規準的な遊牧生活をする群れの行動圏というものは、隣りの群れとの干渉によつて、おのづからきまつてくるものと考えておいた。

するとかりに隣りの群れというものがおらないような、無住の大草原に、ただ一つの群れを入れた場合には、この群れの行動は遊牧でなくて、放浪になつてしまふであろうかというに、そんな實驗があるかどうか知らないけれども、わたくしの考えでは、そんな場合でもやはりその群れは、どこがその生活條件の充たされる場所をみつめて、そこにゐつき、そこで一定の遊牧圏をつくつて生活するのでなからうかと思われる。その理由は、その動物が巢というような行動の中心點をもつてゐようと、あるいは持たないで移動をつづけてゐようと、少なくとも有蹄類をふくむ

脊椎動物ほどの高等なものになれば、そこにその發達した感覺をとおして、自分の生活してゐる場所に對するゲシュタルトがつくられるであろう。たとえどどちらの方向のどの邊に水をのむ川が流れてゐて、どの邊へゆけば岩の多い山があるといったような、一種の地理的ゲシュタルトであり、それがまた、とりも直さず彼らの生活圏のゲシュタルトでもある。一つの群れの成員には一つの生活圏——遊牧圏——のゲシュタルトがある。そして、これは動物の通性として、彼らも用もないのに、こうしてつくりあげられた遊牧圏をのりこえて、未知の世界へ出てゆくというような冒険を、あえてしないであろうと、わたくしは思う。そしてこの點は、わたくしが「生物の世界」(1941)でのべておいたように、生物という生物はどんな生物でも、保守主義者であり、また傳統主義者でなければならぬからであるが、これを心理學的にいひ現わすならば、この程度の高等動物に、生活圏のゲシュタルトの恒常性を假定するということになるのであつて、その恒常性の維持がすなわちその動物にとつては、また一つの心理的な環境の主体化であり、同化であるとともに、そこにその生活圏に對する動物の心理的平衡乃至は調和が見いだされ、その調和のうち動物は安住を求めてゐる、というように考えたいのである。モロッタランドで鹿の群れを研究したダーリングも、この問題に關しては、*Conservatism of habit, a factor of importance*

for the survival of species, tends to restrict movement to a particular area. True nomads, defined as creatures which wander fortuitously and have no home ground, are rare in nature. *トリスの著* また *Animals live in definite places because they like them. Familiarity with one piece of ground enables an animal to use it in the most advantageous manner for its comfort and well-being.* (Darling, F. F. 1937 *A herd of red deer*, p. 29) というように述べてゐるから、こうした考えをもう一步すすめると、群れ生活をなす哺乳類の遊牧圏は、その群れのなかに生まれ、そのなかで死んでゆく、群れの成員にとつては、その群れと結びついた一種の傳統的な生活圏である、とも解されてくるのである。

つぎに、こういった生活圏——この場合は一つの群れの遊牧圏——のひろがりは、なにによつてきまつてくるであろうか。ダーリングも單に食物關係によつてきまるものではない、というだけ、この點をはつきりしてゐない (*Ibid.*, p. 35)。しかし、遊牧ということをも食物關係で説明しようとした従來の立場では、遊牧圏のひろさはもちろん遊牧する群れの大きさによつてきまる、と考へられてゐた。別の言葉でいひ現わすならば、「一般に比較的繩張りの明らかな動物にあつては、その内に生活する動物の個体數は、繩張り内の食物の量に支配されるものと考へられて

に利用してゐないということになる。しかも、黄羊が有効に利用してゐないということが、必ずしも羊が有効に利用してゐるといふことの證明とはならない。かえつて羊もまた、その遊牧圏内の許された食量に對しては、黄羊と同じように、これを充分有效に——いままでの生態學者が理論的に考えたほど有效に——利用してゐないのでないか、という推測がなりたつのである。なんとすれば、黄羊の群れと羊の群れとは同じ牧野を利用してゐる、しからば黄羊の群れが充分有效に利用しない牧野だから、そこに羊の群れの生活が許されるのであるとともに、一方からみれば羊の群れが充分有效に利用しない牧野だからこそ、そこに黄羊の群れの生活も成りたつのである。そしてここで重要なことは、黄羊も羊も相手のためを思つて利用しないのではなくて、もともと食物關係からいへば、利用しきれないほどに大きなひろがりを持つた遊牧圏を、彼らは彼らのもつて生まれた体制の要求するところとして、必要としてゐるのだ、ということである。

しからばこうした遊牧圏の中における彼らの行動、すなわち遊牧といふのは、ある規則的な運動であらうか、それとも不規則な出鱈目な運動であらうか、というのに、わたくしは大たい出鱈目な運動であつてよいと考える。つまり遊牧圏内においては、群れは彷徨し、放浪してゐるのである。遊牧圏の外廓あるいは限界というものも、遊牧地の占有といふことをとおして、他の群れ

と衝突を生ずるのでなかつたならば、もともとそうはつきりしたものを考える必要はないのであつて、この點でわたくしはかりに、ステツペの有蹄類の群れに、猿の群れが現わすのと同じような社會組織を假定してみたけれども、この假定が正しいかどうかは、今後の研究に待たねばならない。しかし遊牧ということ、わたくしがここに考えるように、生活圏内における一種の放浪とは解しないで、もつと規則的な、あるいは週期的な移動であるというように解する人もある。たとえば山崎氏は「いわゆる遊牧的動物といわれる有蹄類も、結局は鳥類の渡りに似た移動を行つてゐるのであつて、一地方内に、夏期および冬期の生活地區を持つてをり、季節にしたがつて食物の豊富なる地方、生殖に好適な地方を求めて移動するのである」(前出、八〇頁)といつてゐるが、そういった動物があるにしても、それならばもはやその動物は純粹な遊牧 nomadism に終始してゐるのでなくて、その移動の中には一應遊牧と切りはなして考えられるべき、migration または transhumance という言葉で表現されるような行動が、含まれてゐるものと解した方が、よいのではなからうかと思われる。

しかしここで述べたようなことなら、それは必らずしもツンドラやステツペに棲む有蹄類にかざられたことではないであらう。森林の動物だつてやはりところ定めぬ放浪をしてゐるのではな

くて、一定の生活圏をもつてゐるにちがいない。このことはユズミンが、森林地帯の狩獵民について述べてゐる中にも明らかにされてゐる。すなわち「彼らは鹿やその他の獸を追うて、無限の曠野を渡り歩く人々のように思われてゐる。しかしこの考え方もやはり間違つてゐる。鹿も一定の地域に棲息してゐるし、鹿狩りはまた常にこの地域を考えてゐる」(善隣協會調査月報、第五六號、一五頁) というのである。すると、遊牧の起原ということは、その對象となつてゐる野獸が移動し、遊牧してゐる、ということだけには、簡単に歸せられなくなつてくるのでなからうか。森林地帯の野獸だつてやはり移動し、遊牧してゐるとすれば、そこにも遊牧的な狩獵民があつて、それが自己發展的に、遊牧的な牧畜民となつてもよかりそうなものでないか。とくに牛のようなものは森林地帯の野獸といつても、ある程度まで群れをつくつてゐたとも考えられるから、ここで遊牧をとおして牛の家畜化が行われた、と考えられないであらうか。こうした疑問に對して、わたくしはここで前註の補遺をかねて、次のように答えておきたいと思う。まづ森林地帯の動物は移動し、遊牧するといつても、棲息地そのものが錯雜してゐるから、それがツンドラやステツペにおける場合のように、はつきりとわれわれの眼にうつらない。そしてこのことは、狩獵民にとつては、その對象とする野獸のあとを追うにしても、見失ないやすいということになるであらう。

そこに森林地帯に遊牧的な狩獵民の成りたちにくい一つの理由があるうえに、さらに、そこで遊牧的な牧畜民が発生しなかつたということの最大の理由は、森林地帯にも群れをなす動物がゐたところと、そこにはやはり、ツンドラの馴鹿の群れやステツベの羊の群れのような大きな群れをなす動物がゐなかつた、したがつて森林地帯の狩獵民には、たとえ彼が遊牧的な狩獵生活をやつてゐたところで、その狩獵を牧畜に切りかえて、牧畜だけで生計をたててゆく可能性が興えられてゐなかつた、というところになければならないのである。

註11 われわれは大興安嶺を探検したとき、いまは山岳地帯にすこんである羊屬 *Ovis* の一族が、かつては東亞のステツベ地帯にも棲息してゐたのでなかるうか、とこのことを、生態學の立場から推論した(梅棹忠夫「動物」、前出、今西錦司編「大興安嶺探検誌」中に収録、参照。ところで、チベットから、ラダック、パンジヤブ、ベルチスタン、アフガニスタン、イラン、トランスカスピ海地方、ソ聯領トルキスタンにかけては、いまでも草原羊と呼ばれてゐる、一種の野生の羊 *Ovis vignei* が棲息してゐてそれは他の野生種とちがひ、北方においても南方においても、高山を駆けつ、むしろ平原に見いだされる (Brehms Tierleben, opt. cit., p. 249) とするから、この

推論は必らずしも當を得ないものではないであらう。そして、カスピ海附近に分布する本種の一種、*Ovis vignei arkar* が、他の野生種にくらべてずつと大きな群れを形成し、六〇乃至一〇〇頭、ときには二〇〇頭ぐらゐも集まつて生活してゐる (Ibid., p. 250) ということは、さきに述べたように、もし遊牧的な牧畜生活の成立が、家畜化される野獸の群れの大きさによつて條件づけられてゐるものとするならば、こういつた種類の羊こそ、まさにその成立のためにはあつらえむきの条件を具えてゐた、ということにならないだろうか、實際、他種よりも尾の長い、このアルカール羊が、家畜化されて、今日見るような脂肪尾羊となり(加茂、前出、六二三頁)、またその品種改良の結果、有名なメリノ種もつくりだされたものとされてゐる(同上、二五二頁)のは、注意に値するところである。

註12 内蒙古草原の類型に關しては、別稿「内蒙古の生態學・牧野篇」のなかで詳細に論じておいたから、これを参照していただきたい。

(一九四六・一・三一 北京にて)

砂
丘
越
え

肅親王牧場にて

空は曇り、冷たい風が小雨をまじえて吹いた。牧場についた日から四日間というものは、こんな天気が続いたので、戸外の仕事をやる気になれなかつた。蒙古では、九月に入れば、もう雨なんか降らないものと、ひとりぎめしてゐたから、雨の日の滞在は、われわれの日程表には算入されてゐない。しかるにわれわれは、すでに太僕寺右翼旗にゐたときから、雨に降られてゐるのである。

牧場の管理所には、経営主である憲容氏の顔は見えなかつた。われわれの張家口出發があまりにおくれてしまつたので、われわれとは行きがちがいに張家口へ出られたのだ。その留守を襲うて、憲容總長の部屋に通され、賓客として遇せられたのは、いささか恐縮ではあつたけれども、ほんとうのことをいえば、ここほどわれわれとして、気兼ねなく振舞えるところは、蒙古ひろしといえども他にはないであらう。なにしろここでは日本語の通することが、われわれの氣持ちを樂にさせる。

そのうえ憲容氏がおられるのとおられないのと、どちらが氣樂であるかといえは、われわれとしては、多分、あの聰明な總長先生のおられない方が、氣樂であつたにちがいない。

管理所は丘の高みに建つてゐて、五十米四方ばかりを塙で取りかこみ、門は普通の蒙古人の包が、東向いてゐるのとはちがつて、役所風に南面してゐた。門を入つて中央正面の、本館ともいふべき立派な建物は、支那式の建築で、その中に總長室、招賓室、事務室、炊事場、風呂場、便所等があつたが、塙の上からこの建物の青灰色の瓦葺き屋根が出てゐるところは、遠くからだと喇嘛廟でもあるかのように見えた。

本館をかこんで、塙沿いにいくつかの包子があつた。その一つには漢人の傭兵が何人かゐて、夜は交代で歩哨に立つらしかつた。ここに傭われて仕事してゐる漢人は、この兵隊の他にもなお數名をかぞえるであらう。麵をつくつてゐる音が、屋敷の一角から終日聞えてきた。刈り取つた羊毛の積まれた一室には、黄羊の仔が一匹飼われてゐた。そして、その戸口まで行くと、牛乳が貰えるのかと思つて、近よつてくるのであつた。これも牧場の中で捕えたという二匹の鷲の子は、放し飼ひにしてあつたが、もう充分驚ぐらしいの大きさになつてゐるくせに、いつもピョピョと甲高い聲を出して鳴いてゐた。鷲鳥が二羽と家鴨が一羽、それから大きな黒い蒙古犬が十四五匹、これはちよつ



彌親王牧場にて

と數が多すぎるではないかと思つたが、聞いてみるとその大半は、今年の春生まれたもので、まだやつと五ヶ月ぐらいにしかならないという。道理で身体は一人前に大きい、まだどことなく子供臭いところがあつた。

學生たちは下のバター工場で寝泊りしてゐた。ときどき管理所の方へも顔出ししたが、行儀正しくよい印象を與えた。一日學生たちと會食したが、工業をやりたいというものが二人もあつたのは、頼もしかつた。もつともこれらは厚和から來てゐる滿洲人であつて、蒙古人の學生の方は、大抵いゝまは草刈りに家へ手傳いに歸えてゐる、ということであつた。いづれにしろこちらの學生の風潮として、軍人とか學校の先生とかを志望するのが普通であるのに、こういう答を得たということとは、やはりバター工場における實習の影響があるのでなからうか。わたくしはバター工場を見學して、彼らの仕事に對する熱心な態度は、賞讃に値すると思つた。そこには全く彼ら以外に指導者とか監督とかいうものが見られなかつたから。

蒙古の振興策として、まづ教育からという考えを、わたくしは決して間違つてゐると思わないが、その教育の内容ということになると、なお相當に研究の餘地が残されてゐるのである。たとえばわれわれの子供は、學校教育というものから離れて、一種の玩具としての積木や寄木細工や、



新乳王牧場にて

近頃では模型飛行機などを好んで取扱うのであるが、蒙古人の子供にも、なにかこういうことで、その知能を啓發する機會が與えられてゐるであらうか。簡単な機械ではあつても、機械によるバター製造ということが、彼らのいままで觸知しなかつた新しい世界を、またそれに對する新しい生活態度を、教えることにならなかつたであらうか。

バター工場からもう少しさきへ行くと、蒙古人の家が點々としてゐた。この附近一帯は冬營地であつて、蒙古人は夏の牧場から、そろそろこの冬營地に歸えつてきつゝあつた。漸く天氣が定まり、蒙古らしい秋晴れとなつたので、わたくしは草原へ出て、その中の代表的なところを廻つてみたが、どこへ行つても草の生育が思わしくない。昭和十四年に蒙古へきたとき見たような、シバムギモドキの優占的な繁茂ぶりは、何處にも見當らないのである。けれどもノゲナガハネガヤやマンシウアサギリソウとともに、大ていのところにはシバムギモドキもまじつてゐたから、放置しておけば、やはりシバムギモドキが支配的地位を占めるのであらう。そうとすれば現在みる状態は、過放牧の結果かもしれない。

牧長という髯を生やしたお爺さんにあつた。どうしてこう牧草の生育ぶりが悪いのかといふわたくしの質問に答えて、今年七月以來雨らしい雨がふらなかつたから、シバムギモドキの出方が少

ないのだという。これを逆にいえば、雨さえもつとたくさん降れば、この邊だつてもつとシバムギモドキが優占的になるということである。そして、マンシウアサギリソウは雨の少ない年でもよく育つから、けつきよく雨の少ない年には、アサギリソウの方がシバムギモドキを壓倒してしまつて、アサギリソウの優占的な土地が廣くなるのであらう。今年はこれでも中ぐらゐの出来であるそうだが、だからこれよりもつと悪い年も考えられるのである。森林なら毎年の氣候の變化で、その組成まで變わるようなことはあるまいが、草原というところはこのように、毎年の氣候——といつてもこの場合は特に降水量であるが——の變化によつて、まるでその面目を變えてしまう。雨の最も少ない年に旅行した生態學者が、典型的なヨモギ草原であると判定したところを、雨の最も多い年に旅行した他の生態學者が、典型的な禾本草原であるという烙印を捺すかも知れない。

わたくしはこの前旅行した昭和十四年は、どこへ行つても雨が多いといわれた年であつた。それでも正白旗の三支前や十六支前の牧野では、それほどシバムギモドキを多くは認め得なかつたから、シバムギモドキが優占的になる禾本草原というものにも、やはり限界が考えられてよいであらう。すなわち禾本草原のうちに、どんな年にもシバムギモドキが優占的になる一次的なシバムギモドキ草原と、年によつてはシバムギモドキが優占的にならない、その意味で二次的なノゲナガハネガ

ギ草原というのは、おそらくこの二次的禾本草原と同格的なものであらうと思う。いづれにしても草原は森林とちがつて、一年きりの観察では、不充分であるということがわかつたとともに、出来得れば同じ土地における變化を、年をちがえて観察してみる必要がある、ということをも、「層切實」に感じたのである。

五年ぶりに蒙古の草原をほつつき歩き、陰山に沈む夕日をあかず眺めて、管理所へ歸る。それから部屋のランプを點じ、内着にきかえて、一服吸う。他の仲間もそれぞれ調査から歸えつてきて、やがて食事は皆そろつて招賓室の大テーブルでとる。それは食堂であり、食卓どきにみんなの顔を合わす部屋であつた。そして食事を終えた後も、自分の當てがわれた部屋に引き下ろうとする者はなくて、いつまでも茶をのみながら四方山話に花を咲かしてゐるときは、どこかの山にあるクラブヒュッテにでも來てゐるかのような氣持がした。

わたくしは七月以來執拗な下痢に悩んでゐた。しかし蒙古へ入つたら、この下痢も自然に治るにちがいないと考へてゐた。しかるに蒙古へ入つたはじめの日に、太僕寺右翼旗でうつかり乳酒を飲みすぎて、またまたひどい下痢を起こしたままで、ここへ來たのである。それで、できることなら

ここに滞在してゐるあいだに、この下痢を治して、早く馬に乗れるようにしたかつた。三度目の蒙古入りで、もはや感激が起こりにくくなつてゐるといふことも考へられるが、身体の調子がよろしくないといふことも、たしかにわたくしの氣持をくらくしてゐたのである。それが一日のフィールドワークですつかり快調を呈してきた。

だいいち、朝誰れよりも早く起きられるようになってきた。調査隊や探検隊の共同生活の中にあつて、この朝の一ときをわたくしがち得るかえないかは、わたくしの心身の調子が、好調であるかどうかを現わした一つの計りでもあつた。別段この時間をもつて何をしようというわけでもなく、またそれほど他の者より早く起きるわけでもないが、身つくろいを終えて、部屋へかえり、ポロイに紅茶を運ばせる。あてがわれた總長室にはデスクがあり、籐椅子があり、本棚には日本語の書籍がぎつしりと並んでゐる。その中のか一冊をとり出して、お茶をのみ、煙草を吸いながらたいして讀む氣もなく頁をめくつてゐる。ただそれでよいのである。それでこれだけ揃つたこの部屋の道具立てを、生かしたことになるのである。そのうちに他の連中も起きだし、また他の部屋の連中も紅茶をのみに、この部屋へ集まつてくる。けれどももうそのときは、わたくしに必要な朝の一ときはすぎさり、わたくしはやく朝食をすまして、早くフィールドに立ちたいと願つてゐる。

砂丘越え

渾善達克の砂丘越えに、われわれは十六日費した。砂丘といえは内地の海岸砂丘より見たことのない人には、この砂丘群の廣がりか、ちようど靜岡から糸魚川に至る距離ぐらゐの長軸をもつたものであるといえは、だいたゐ見當がつくであらう。大きいものにはちがいないけれども、馬で飛ばす氣なら、四日間で横斷できるといわれてゐる。

昭和三年には東亞考古學會の、昭和十四年と十五年には東京帝大の調査隊が、この砂丘群を横斷した。わたくしは昭和十四年に横斷を試みて果たさなかつた。だからわたくしにとつて、この砂丘群の横斷は、も一度試みてみなければならぬものであつた。

この砂丘群のことを、ゴビ砂漠とか東ゴビとか呼ぶひともあるようだが、そこはゴビとか砂漠とかいふ言葉が、われわれに豫想せしめる荒涼さとは、およそ反對な、植物のよく繁つた、うるおい

の多い和やかな土地であるということを、知つてゐるひとは意外に少ない。

この砂丘群の南縁に近く、扇白旗の旗公署から一日行程のところに、肅親王牧場の北牧場がある。そこに滞在中に初霜がおりた。わたくしたちはここで、防寒用の長靴や毛皮の外套を行李からとり出した。砂丘の裾を色どる柳の紅葉が急に眼立つようになつてきて、そぞろに故國の秋を思わせる。ただ砂丘の砂の色がすこし黄色味をおびてゐるのが、はじめは何だか異國的で氣にならないでもなかつた。しかし、樹木の多いことと、水の豊富なことが、すぐこれを打ち消して、砂丘をわれわれにしたわしいものとしたのである。

この砂丘が、曾つて存在した大きな湖の底に、一度沈積した砂からできあがつてゐるといふ説の、眞偽のほどは知らないが、砂丘と砂丘とのあいだにはさまれた草原には、眞つ青な空をうつした小さな湖がいくつもあつた。その水がこんどは小川となつて、柳の叢林をくぐり、砂丘を切つて流れてゆく。われわれはみな馬に乗つてゐたから、牛車の列をはなれて、あるときは砂丘にのぼり、その西北に向かつて開いたカール状の窪地の底に細石器をさがしたり、あるときは湖を求めてそこに集まつた候鳥を射撃したりした。だから雁や白鳥といつた大物が、しばしばわれわれの食膳を賑わしたことはいうまでもないが、そればかりでなくて、小川にたれた釣糸からも、四五寸の魚が、無

雑作にかかつてくるのであつた。

しかし砂丘地帯といえども、そこは原始のままに放任された自然ではなくて、やはり蒙古人のその中にすみ、その中に家畜を放牧する牧野であつた。砂丘のあいだの草原には蒙古人の包があり、湖のへりでは牛が草を食つてゐた。もつと極端にいえば、われわれは砂丘地帯のどこへ行つても、家畜の足跡やその糞を見出さないところは無かつたといつてもよい。包も家畜も砂丘にさえぎられ、叢林の陰にかくれて見えないから、砂丘地帯はいかにもひっそりと静まりかえつてゐるようであるが、こういうところから見ると、土地の利用に、それはなく、人口も案外稠密であるかも知れない。砂丘地帯の中にも、立派な喇嘛廟がいくつか建つてゐることは、その證據にならないだろうか。

砂丘地帯の旅は楽しかつた。砂丘地帯では、われわれは退屈するということを知らなかつた。砂丘をはなれてからも二た月になる。その二た月というものを、われわれはステツペでくらししてゐる。そのあいだに湖には氷がはり、地上には雪がつもつた。けれどもそれは、ステツペが冬の衣裳をまとつたというだけで、どこまでも單調なステツペであることには變わりはない。われわれのステツペの旅はいつまで続くであろうか。砂丘地帯が遠い思ひ出の國のように思われる。

いまから考えてみると、わたくしを誘つてやまなかつたあの砂丘地帯というものも、このステツ

べのつかまえてどこのない擴がりに比較して、何だか局所的な、小さなもののように感ぜられてく
ることを否定したい。そして、蒙古の蒙古たるところは、何といつてもこのステツベというもの
と切りはなしては成りたないという印象が、深められてくるにつれて、一方では砂丘地帯なるも
の非蒙古な性格が、鮮明に浮きだされてくるのである。

たしかに砂丘地帯は、ステツベの蒙古においては特殊な存在である。しかしさきにも述べたよう
に、そこで蒙古人もその家畜も立派に生活してゐるではないか。しからは砂丘地帯のなにを指して、
わたくしはこれを非蒙古的といわうとしてゐるのであるか。

ステツベに立つて砂丘を顧みるとき、まづわたくしの注意をひくことは、砂丘の中では大馬群とい
うものを、ついぞ見なかつたということである。放牧された馬はゐるにはゐたけれども、それは二
三頭づつの、まことにしよんぼりした群れであつた。もちろん視野のせまい砂丘地帯のことである
から、大馬群がゐても見つからなかつたということも考えられるであろう。しかし肅親王牧場など
でも、北牧場の方は牛と羊とを主にして、馬は専ら南牧場に集中するようにしてゐるといふから、
砂丘地帯は馬の放牧ということに、なにか適しない條件を具えてゐるのでなからうかと、ひそかに

考へるのである。

たとへば、砂丘地帯のように、良好な草原が砂丘によつて切れ切れになり、そのすべてが飛地状
を呈してゐるところでは、その一つ一つが如何によい牧野であろうとも、馬のような動物が群れを
つくつて行動するためには、なにか不都合なところがあるのでないだらうか。つまり地形が複雑な
ために、大馬群の集團行動が困難であるというようなことであれば、それが延いては大馬群の管理
を困難ならしめる所以ともなるのであつて、それは同じくステツベの群棲動物としてその俊足を誇
る黄羊が、砂丘地帯に見られないことも、相通するところがあるらしく思われるのである。

砂丘地帯の馬は、足の裏が柔かいというようなことも聞いたが、もともと馬や黄羊などという群
棲動物の俊足は、ステツベの平坦な擴がりとその堅い地表とに、結びついて發達したものであるこ
とには間違いないのである。

もし砂丘地帯が、馬や黄羊には以上のような理由で不適當な土地であるとすれば、それはつ
まり砂丘地帯が非ステツベ的であるということに他ならないであろう。しかし非ステツベ的である
ということをもつて、直ちに非蒙古的であるといつたのでは、單に蒙古を自然によつて定義してゐ
るにすぎないことになる。非蒙古的というためには、蒙古人の蒙古という立場から見ても、やはり

砂丘地帯が非蒙古的であるのでなければならぬ。

蒙古人の蒙古といつたのは、くわしくは蒙古人が牧畜をする土地としての蒙古という意味である。そもそも蒙古人は牧畜の對象として、現在五種類の動物をもつてゐる。馬・牛・羊・山羊・駱駝がすなわちこれである。ところでこの五つの家畜を、蒙古人はどんな場合にでもそろえて飼ふ必要があるだろうか。五つともそろえて飼うに越したことはないにしても、それをそろえることが出来ぬ場合に、蒙古人はその最低生活に無くてならない家畜として、この五つの中のどれをまづ選ぶであらうか。

従來の見解によると、この中心家畜ともいふべきものは、羊であるということになつてゐるらしいが、わたくしたちの調査の結果からでは、内蒙古の全体に亘り、蒙古人の生活にとつて、牛が中心家畜となつてゐることは、疑う餘地がないのである。とくにこの頃のうちに、粟や麵の入手が困難になつてくると、彼らの自活上、乳製品の重要性が著しく高められてくるにちがいない。わたくしは會つて、南洋のボナベ島においても、これに似た現象を観察した。すなわちボナベ島の島民は、米を常食とするようになつてゐた。しかるに、こんどの戦争で、島民に米の配給がなくなつたとき、彼らは再び、パンの實やヤム芋にかえらねばならなかつたのである。そしてこのようなときに、パ

ンの木やヤムを所有してゐない島民のことを思うならば、現在牛を持たない蒙古人の立場がどんなものであるかは、おそらく想像がつくであらう。

もちろん羊の乳だつて、蒙古人は利用してゐないわけではない。またわたくしは、大昔から蒙古人が牛を中心家畜にしてゐたと、いわうとするものでもない。ただわたくしたちの實態調査の結果からみると、今日の蒙古人のあいだでは、最低生活者と考えられるものでも、牛だけは何とかして持つてゐる。いいかえるならば牛が彼らの牧畜生活の基調をなしてゐる。その牛というのはもちろん乳牛のことであつて、この乳牛から得た牛乳と乳製品とで彼らはその最低生活を一應確保し、その上で餘裕があれば羊を飼うのである。そして、牛・羊（山羊をふくむ）を相當たくさん持つた上で、なお餘裕があるならば、そのときはじめて彼らは馬群を所有してみようという考えを起すに至るのであらうといふことは、馬群はもつてゐても羊群や牛群を持たぬ蒙古人や、羊群をもつてゐて牛群を持たぬ蒙古人といつたものが、彼らの一般的な家族生活において、ほとんど見當らないといふことからの、當然の歸結なのである。

さて、駱駝はちよつと特殊な動物であつて、これを内蒙古における一般的な家畜と考えるわけには行かない點があるし、山羊はしばらく羊に含ませて考えることとするならば、かりに一般蒙古人

として、馬・羊・牛を飼うことが彼らの牧畜の理想ではあつても、この三者を揃えるという理想は必らずしもつねに實現されてゐるわけではないのであつて、それならばこそそれは理想であり、理想の實現をみたものは、衆人から羨望の眼をもつて眺められることにもなるのである。すなわちそこに、蒙古人のあいだにおける、一つの價値判断の基準といふべきものが、おのづから成りたつてくると見てよいであらう。

すると砂丘地帯のように、自然條件として大馬群の成立に不適當と考えられるところは、蒙古人の土地評價からいへば、どうみてもこれを一等地であるとするわけにはゆかないであらう。もしもステツペに、廣大な土地が利用されないままに残つてゐるとしたならば、蒙古人はなにを好き好んでわざわざ二等地をえらぶ必要があるか。ステツペという蒙古人牧畜の一等地が、すでに一通りその利用者で満たされたからこそ、こんどは二等地の利用ということになつたのでなからうか。渾善達克の砂丘地帯の真ん中に、チャハル盟とシリンゴル盟との境界が走つてゐるといふことも、そこがもともと蒙古人から見れば價値の一段低い二等地であり、したがつて争奪の起る可能性が少ないという點では、むしろ一種の緩衝地帯を形成してゐたから、その真ん中に境界が設けられたというようにも解せられる。

たとえばその昔、蒙古人が馬をかつて、お互いに戦争をこととしてゐたような時代を考えても、この戦争の主要な舞臺となつたのが、馬を走らせるのに最も都合のよい、ステツペであつただらうといふことは、すぐ想像のつくところである。したがつて蒙古の戰士たちにとつて、馬を走らせるに、見通しのきかない砂丘地帯は、彼らのステツペ的な一般戦術をただちには利用し難い、一種の特殊地帯をなしてゐたにちがいないと思われる。すなわち蒙古人の日常生活としての牧畜という立場からみても、彼らの逸脱振りを發揮したものとしての戦争という立場からみても、砂丘地帯はステツペのままでは、つねに蒙古的標準に合わないものとして、彼らのあいだで後廻しにされるべき運命の下におかれてゐたにちがいない。

けれども砂丘地帯はこのような蒙古的標準からみて、價値の低い土地であるがゆゑに、その利用のされ方が低いであらうかというに、必らずしもそうではなくて、むしろ價値の低い土地であるからこそ、そこを求めて集まつてきた人たちがあるといふことは、わたくしの興味をひかずにはおかなかつた。わたくしたちはシリンゴル盟にはいつた最初の部落、ヌクセンゴールで、チャハル盟の扁白旗からきた馬や牛車をとりかえたのであるが、ここで仕立てたキャラバンの蒙古人たちの中に

は、意外によそ者が多かつたのである。滿洲や中旗出身などというのはまだ近い方で、遠いところでは、伊犁や青海から来たという、トルグートやタングートまでまじつてゐた。その中には喇嘛もゐたが、全体としては喇嘛でないものの方が多かつた。

わたくしはじめは、こういった使役的な仕事に、喇嘛というものは携わらないで、携わるにしても、それはいわゆる在家喇嘛に限られてゐるのでなからうかと考えてゐたが、ステツペへ出てからの経験では、むしろ使役に出るものゝ殆んど大部分が廟の喇嘛になつてきたので、この考えを訂正せざるを得なくなつた。そしてこの現象の裏面には、喇嘛僧の數をへらされたり、寺院の數を減らされたりして、とかく風當りの強いこの頃の廟の立場として、うるさ方に對しては、なるだけつとめておくに越したことはないという、一種の政策的な氣持ちも手傳つてゐないとはいひ難いであろうが、また一方からいえば、こういう仕事を買つてでる餘剩労働力が、この方面では廟をのぞいたら、一般牧民のあいだにはもはや残つてゐない、ということも考えられるし、また少々残つてゐても一般牧民は、こういう仕事に出たがらないというようにも解せられる。

すると砂丘地帯に、こういう仕事を買つてでる一般牧民の多かつたということは、いつたい何を意味するであろうか。彼らによそ者が多かつたということから、彼らには社會的に、その土地に生

まれた牧民よりも、より大きな行動の自由が許されてゐる、換言すれば、彼らには彼らの行動に對して、彼らの生まれた社會が課するであろう拘束というものが、少ないことはたしかにいえるのであろう。しかしそれだけではない。他處から移つてきたものには、裸一貫で移つてきたものが多いのである。すなわち彼らを束縛する家畜というものがなく、あつたところで大したことのない、いわば極貧者が無産階級に屬する彼らである。だから彼らにとつては價値の低い土地がなんらの苦痛にもならないばかりか、價値の低い土地ゆえに、かえつてそこに彼らを收容するに足る土地が遊んでゐたともいえるのである。

よそ者であり、貧乏人であるから、砂丘地帯にすむ彼らには、比較的行動の自由があり、ときには貧乏人である彼らにとつて、使役に出てゐるあいだは、少なくともその生活が保證されるために、自らすすんで使役に出るといふ場合さえあるであらう。彼らは氣輕で、くつたくなひ連中であつた。けれども分化のすくない蒙古の牧畜社會において、彼らの生活を年中保證するにたるだけの自由労働があるわけでないとするれば、砂丘地帯に集まつてきたこれらの貧乏人たちは、なによつてその生計をたててゆくつもりであらうか。一たい彼らの生活はなにによつて保證されてゐるのだろうか。

おもしろいことに、この蒙古人の牧畜という立場からみれば、二等地としか考えられない砂丘地帯の自然の中には、一等地であるステツベには絶対的無用のものが、いくつも見出された。そこに砂丘地帯の特殊性がある。そしてそのなかでも蒙古人の生活にとつてもつとも重要なものといえ、おそらく、砂丘地帯におびただしく産する、柳條を第一に推さなければならぬ。蒙古を一度でも旅行したことがある人なら、蒙古人の生活が如何に多くこの柳條に依存してゐるかを、見逃がすようなことはなかつたであろう。ちよつと敷えただけでも、彼らの住居である包の骨組み、家畜入れの垣根、アルガリを入れる籠など。しかも柳條がステツベにないとすれば、ステツベにすむ蒙古人は、これを砂丘地帯の蒙古人に求めざるを得ないのである。そこで砂丘地帯にすむ貧乏人たちの仕事の一つであった。そこに生え茂つた柳條は、地上権というものはつきりしない蒙古では、別段誰れの所有に属するものでもない。その柳條の影にうもれて生活する彼らは、柳條を組んで、フェルトで包むかわりに、その上へ泥を塗つた包に棲み、必要とあらば、柳條を切りとつてきて、いろいろな道具を作り、これを賣るなり、あるいは乳製品や麵などといった必需品と直接交換するのである。

ただし彼らはなお、こういった工藝のみに依存して生計をたててゐるものではない。彼らの氣持

からすれば、やはりできうるかぎり牧畜に依存してゆきたいのであるが、どうしても彼らの家畜だけでまかない切れないところを、こういった柳條製品で補わうというのであろう。だからそれは一種の副業である。牧畜だけで立つてゆけない貧乏な蒙古人の副業である。だからこういった砂丘地帯の蒙古人の生活を、典型的な、牧畜一とすぢで立つてゐるステツベの蒙古人から見たならば、牧畜だけでやつてゆけない貧乏人の副業であるがゆえに、柳條工藝は賤業であるとも見做されがちであらうし、また副業を介在させねばなり立つてゆかないような生活は、その不純さのゆえに非蒙古的であるとの、譏りを受けないにも限らないであらう。

ではどうして彼らの副業が本業となり、彼らが牧畜から完全に獨立することができないのであろうか。ひとはよく蒙古の草原にどうして都市が成立しなかつたのであろうかという疑問をもつ。多分都市の成立ということも、社會内における分業の發達と結びつけて考えられるであらう。そして分業の發達ということにはまた、それぞれの分業者が、その生産品のみを通して生計をたててゆけるだけに、社會全体の生産餘剰がなければならぬのである。もしわかりやすく考えたならば、砂丘地帯の柳條屋が専門的に一人だちできないのは、彼らの屬する社會に、彼らの製品を需要するものが少ない、あるいは購買力が少ないということであり、この購買力の少なさは、つまり生産

力の少なさ、したがって生産餘剰の少なさに他ならない。そして、この購買力の少なさも生産力の少なさも、それらはひつくるめて、蒙古牧畜社會の人口の少なさというところに反映してゐる。そのあいだで分業が成立するには、あまりにも蒙古人の人口が少なすぎるのである。

そしてここに、蒙古牧畜社會の發展のはばまれてきた、宿命的な缺陷がなかつたであらうか。たとえば蒙古人はすべてが武士であつたともいわれるが、それはとりも直さず彼らの社會に、農耕社會におけるように、武士を武士として養うに足るだけの餘力のなかつた證據であり、すべてが武士であつたということは、同時にこのすべての武士がまた牧民でもあつたという、その社會の社會的未分化状態を現わしてゐるにすぎない。蒙古人は牧畜以外はなにも出來ない、他のことはすべて漢人にたよつてゐるなどというのは、もとより一種の誇張であつて、蒙古人の中に、わたくしは、銀細工師や大工や獵師の存在することを認めたが、これらとて砂丘地帯の柳條職人と同じように、牧畜社會の中にあつて牧畜に對立した職業なのでなく、どこまでもその蔭にかくれた一種の副業的存在にすぎないという點では、同じ制約をうけてゐるものといふことができる。

だが砂丘地帯は非蒙古的で、そこには一人前の蒙古人として、牧畜だけで立つてゆく見込みのないような人間ばかりが多く集まつてゐるといつてみたところで、ステツベの蒙古人が柳條製品なく

して暮らしてゆけないことが明らかである以上、かりにステツベにおける蒙古人の牧畜生活が、眞に蒙古的と呼ぶにふさわしい生活であり、砂丘地帯における牧畜は、ステツベにおける牧畜からみて、二次的に派生したものであるということを認めるにしても、けつきよく今日みるステツベの蒙古人の生活様式は、砂丘地帯という非蒙古的なものを、非蒙古的ながゆえに排斥するのではなくて、むしろその非蒙古的さを生かすものの現はれたところに、はじめてその完成を見るに至つたものである、といつてよいのでなからうかと思う。かく考えてくると、砂丘地帯はその非蒙古的さのゆえに重要なのであり、その重要さを認めたるがゆえに、シリングル盟とチャハル盟とでこれを折半してゐるといふような解釋——その解釋にはわたくしは、にわかには賛成しがたいが——も、あるいは成りたつてくるかも知れないのである。

(一九四四・一二・一七 ザレン・スームにて)

タラというのは、蒙古語で平^{たひら}というような意味であろう。蒙古のステツベは、それ自体が一つの大きな平であり、これに草^{クサ}洋という字をあてた人もあるように、海面を思わすような水平な土地の擴がりであると、とかく考えられがちである。しかし内蒙古に關するかぎり、かりにチャハル盟の陰山脈や、チャハル盟とシリントンゴル盟との境にあたる、渾善達克の砂丘群をしばらく除外するとしても、内蒙古でわれわれが、普通にステツベといつてゐるものは、文字通りに水平な土地の擴がりではなくて、地質的にみればそれぞれの時代を劃する、いくつかの面が、たがいに喰いちがつて並んでおり、地形的にみれば、そこにはやはり、山あり谷あり、丘もあれば平野もあるということになるのであつて、この點では蒙古のステツベといえども、他の國と異なるところは、ないのであるが、ただこれらの土地のどこもかもが、一樣に草で掩われてゐることと、土地の起伏がすこぶるお

おらかで、比高にとほしいことが、たとえば日本内地と比較したような場合に、景觀上のいちじらしい相違點をなすものでなければならぬ。そしてこの景觀の相違が、まづわれわれにステツベを類型的にちがつた土地として、印象づけるのであり、その印象の表現が、ときには海にもたとえられたのである。

だから蒙古のステツベは、一般的にいつて、大きな波狀地形の連続であり、その浪の底に下りたつても、波頭のうえにのぼつても、つねに視界を劃するものが、地平線であるという形容は、ある程度まで、眞實を傳えたものといつてよいのであるけれども、それがほんとうに起伏のない眞の平な土地で、しかもそついつた土地がどこまでも擴がつてゐるため、われわれの眼に、大洋の水平線と嚴密に相似的な地平線が映るようなところというものは、蒙古のステツベ廣しといえども、そつどこにでも存在するものでないといふことを、われわれはこの蒙古語でタラと呼ばれる平な土地の、意外に限定された分布状態から、推察することができるのである。

もつとこれを強調するならば、ここに一つの大きなタラがあるといふことは、蒙古のステツベにおいて、大きな山があるとか、大きな砂丘群があるとかいふのと同様に重要な、その土地の一つの地理的特徴を現わしてゐることになるのである。そしてもし、こついつた特徴に着目したならば、

ステツペとはあながち單調な、變化のないところとばかりはいえないのでなからうか。

そういう眼で内蒙古の地圖を眺めてみると、渾善達克の砂丘地帯について、わたくしの注意をひいたものは、砂丘地帯ほどの大きさはないけれども、シリングル盟東スニト旗のまん中よりやや南よりに、子午線を斜めに切つて走る平坦面の存在することであつた。しかし、どの地圖にもこの平坦面の名稱は記入されてゐなかつたから、それが蒙古人のあいだで、タムチン・タラと呼ばれてゐることを知つたのは、わたくしたちの眼のまえに、いよいよこのタラが姿を現わすようになつた、ペーリン・スームに着いてからのことである。

そこは、いく日かけて越えてきた丘陵地帯が、まさに盡きんとする最後の斜面であつて、その斜面の中腹に、スームの白い建築が、ブロックをなして浮きあがつてゐた。うしろの丘の上には、オボが立つてゐて、そこまで登るともうタムチン・タラをすつかり見渡すことができたが、その眺めこそはまさしく海というにふさわしいものであるにちがいないと思つた。もつとも地平線のかなたに一部分ではあるが、低くつらなつた丘陵の見えるのは、いささか不満を覚えさしはしたけれども、それはかえつてこのタラの廣さに對するわたくしの判断を、夢から現實に呼びもどすに役立つたであらう。廣いといつても、それは二日もかければ確實に横斷できる廣さであつた。

ところでわたくしの夢というのは、どちらを向いても地平線より見えないようなタラのまん中に、天幕を張つて、そこで生活しながら、なにもものにも煩わされることなく、自然の觀察がしてみたいというのであつた。そして、さういつた點では、蒙古人さえむしろ住んでゐない方がよい。野生の動物と野生の植物だけの方が、かえつて有難いと考えてゐた。しかるにだんだん話を聞いてみると、このタムチン・タラには、蒙古人が全然すんでゐないといふのである。もしそうしたら、わたくしの夢の一半は、ここできなえられるかもしれぬ。

そのまえに、どうしてこの廣いタラを蒙古人が利用しないのかを、知る必要があるであらう。しかしその理由は簡單であつた。タラには井戸がないのである。だから蒙古人は井戸のある、丘陵の谷間に包を張つて、丘陵を生活の根據地としながら、丘陵に接したタラの一部分を、彼らの家畜の放牧地として利用してゐるにすぎない。それはあたかも、タラという海に對して、沿海漁業をやつてゐるようなかたちである。ただし冬になつて雪が降るようになれば、この事情は一變してくる。そうすれば人も家畜も雪が使えるようになるから、牧野としてのタラの利用が可能となつてくるのである。けれども冬になつてから、吹き曝しのタラへでてゆくよりは、谷間のラクダガヤの中に籠つてゐた方が、居心持がよいので、勇敢に出てゆくような蒙古人はほとんどゐないらしい。

ここでわたくしの夢は、ステツペにおける人間の生活を規定する、二つの現実的な要素をおき忘れてゐたことがわかる。その一つは水であつて、水なくして暮らしえないことは、蒙古人であろうとわれわれ旅行者であろうと、すこしも變わりはないはずである。ペーリン・スームにゐるあいだに、一度雪も降つたが、根雪となるにはまだあまりに少量であつた。かりに水の方は解決できたとしても、もう一つのものが満たされねばなお充分とはいえないのであつて、それはすなわち薪、もしくは燃料を意味してゐる。柳條の豊富な砂丘地帯ならいざしらず、ステツペの蒙古人には、われわれが常識的に考へて、燃料となるようなものは與えられてゐない。そこでいつの頃からか、彼らは獸糞を燃料に利用するようになったのであつて、それが今日となつてみれば、家畜をはなれては成り立たぬ蒙古人の生活の一面をなしてゐる。家畜をはなれ、家畜のゐないところに生活しようとしてみても、燃料の問題で行きつまつてしまふからである。

そしてこの點でも、われわれと蒙古人とで條件に變わりはないのである。だから水を得るためにさく井器を携行し、燃料のためにはヘーデンのように、石炭をうんとこさと持ち歩くようにでもせないかぎり、われわれの旅行生活はつねに蒙古人の生活にしたがつて、水と燃料との補給を確實にしなければならぬ。すると、ここはよいからといつても、無闇に蒙古人の生活圏外に飛びだすわけにはゆかなくなるのであつて、結局われわれは残念でも、蒙古人をさがし求め、その包の近くに天幕を張るより仕方ない場合が多いのである。

わたくしの夢は、よい水とよい燃料とが、至るところで自由に、またふんだんに得られる山岳旅行になれきつたものの夢みた、いかにもあまい夢であつたらう。それだけにまた、この現實はわたくしにとつて、ステツペの旅行のわたくしに課した、もつとも大きな苦痛の一つであつたといいたのである。そういえば、あの柳條の繁みを縫うて、せせらぎをたてながらきれいな小川の流れてゐた、砂丘地帯を歩いてゐるときには、蒙古でなくて、どこかわたくしのよく知つてゐる内地の山へでも、來てゐるかのようと思われたことであつた。

このついでにも一つ今度の旅行で、わたくしの氣づいた點を書き添えておこう。われわれは、はじめに計畫してゐたような、通しの輸送機關というものを持つことができなかった。それで、これにかわるべき方法としては、いわゆる驛傳式に、適當な場所で、必要な數だけの馬なり牛車なりを、そろえ直してゆくより他なかつたのである。だが、このためにわれわれは、どれだけ餘計な氣苦勞をし、無駄な時間をかけねばならなかつたことか。自動車の自由に使えるときなら、誰れだつて牛車の世話になどならないであらう。牛車を使う以上は、それぐらいの辛勞は當然覺悟すべきでない

か、というのも一應もつともな話ではあるが、調査旅行というものは、その目的に應じて、自動車を使うのが最もよい場合もあるかわりに、また自動車では駄目で、牛車でなければならぬといった場合もでてくるから、單なるスピードだけではきめられぬところがある。だからこういった形式を採用する以上は、やはりそれを最も自由に、また能率的に使えるような工夫が必要なのであつて、それにはわれわれも將來は、ヘインやアンドリスにならない、旅行に必要な輸送機關を、現地人から借用するというようなことを止して、これを調査隊自身の所有に移さねばならないであろう。そのために莫大な經費のかさむことは避けられないが、不用になつたら賣却するという手も考えられないではない。そしてこの調査隊所有の輸送機關とともに、これを管理する人間も、契約によつて、調査隊の使用人として連れて行くようにすればよいのである。

借用で行こうとする以上、調査隊の完全な自主性が發揮できないことは當然であるが、それはしばらく理想論として、かりに借用で行くとしたところで、もう少し圓滑に行く方法もあるうと思ふのであるけれども、なに分相手が舊弊な蒙古人のことであるから始末が悪い。だいい彼らは彼らの所有物を貸したくないのであろう。われわれは借用のつもりでも、彼らにとつてはとかくそれが徵用と感ぜられる所以である。だから貸すには貸しても早くかえしてくれと必らずいう。そんなら

貸したために實際彼らの仕事に差しさわりが起きるかといへば、必らずしもそうではなくて、その家畜は遊ばせて草を喰わしておくにすぎない場合が多いのである。われわれから考えると、遊ばしておくのもつたないから、家畜を貸して金がかうかるものなら、一日でも長く、かつ高く貸さうということになるはずであるが、その邊に蒙古人とわれわれとの經濟觀念のあいだに、相當の開きが感ぜられ、そしてその開きがまた、蒙古人の牧畜を、うつかりすると誤解する原因ともなるのである。金がなんでも解決するというと、悪くとられやすいけれども、やはり一應は金で話のつくほうか、あつさりしてゐてよい。金を有難がらない人間を使うと、こちらとしては有難いところもたしかにあるが、けつきよくは氣苦勞が多く、不愉快である。

タムチン・タラの横断は、幸い月明を利用することができたので、用意した一日分の水と燃料とをつかつて、計畫どおり二日ですましてしまつたが、この蒙古人から見棄てられた大平野は、豫想にたがわず、野獸の跳梁をほしいままにしてゐる世界であつた。日が落ちるとともに、狼の鳴き聲が聞こえてきた。その夜は用心して、牛も馬も放さずに寝た。狼に對し、ステツペの大型野生獸の一方の雄ともいふべき黄羊の大群にももちろん出遭つたが、われわれはむしろ、至るところといつ

てよいぐらゐに落ちてゐる彼らの黒豆のような糞から、このタラにいかにかしい頭敷が棲んでゐるかを想像した。しかし無住地帯のより大きな收穫は、植物の側にあがつた。自然に人間の手が増えられないとき、あるいは直接人間の手が増えなくても、蒙古のような場合なら、間接に人間が家畜の放牧によつて自然に手を増やしてゐることになるから、このような間接的な作用も行われないうとき、いいかえるならば、自然を一切の人間的作用から開放して、自然のままに放置しておくとき、その土地の氣候状態にしておかれないかぎり、最後にその土地で、相當廣い面積にわたり、支配的な地位を占めるに至るような、一定の種類の植物の、土地占據状態乃至は土地利用状態を知ること、生態學に立脚して、土地評價なり土地利用なりを論ずる場合の、最も基礎的な指針を與えることになるのであつて、たとへばそれによつて、その土地の植物的生産が、家畜の過放牧のため、その土地に與えられ、あるいは許されてゐるだけの生産量を發揮してゐない、というような判定も下されるのである。

しかるに蒙古のように、ごく特殊な場所をのぞき、どこもかも草で掩われてゐるところは、またどこもかも蒙古人の放牧に適するということになり、またそれならばここに蒙古人の牧畜生活が固定し、持續されてきたのであるから、内蒙古のステップを歩いて、われわれの一番

困るところは、その植物的自然に、上にのべたような人間的影響——この場合は家畜の影響——がどの程度まで加わつてゐるかを判定するに足る、比較資料としての純粹な、自然のままな自然というものが、容易に把握できないところにあつた。

それでもいろいろな知識を綜合して、わたくしはまえに一度、内蒙古のステップは、周縁的な、より氣候の濕潤な地方から、内陸的なより氣候の乾燥した地方にかけて、シバムギモドキやノゲナガハネガヤなどという禾本科植物によつて代表される禾本草原、ヨモギによつて代表されるヨモギ草原、ニラによつて代表されるニラ草原という順序の配列を見るのが、家畜の影響の如何により、多少の變化があつたところで、まづまづ自然の成りゆきを現わしたものであらうという考えを發表しておいたのであるが、出来るならばもう一度も二度も自分で歩いて、この見解を確め得るような適當な場所をさがして見たいと願つてゐたのである。

だからタムチン・タラが無住地帯であり、その中心部は家畜の影響のないところだ、ということがわかつたときから、わたくしはひそかに期待するところがあつたのである。果せるかな、ここでわれわれが大きな發見に雀躍したというのは、わたくしがいまままでに一度も出喰わしたことの無い類型として、さきあげた禾本草原とは異なつた、いわば矮型禾本草原あるいは輕禾本草原ともい

うべき、春のひくいハネガヤの一種を主とする草原の現われてきたことであつた。その後われわれは、國境近くまで調査をすすめたが、そのあいだに、この型の草原を何度も観察したことから考えると、ヨモギ草原のもう一つ内陸側に現われるべき草原は、これを一つの類型として把握しようというのなら、ニラを代表種と見るよりも、むしろこの矮型のハネガヤを代表種と見ることによつて、ニラ草原という類型を樹立するかわりに、矮型あるいは軽禾本草原という類型を認めた方がよいのでなからうか、と考えるようになった。

タムチン・タラを越えて以來、気温はとみに下りだした。太僕寺右翼旗を出発點として、一路西北への旅をつづけてゐたわれわれは、いきおい猛烈な季節風を眞向から受けざるを得なかつたのであるが、それもついに終るべきときがきて、進路は一轉し、いまはあたたかい太陽に面して、南下をいそぐわれわれであつた。けれどももう地上にはすつかり雪が敷きつめた。寢袋の口には毎夜のようにいきが凍りついた。われわれはもう何日か天幕を張つたことがない。お寺まわりとわれわれが呼んだように、たいていは喇嘛廟の世話になつて、必要な数の家畜を集めてもらつたり、必要な人数を出してもらつたりする以外に、そこではわれわれのために用意された包が、いつもあかあか

とアルガリをたいて、われわれの到着を待つてゐたからである。

こういう世話を廟で引きうけるのが、必らずしも内蒙古一般のきまりになつてゐるとも考えられない。しかし行政組織が不完全で、われわれがなにか頼みこむべき役所として、体裁をなしてゐるものといへば、廣い東スニト旗中にただ一つ、旗公署があるきりで、その旗公署というものさえ、来てみれば、ただの包をいくつか並べただけであつて、役人はその中で腹遣いになつて事務をとつてゐるといふ調子である。これに對して一般牧民の生活はどうかといへば、轉々として居を移す、いわゆる遊牧の生活である。かかる遊牧民の家族が、いく組か一つとところにあつまつてゐて、見たところは村落とか部落とか呼びたくなるような場合でも、くわしく調べてみるとその結合が、固定生活者におけるような持続的なものではなくて、彼らの場合は、たまたまその季節に、それだけの家族がそこで落ち合つたというだけで、次の季節には、またお互いに、どこで誰れの家族と落ち合うのかまるでわからないという、はなはだ心細い、一時的浮動的な結合である場合が多い。

だからこういった遊牧民の生活には、その最低社會單位として、われわれでいへば一軒一軒の家に相當するかと思われ、蒙古人のアイルというものを認めることはできても、アイル以上の社會單位が、はたして認められるかどうか疑いなきを得ないのである。そしてこのことは、移動の回數

が多く、またその移動の距離の大きい、タムチン・タラ以北の遊牧蒙古人に對して、一層よくあてはまるのでなからうか。

いまこれだけのことを頭に入れておいて、この遊牧蒙古人の社會に喇嘛廟を登場さしてみるのである。すると、遊牧民の浮動性に對する喇嘛廟の固定性が、蒙古の草原を舞臺として、いかに鮮やかな對照をなすものであるかに想到しないものはないであろう。そしてこの對照は、遊牧民の移動家屋である包が、規格的で、大きさに一定の限界があるのに對し、固定家屋たる廟が、草原の單調さを破つて、その豪華な建築を誇るとき、さらにその著しさを増すのである。しかもそれが宗教という好餌をそなえたものとすれば、かかるステツペの遊牧社會において喇嘛廟はほつておいてもおのづから、一つの社會中心とならざるを得ない。そしてそこに、宗教とは一應はなれた廟の社會的機能というものも、生まれてくるであろう。

たとえば移動のはげしい一般牧民が、固定的な廟に倉庫をたてて、そこにその財産をあづけるようになるのに對し、固定的な廟の方では、逆に移動する牧民にその家畜をあづけて、管理を依頼するといふような關係も、一部では認められたのである。われわれははじめ、廟の本堂をとりかこんでかたまつた建物は、喇嘛のすむ僧院のようなもので、すべて廟に附屬し、あるいは廟と關係のあ

るものばかりであると思つてゐたが、よくしらべてみると、その建物の大部分が一般牧民の倉庫であつて、廟の建物というのは、本堂以外には、ごくわづかの部分を占めてゐるにすぎないような場合もあつた。

また、廟のまわりにはよく、乞食小屋とでもいいたいような、まつ黒になつたみすほらしい包が張つてあるのを見かけたが、これは身寄りのない老人や寡婦で、一人では家畜の世話のできなくなつたものが、その家畜を廟に寄進してしまつて、廟にくつつき、その餘生を廟の救恤によつて生活してゐるのである、ということであつた。そしてこれもまた、移動のすくないチャハル盟では、われわれのたえて気づかなかつた現象の一つである。もし一般牧民の移動性が、大きくなればなるほど固定的な廟に與えられる社會中心性も、それにともなつて大きくなるものと考へることができるとすれば、タムチン・タラ以北において、われわれが廟の世話になるところの大きかつたのは、一般牧民の移動性の大きさを反映して、この方面では廟の社會中心性が大きく、したがつて廟は、ある程度までその社會の代表者としての機能を、果たさなければならぬ地位に、おかれてゐたものと解釋してよいのであるまいか。

廟のもつ求心的な作用というものは、ただにステツペの住民たる一般蒙古人にのみその影響を及

ぼすものではなかつた。實をいえば、蒙古人さえ住んでゐないところを夢みてゐたわたくしのことであるから、廟などというものは大嫌いで、むしろ反感をさえ抱いてゐたのである。そのわたくしが、ひと一人出あわぬ曠野の上で、一日寒風に吹きさいなまれてゐると、その日の宿泊地である廟の建物を、遠い彼方に小さく見出したときには、うれしく思うようになった。ステツペの自然の單調と寂寥とに對する一種の緩和劑として、人間的なものを一手に引き上げたような廟の建物は、たしかにそれだけでも見た眼に効果的な印象を與えずにはおかない。わたくしは着くときばかりでなく、發つときにも、しばしば丘の上に馬をとどめて、まつ青な空とまつ白な雪野原のなかに、クリーム色をした廟のある風景を、見かえることを忘れなかつた。

かくしてわれわれがオルンホトツク・スームまで南下してきたとき、そこに待つてゐたものは、タムチン・タラの再度の横斷ということであつた。わたくしはスームのまえにたつて夕日にかがやくタラを眺めた。雪に掩われたタムチン・タラはさながら凍れる海であつた。われわれはこの海を如何にして渡ればよいであろうか。砂漠の船といわれる駱駝にのつて渡れば、途中で泊まらなくても一日で、對岸のザレン・スームに着けるといふことだつたので、十九頭の駱駝をそろえて、明日は

早出ということにきめた。

その朝は、有明の月明りにスームを出帆した。夜が明けても東雲にかくれて太陽はなかなか顔を出さない。駱駝のうへは寒かつた。太陽は出たが、アイスダストが空に舞つてゐると見えて、ハロー現象を呈し、偽太陽がならんで六つも現われたばかりでなく、中天には太陽に背を向けた利鐮のような虹がかつた。こんな現象の見られるのは寒い日にきまつてゐる。とくに、太陽をはさんでその兩側に位置を占めた偽太陽は、ほんものの太陽よりも強烈に、ギラギラと輝いて、魔性をおびたものの氣味わるさをおぼせた。そして太陽が西の地平線に沈むときまで、この二つの偽太陽は消えなかつた。タムチン・タラに再び夜がきた。しかし、そのときはもうわれわれは、まさに對岸の波止場、ザレン・スームに着かんとしてゐた。

(一九四四・一二・一九 ザレン・スームにて)

チャハル印象記

一七八

シリングル盟から三ヶ月ぶりに、チャハル盟へかえるということは、一行のたれにとつても、それぞれに楽しい期待を抱かせるものであつた。通譯のサインエルブ君とバトゥ君のころは、ふたたび郷里の土を踏み、そこで一家團欒のうちに迎える新年の喜びで、一杯だつたらう。わたくしはまた、チャハル盟までかえれば、も一度乳奶酒にありつける、ということがうれしかつた。

世界のどんな隅々へ行つても、酒に不自由するなんてことはあるまい。ところ變れば品變わるで、原料となるべきものはちがつても、人間が酒と名のつくものを嗜まないでいられるはずはないのだから、きつとその土地土地に特有な、風土の香りの高い酒が、醸造されてゐるにきまつてゐる。少なくとも蒙古に関するかぎりは、あの白葡萄酒にカルピスの風味を添えたような乳奶酒があるではないか。いよいよ困つたら、こいつを現地調辨してでもやつてゆく手はあるであらう。そう考え

て、つうかうかと、張家口から持參のウイスキーを、最初の一月ぐらいで、おおかたあけてしまつた。しかるにシリングルへ入つてみると、乳奶酒はないのである。つくらないのではない、いまはその季節でないというのだ。いかにいまは冬で、乳を搾らないから乳奶酒の製造はできないかも知れぬ。しかし酒のみの立場からいえば、冬用の酒をとつて置かないというのも、はなはだ不心得な量見のように思われる。シリングルの蒙古人は、それだけ酒のつくり方が少ない。いいかえなならば、それだけ乳の利用の仕方が少ない。もつとさかのぼれば、それだけ搾乳量が少ないのではないか、とも考えてみたが、それよりもつと直接的な原因は、チャハルの蒙古人のように固定家屋をもち、固定生活を營まないで、一年のうちは何回か移動をくり返さなければならぬシリングルの蒙古人とつては、身の廻りの家財道具がある程度以上に殖えることも困りものであるうし、とりわけ酒のような液体を多量に貯蔵し、またこれを運搬しなければならぬことになる、特別の工夫を凝らさぬかぎり、運んでゐるうちにすつかり凍らしてしまふ懼れがあるからであらう。話に聞くとチャハルでは、冬用の酒は土の中に埋めたり、炕をたく暖かい固定家屋の中に入れておいて、凍結を防いでゐるそうだ。われわれがシリングル旅行中、漸くの思いで手に入れた一本の酒も、毛皮で嚴重にくるんでおいたにもかかわらず、完全に凍つてしまつたので、その水をストーブの上

で融かして、残念ならいささか氣の抜けたところを、賞味するようなことになった。

冬季に酒を貯藏してゐるかゝないかというのは、要するにチャハルの蒙古人と、シリントルの蒙古人とのあいだにみられる、定住と非定住という居住形式のちがいに結びついた、生活技術の差異の、ほんの一例を示すものにすぎないであろう。チャハルの蒙古人が、われわれの眼にもおしいそうに見える、眞つ白な落雁のようなホロトや、ウエーファースのようなウルムをつくるのに對して、シリントルの蒙古人は、名前は同じくウルムと呼んでも、べとべとの、何だか未製品のようなウルムしか作らないというようなことも、詮じつめたならば、やはりこうした二つの居住形式の差を、その食品文化の上に反映したものであるかも知れない。

しかしシリントルといつても、その西端に位置する西スニト旗のように、その一部をもつて漢人地帯に接してゐるところでは、例外的な現象も見られたのである。たとえばわれわれが、もう一日行程でチャハルへはいるという、シリントルの旅の最後の宿りにえらんだ西スニト旗の一部落などは、固定家屋を持つてゐないという點では、なおシリントル的であつたけれども、しよつちゆう移動するのではなくて、同じ場所に二三年も住んだ上で、場所を變えるというから、やはり遊牧をしてゐることにはなるであろうが、形式上は、もはやこれを典型的な非定住と呼ぶことはできない。

むしろ非定住から定住への移行行きを示す一つの興味ある中間型として、取りあげるのでないかと思つた。ここではまた、仔畜に與える冬季の飼料として、油粕を用いてゐることがはじめて注意されたが、これなどももちろん、漢人地帯すなわち耕作地帯との接壤を、有力に物語るものでなければならぬ。われわれはこの部落で吹雪の中に天幕を張つたが、通譯の二青年はしきりに、天幕でゐるのもこれが最後だという。固定家屋をもつたチャハルの蒙古人は、住居にゆとりがあるから、われわれが行けば、包かバイシン（固定家屋のこと）か、どちらかを呈供してくれるだろうというのである。はたして彼らの言のごとく、これが、この旅行における最後の幕営になつた。

バイシンでゐるぐらいなら、包の方がまだしも趣きがあつてよい。その包よりもわれわれにとつては、天幕を張る方がどれだけ快適であるか知れない。だが、それはもつぱら季節のよいときの話であり、また草原の自然に憧れて、町の生活から抜けだしてきた當座の話ではあるまいか。われわれはもう何ヶ月か草原をさまよつてきたうえ、いまではその草原も一面の雪に掩われてしまつてゐる。雪をかきわけて天幕を張り、アルガリをたいたストーブでかろうじて暖をとるといふことが、もはや必らずしも最上の生活であるとは思えなくなつてきた。なにかもつと人なみな、暖かい生活がしたくなつてきた。すると不思議なもので、包だけより見なかつたシリントルから、バイシンの

あるチャハルへはいると、同じ蒙古人の部落でも、そのバイシンが一ときわ眼立つて、その中にいかに人聞らしい暖かさをつつんであるかのように見えだすのである。どうせバイシンといつたところで、一般に見うけるのは、三間房子にすぎないし、そのバイシンの前か横に、フェルトの黒くなつた包を、後生大事に据えつけてあるのが、かえつてむさくるしい、不調和な感じを興える。そのうえ漢人部落とちがつて、蒙古人部落は密集してゐないせいも、部落全体からうける印象が、何だかごたごたとして纏まりがなく、張家口を出て、漢人地帯を通りすぎ、チャハルの蒙古人地帯へはいつてはじめてその部落をみたときには、いつも場末の貧民窟へでも来たかのような気がして、背景をなしてゐる壯麗な自然とは、およそ似つかわしからぬものを見せつけられてゐるかのようで、眼をそむけたくなつたことさえあつたのに、奥からでてくると、それがまるで反対になつて、いかにも暖かく豊かそうなものに見えるなんて、ずいぶん勝手だとは思ふけれども、それがほんとうなのだから仕方がない。

行き暮れて、見知らぬ部落へ入つたときなどは、ことさらにこういつた感じが深いのであつて、一夜の宿りとはいへ、親切な気のおけない家が見つかつてくれることを願う気持は、内地の山旅でたびたび経験してきたところと、變わりはないけれども、ただこの場合は自分でじかに交渉するの

ではなくて、通譯まかせであるだけに、それだけ餘計に心細いものがある。そして、この部落にはわるい病気がはやつてゐて、泊まれる家はない、というような報告を聞けば、われわれはまた何里かはなれたつぎの部落まで、黙々として前進をつづけねばならなかつた。どうしてそんなにしないで、バイシンや包に泊まりたいのであろう。どうしてそんなとき、勇敢に天幕を張り、自炊する氣持にれないのであろう、といふかるひとに對して答える言葉がない。山の中から人里へ降りてきたときと同じように、もう天幕を張るなんてことは、われわれのだけれどもが、どこかへ置き忘れてしまつてゐたかのようだ。

けれども泊める方の側に見れば、一人や二人の客ならば何とでも仕様もあろうが、一行六名、それに馬夫が少なくとも三名はついてゐる。それでも食糧は持参してゐるのだし、水と燃料だけなら蒙古人だつてそう厭な顔をするわけもないのだが、ただ問題はわれわれのつれてゐる十頭近い馬の飼料にあつた。二ヶ月あまりもシリゴンを駱駝で旅行してゐたわれわれは、チャハルへ入るや、駱駝にお別れをつけて、またもう一度馬に跨がり、馬車に荷物を積んだのであつたが、馬の飼料が問題になるなんていうことは、そのときは考えていなかつた。いやそれまでも、蒙古の旅行に飼料の心配があるなどということは、考えてもみなかつたのである。足をくくつてその邊に放つてお

けば、馬はひとりて勝手に草を喰う——それが蒙古であり、蒙古の放牧の成立する所以であると考えて、疑うところがなかつたのである。現にわれわれは、夏以來そうして旅行をつづけてきたではないか。馬も駱駝もそれでよかつたではないか。

それに、馬に飼料を與えねばならないなんて、どうしたわけだろうと、はじめは合點がゆかなかつたが、これは全くチャハルの習慣によるものであることがわかつた。チャハルの蒙古人は、大興安嶺の根河の馬オロチョンのように、夏使用する馬は冬休ませ、夏休ませた馬を冬に使う。そして、この冬使う馬には特に乾草を與えるのである。すなわち彼らが乾草を刈る目的は、彼らの家畜全体のことを考えてゐるのではない。もちろん幼畜や病畜には乾草を與えることもあるであろうが、それをのぞけば第一には、彼らの乗用に供する冬馬のためであり、また彼らの訪問客が乗つてくる冬馬の接待のためである。そう考えれば、彼らの用意する乾草量が多くないこともわかるし、それぐらゐの量では、萬一大雪にでもなつたとき、彼らの家畜全体を救うに足るようなものでないこともわかるのである。だからまた、彼らのこの貴重な乾草を、不意の、見知らぬ客に多量に提供しなければならぬといふことは、水や燃料とちがつて、かなりな苦痛を意味するものでなければならぬ。水や燃料とちがつて、乾草には相當な勞働が支拂われており、あるいはそれだけの勞働に代わ

るべき金錢が支拂われて、漢人から購入された場合もあるであろうから、それを考えると、病人があるといふ口實をつかつて、われわれが体よく斷わられてゐたようなことも、まんざら無かつたとはいえないであろう。

しかしこれで、なぜシリングルの蒙古人は、乾草を刈らないかといふことの、一半がわかるように思う。ひとはよく乾草を蓄えるチャハルの蒙古人にくらべて、乾草を蓄えないシリングルの蒙古人が、技術的に後れてゐるかのやうにいうけれども、冬馬のかわりに、冬は駱駝を用いることの多いシリングルの蒙古人にとつては、この點だけについていへば、なにも乾草など蓄える必要はないのである。なぜなら、駱駝の好んで食うやうな灌木の類は、冬になつても雪に掩われてしまふやうな心配はないし、それに駱駝という奴は、一週間や十日食へものをとらなくても、平氣であるらしい。それならチャハルでもこの便利な動物を、もつと飼えばよかりやうなものであるのに、チャハルに駱駝が少ないといふことは、やはりそこに、駱駝を飼うに適した牧野が少ないといふことと、結びつきがありやうに思われる。

シリントンからチャハルへ歸つてみて、チャハルの山國であるということが、よくわかつた。われわれはすでに、西スニト旗から上都旗へ出る途中、相當雪の深い山を抜けてきたのであるが、あれもおそらく、陰山の一支脈なのであろう。チャハルはその陰山ゆえに山國なのである。陰山という山は、じつに馬鹿でかい山脈であつて、その主脈はチャハル盟のまん中をほぼ東西に走つてゐるが、主脈だからといつて、必らずしも高さがすれてゐるわけではなく、むしろその高さにおいては、主脈にまさるとも劣らぬような長大な支脈が、主脈の兩側に何本か派生してゐる。だからチャハルを南北に歩こうというのなら、コースの選び方一つで、陰山は、主脈上の峠をどこかで越せば、それで大した苦勞もなく、通りすぎてしまふ。しかるにわれわれの選んだコースのように、チャハルを陰山の主脈と並行に東西に歩こうということになると、いきおいこの長大な支脈に行きあたらざるを得ない。そしてこの支脈は支脈として、またそれなりに何本もの長大な枝尾根を出してゐるから、あいだの谷も長く、その中に入りこめば、結構山らしい氣持がするのである。そのうえとところどころには、ちよつと形のよい岩山も聳えてゐるから、われわれがオルンホトツクから、タムチン・タラの、違い棚のようになつた二つの平坦面の、喰い違い面を、遠く地平のかなたにのぞんで、山の連なりのように誤認したのなどは、わけがちがう。

アトチンを出てしばらく行くと、そうした支脈の一つが、草原をかぎつて、行手にその姿を現わした。南の方にあたつて一ときわ高いのは、徳化ざかいのホンゴル・オボでなからうか。ひさしく個性のない丘陵ばかりを見てきた眼には、山の姿は見てゐるだけでも楽しいが、暇があつたらやほり登つてみたい。登らない山は食べない御馳走と同じで、空腹で食慾が旺盛であればあるだけ一層つまらない。しかしさを急ぐので、登山を割愛してわれわれは山越えにかかつた。ちようどそのころ、廂黄旗の蒙古人地帯では、流感がはやつてゐるといふ噂さがあつたので、旗公署の方へはよらずに、この山を南よりに横断して、一旦漢人地帯へ出る豫定であつた。それには物資の補給ということもあつた。

雪の上で馬車のスピードが出ないということもあるが、この山越えに二日かかつた。最後の峠にきた。例によつてひろびろとしたよい峠であつた。そこからは、いまわれわれの越えてきた陰山の支脈を縦に眺めることになるので、いく重にもいく重にも見知らぬ山が重なつて見えた。まさに陰山ゆえにチャハルは山國である。峠の南側は眼に見えて雪が少なく、ゆるい下り坂がつづいて、右の方から大きな谷の出合うあたりに、島が見え、宿營地と豫定されたベレカの人家がかたまつて見えた。

蒙古人のバイシンを見てさえ、なにか人なつかしさを感じたとするれば、耕地にとりまかれ、人間のたくさんある漢人の集村へ入つたときには、もうなかば自分の土地へかえつたような氣持ちにならないだろうか。驢馬や豚をみると、そんな氣持がしなくてもなかるうが、この場合のわたくしには、また別の意味で、自分の土地へかえつてきたような氣持がしていた。それは、もうすぐ眼のまえに、昭和十四年に歩いた會遊の土地が控えてゐるからであつて、ペレカの前を流れる川は、じつはあの羊台山の裾をまわつて、チュリタイ・スームから正白旗の三支箭や十六支箭を通り、そして最後には砂丘の姿の水面にうかぶ湖に流れこんだ川の、一つの源をなしてゐたのである。馬車の都合や、物資の補給のことなどを考えると、ここからまつすぐに、正白旗の旗公署のあるハナハダ・スームへ行つたほうがよいのであるけれども、わたくしはもう一度この川について、六年前に歩いた土地を訪ねてみたくなかつた。三支箭へ行けば歸省中のブレンライ・ジャムソにだつて會えるかも知れない。わたくしはついに決心して、ハナハダ・スームへの道をすて、はるか左手に見える羊台山に向かつた。

途中の村で一軒の家に立ちよつて、調査してゐるあいだに、馬車はさきへ行つてしまつた。その家の主人に案内をたのむと、氣輕に引きうけて、驢馬にのり、畑の中をつききりながら、羊台山オ

ポの東側をからんで行く。どこかに見覚えの地形がないものかと、わたくしは緊張した。やがてノールが見えだし、そのノールのわきに——六年前の位置よりもすこし北寄りに、土の家が十數軒かたまつて建つてゐる。包は一つも見えない。羊台山は六年のあいだに、見ちがえるような立派な村になつてゐた。先發の交渉しておいた家につくと、なかから純支那風の服裝をした、十六七のきれいな娘が出てきた。これがどうして蒙古娘と見えようか。着くなり、ナスンはいるかどわたくしはたすねたが、彼はいま佐公署の書記になつてゐるので、ここにはいないという返事であつた。村の戸數は蒙古人が七軒、小作の漢人が十軒、あわせて十七軒である。どこで見つけてきたものか、バ・I君はわたくしに、この村には纏足をした蒙古人の女がある、とささやいた。

とにかくこれで、昭和十四年のコースに乗つたことがうれしくて、すこし夕べの景色でも眺めんものと、ひとりで馬を羊台山オポにすすめる。さつきもすぐその下を通つたので、わたくしはよほど案内の聲を掛けて、オポへ登つて行こう、といおうかと思つたんだが、ついに口に出さずにしまつた。オポに登つて、三角點を踏んだような氣持を味わうなんていうことが、何だかいかに子供らしくて、他の者に對してれくさい氣がするばかりでなく、一方では、そういつた全く自分一人に屬する趣味は自分一人で行爲するのだから、その純粹さが失われるように思えたからである

羊台山オボは、展望臺としてまことにすばらしいものであつた。ただし西の方は山が近すぎて東望には及ばなかつた。東の方はチュリタイ・ゴルの廣い冲積平原が擴がつてゐて、そこは雪が少ないというよりも、むしろ草がよく茂つて丈高いため、雪は草に埋れているのであろう、見たところは黄色い、雪のつもらぬ原野のようであつた。その冲積原のむかうにある低い丘陵は、陵線近い部分だけが少し黒つぽく見えるが、岩が出ていゝのでなくて、被覆している植物のちがいだらうと思つた。そして、その背後には遠く明安旗ざかいの山が、まつ白に雪をかぶつて、くつきりしたスカイラインを劃してゐる。いままで見なれてきた地平線というものは、限界のようであつて實は限界でない。しかしこれは限界のある景色である。まつ白な雪の山が限界をつくつてゐる景色である。それはちょうど春さきに、琵琶湖畔から北望した、あの比良・湖北・美濃の白い山々が限界づける近江平野の景色を思い出させる。

南の方に見えるのは陰山の主脈であらう。北の方だけはチュリタイ・ゴルの流れてゆくままに、廣い原野がのびてゐて、そのさきには山が見えなかつた。一とすぢの黒い道がその中を、チュリタイ・スームの方へ走つてゐた。あのチュリタイ・ゴルの冲積原をさまよつた日のことが、いまはか

ぎりなくなつてしまつてくる。

オボで夕日の沈むのをみて、村にかへつた。明日の調査を楽しみながら、食後の一服を吸つてゐるとき、サイン君がやつてきて、昨夜この村の東二十支里のところへ匪賊が出た、という情報をもたらした。匪賊が出没してゐるといふ噂は、漢人地帯へ入つたときからもう耳に入つてゐたのである。人数は十三人で銃四挺といふことであつた。しかしどこにゐるのかわからない匪賊を心配して前進しないわけにも行かなかつた。八號といふ村には自警團があるから、それを連れて行つてはといふ話しもあつたが、そこで聞いてみると、自警團といつてもたつた二人しかゐないのである。そこへ蒙軍の少尉が部下を四五名引きつれて現われた。學校で同期生だつたといふので、その少尉はサインとしばらく話してゐたが、やがて東の方の部落さして、馬を飛ばせて行つた。もちろん噂さの匪賊をさがしてゐるのである。彼らは強そうで張り切つてゐた。わたくしは彼らが行つてしまつたあとで、急に、われわれと一緒に來てくれるように、あの少尉を口説けばよかつたと思つた。

樺太の川でい、わなを釣つてゐるとき、ふと對岸の草むらをかきわけて、熊が現われやしないであらうか、ということが氣にかかりだすと、もう魚釣りに熱中できなくなつたことを経験したが、匪賊地帯へ入つて、匪賊に出くわすかも知れないと心配することは、相手が人間で、漢人であるといふ

だけ、熊よりも複雑な、むしろ不愉快な氣持になる。小心小心などいわれると餘計にこういつた氣持がつのるのである。先行のサインだつてももちろんこのことが氣にかかつてゐたであらう。わたくしたちが村へ着いたときも、彼はまつさきに、匪賊の情報がないと知らせた。それでわたくしもうつかり安心して、つい匪賊のことなど忘れてゐたのである。

なんでも村の者は、突然やつてきた日本人の一行が、銃を二挺はたしかに持つてゐるから、今夜賊が出たところで、彼らは何とかやつてくれるだらうというので、匪情をかくしてゐたらしい。そのうちバトウが着物をぬいで寢支度をはじめたので、もう逃げだす心配もなからうと思つてか、さきへのべたような情況だから、今夜あたりは危ないかも知れぬと語つたのだそうだ。そこでさつそく善後策の相談ということになつて、不寢番を立て、來たとわかつたら逃げようという説も出たが、ここが危険地帯であることにきまつてゐるなら、君子危きに近よらずではなくして、君子危きから遠ざかるべきである。いくら意氣地ないとか、臆病だとかいわれても、これは避けて萬全の策をとるべきでなからうか、という説が有力となつた。避け得られる危険と、避けがたい危険というのは、山登りで習つた教えであつた。かりに賊と出會つて一命をとりとめたとしても、秘密地圖や、われわれの半年の苦勞の結晶である野帳を失なうようなことがあつては、まことに面目なき次第である。

これは避け得られる危険である——そう認めた以上、わたくしは速時出發を命令した。

それから荷物をつくつたり、車に馬をつけたりして、いよいよ出發したのは二十三時だつた。十四日の月が皎々と中天に輝きわたつてゐた。出發に際して、家の主じに、せめて晩飯代なりと拂つてやろうと思つて、さがさせたが、ゐない。隣りの村へ逃げたということである。ペレカからついできた若い漢人も、一緒に逃げたものか姿を見せない。行軍序列をきめて、小銃五十米先行、それに馬車二臺がつづき、獵銃後衛ということにした。馬車も今夜はとくに三頭馬をつけて、速力をあげることにした。しかしサインは、よく走りそうな馬は村民が乗つて逃げたものか、さがしても見當らないといつてゐた。

月光のもとに肅々と前進した。こんなことがあつて、この月の月も、また一生の思い出になることを、わたくしは喜んだ。また夕方、思い切つて羊台山オボへ登つておいてよかつたと思つた。實惡調査の出來なかつたのは残念だけれど、あんなにバイシンがたち、きれいな娘さんのゐるのを見たら、あれだけでまあ羊台山を訪れた値打ちはあつたとしておこう。羊台山からすこし行つたところ、十四年になかつた村が、また一つできてゐた。もう遅かつたので、灯を消した家々はまつくらで、死んだようであつたが、村の犬はわれわれの近づくのを知つてさかんに吠えた。杖をついた

老人がひとり家から出て、われわれの通るのをじつと見送つてゐた。

十四年にはなかつた新しい道をわれわれはすんだ。やつとしてから、右手遠くにタレンオボが見えて、危険地帯を通りぬけた——もう蒙古人地帯へ入つた、ということを教えてくれた。その邊からとどころに、上都旗あたりからきているらしい、オトリの馬群が現われるようになった。チャハルの蒙古人のあいだでは、冬季だけ包を持つて、牧草のよいところに移り、そこで畜群を放牧してゐることをオトリというが、オトリを試みてゐるのは家畜の大所有者にかざられており、したがつてオトリに出てゐる人間は、こうした大所有者の家畜管理人である場合が多いから、このような牧畜法をもつて、ただちにチャハル蒙古人の定住性と結びついた、あるいは定住性からくる缺陷に對する救済策として發達した、どの家にもみられる一般現象と解するわけには行かぬかもしれない。そして、どこの馬群がどこへオトリに出るか、ということなども、だいたいままつてゐるようであつた。夏だけ歩いた調査では、この邊の關係がとかく見逃がされやすいところであらう。

月はもうだいたい西に傾いた。狼の遠吠えが聞こえてきた。氣温も相當下つてゐたらしい、途中で小便をして、煙草に火をつけるあいだ、右手の手袋をぬいでゐたら、そのあと小指がしばらく痛んだことから考へて。これで風でもあつた日には眼もあてられぬが、夜は幸いにして、風の吹くよう

なことはめつたにない。いくら行つても廣い野原はつきなかつたけれども、ついに行手に小さな廟と覺しき建物があらわれる。豫定よりも一時間餘計かかつて、午前四時だつた。そばまできてもチエリタイ・スームは小さな廟だつた。先發に迎えられて火のともつたバイシンに入ると、七人の喇嘛があつた。喇嘛たちは他に行くところがないらしく、部屋の片側に椅子をならべて、電車に乗つてゐるような格好をしてゐる。そして今夜はこうしてもう寝なくともよいという。夜中にたたき起して氣の毒ではあるが、われわれもつかれてゐたので、彼らの寝てゐたあとを占領して寝た。

朝になつて、チエリタイ・スームの周圍一帯を仔細に眺めて驚いたことには、それが十四年の印象とひどくちがつてゐることである。廟のすぐ横には蒙軍の屯所の四角い土塹だけがこつてゐる。あの門のところはたしかに歩哨が立つてゐた。チエリタイ・スームはここに相違ない。しかし昨晩も、チエリタイ・スームは山裾にあつたはずなのに、どうしてこんな野つ原のまつ中にあるのだらうと不審だつた。ここはもつと山がせまつてゐたのでなかつたか。タレンオボからチエリタイ・スームまでの間で、チエリタイ・ゴルは道の右手に峡谷をつくつて、平坦面を掘り下げてゐたのでなかつたか。そしてチエリタイ・スームまで來ると、その谷が浅くなつて、川は道のそばを流れるよ

うになる。蒙軍の前あたりでは、道から流れが見えてゐたのでなかつたか。そしてチェリタイ・ゴルの部落は、十軒ほどの家がごちやごちやと密集してゐて、そこへ入るまえに橋を渡つたのでなかつたか。

考えてみると、蒙古の川に橋がかかつてゐるなどということは、まづありうべからざることなればならぬ。それにも拘らず、わたくしの印象では、橋をわたつて部落へ入つたように、その記憶がいつしか修正されてゐるのである。この六年間のあいだに、一たいどうしてこんな修正が行われたのであろうか。いま眼のあたりに見るチェリタイ・ゴルは、やはりどこかに纏まりのない、蒙古的なぼつとしたところなのである。しかるにわたくしの印象では、その蒙古的な漠とした景色が、いつしか内地的な纏まりのある景色になつてゐるのだ。チェリタイ・スームの後に山がせまつたり、チェリタイ・ゴルに入るまえに橋を渡つたり——それは蒙古的なものの内地化に他ならぬ。

内地の自然はわたくしにとつて、いわば初恋の戀人のようなものであろう。中年になつて蒙古の自然を樂んでゐると思つてゐても、印象はいつしかその中年に得た戀人の顔を、初恋の戀人の顔に變えてしまつてゐる。それほどに内地の自然の印象は、わたくしを支配する力を持つてゐるのだ。わたくしはそういう意味では、どうしたつて内地から抜け切れない存在だ。現に半年近くも蒙古を歩

き、とにかく一應蒙古を知つたつもりでゐても、山のある風景としてのチャハルを、ほんとうに蒙古的な風景としてのシリシゴルよりも好むわたくしは、また蒙古へ來てゐても、夢にはきまつて、内地の美しい山や谷を夢みるわたくしなのである。蒙古はついにわたくしにとつては異郷であり、それを異國的風景として味わつてゐるにすぎないであらう。だからこういう點では、おなじ支那のなかでも、どこか四川か雲南あたりの、もつと内地的な日本の風景のところへ行つた場合に、そこでわたくしがどんな反應を示すだらうか、ということとは、わたくし自身がおおいに知りたく思つてゐるところなのである。

(一九四五・八・六 張家口にて)

張家口落ち

一九八

ソ聯が参戦したということを目にしたとき、わたくしは研究室にあつて原稿執筆を急いでゐた。去年の九月から今年の二月まで約半年の調査、それから歸えつてもうすぐ半年になる。

明日は城大の大陸資源研究所の人たちが、奥地にむけてトラック二台で出發するという日であつた。われわれだつて自由にトラックが使えるなら、もつとしつかりした仕事もできるのだ。それに現地の人間になつて仕事しようとしてゐるものを踏みつけておいて、他處からきた人間ばかりやほやするなんて、どう考えてみても腑に落ちぬ。こちらへきて以來たびたび味わつてきた心の憤りが、またしても頭を擡げようとするのを抑えて、いやいやわれわれはいま願みられずとも、きつとその業績がものをいうであろう。今年は調査にでられなくてもよい。毎年必らず何ヶ月か調査にでるなんていう、そんな機械的な御役所式の調査はどうだつてよい。われわれはいまのところ、取り

あえず去年やつた調査の報告書を纏めることだ。なるだけ迅速に纏めあげることだ。そう思つてわたくしは執筆を急いでゐたのである。

いつものように、机一杯にひろがった地図や覚え書や参考書を、きちんと取りかたづけてから宿舎へかえつた。その晩、ソ聯軍が二連を突破したという情報がいり、翌朝からわれわれは防衛召集に引っぱらだされた。

わたくしは第二大隊の副官をおおせつかつた。

原子爆弾の出現がなくとも、ソ聯の宣戦布告は、もはやわれわれの想像しうる最悪の場合が、到來したように感ぜられた。中南支から即時徴兵し、北支蒙疆さえ放棄しても、大陸の日本人は満洲に集結し、もつて日本の生命線たる朝鮮・満洲を死守しなければならぬ、というような主張も、いまとなつてはもうなんの役にも立たない。わたくしも、なんのゆかりあつてか三たび蒙疆を訪れ、そしていま四十四を一期として、この蒙疆の地で死なねばならなくなつたか。わたくしは死んでも、われわれの仕事だけは——未發表の原稿だけは——なんとかして生きのこさねばならぬ。

大隊に與えられた任務は、兵器廠・貨物廠・自動車廠などに兵を出して、荷役の手傳いをするこゝとであつた。あるときは朝の四時ごろ起こされて出てゆき、あるときは夜の十二時すぎまで歸えつ

てこなかつた。大隊長は特進の中尉で、二十幾年かの軍隊生活から、一年ばかり前によく足を洗つたものの、その後もひきつづき、學校の教練の先生をしてゐるといふ人であつたから、防衛召集で集まつた連中のすることなすことが、一つ一つ非軍隊的で、だらしく見えたにちがいない。しかもこの雜軍を教育して、なんとかして正規軍と同じように役立ててみたいというのが、彼の念願のようであつた。

西スイト、徳化を席捲した、ソ聯の機械化部隊は、張北にせまつた。日本軍は張北をすて、外長城線の陣地に據つた。萬一の場合を慮り、警備司令部は張家口周邊の警備を嚴重にしはじめた。

八月十五日正午、われわれは大隊の宿营地であつた北支開發の講堂に集まり、あの停戦のラジオをきいた。

日本は戦争に敗け、日本軍は敵に降伏しなければならぬ――。

それにもかかわらず、張家口の上にはソ聯機がきて爆弾を落とすし、外長城線ではなお戦闘がつづけられてゐると聞いた。一方では八路军がせまつてきたと見え、東の方の山手で、しきりに銃聲がした。われわれの防衛隊も待機のまま、一こうに解除されそうな様子がなかつた。いつたいわれわれをどうしようというのだろうか。兵隊は歸趨に迷つて動揺した。それを隊長は軍紀の弛緩と解

して、ひとりでいらいらした。しかしわたくしは、軍が半年分の米を放出し、政府が四年分の砂糖を配給した、というような噂をきくと、たとえ軍が撤退し、政府は解消してしまつても、一般居留民は居残つて、少なくとも當分のあいだは、いままでどおりの生活をつづけてよいことになるのでなからうか、と相かわらず呑気に考へて、いまに解除になつたら、もう一度研究室へもどつて、原稿のつづきを書こうという望みをすてなかつた。もつとも婦女子を北京方面へ疎開させるということは、時宜に適した處置であり、われわれが残つて仕事をつづけるということと、別に矛盾するものとは考へなかつたのである。

しかるに婦女子の疎開という程度にとどまらないで、居留民は全部引揚げるのだという噂さのたちはじめたのが、十九日ごろであつたらうか。そもそもわれわれ防衛隊というものは、居留民の生命財産をまもることが第一の任務であつて、そのためには戦闘さえあえて辭するものではないが、居留民の居らなくなつた張家口で、一たいわれわれになにをさせようというのか。それも召集された頃には、日本軍の兵力の不足ということも考へられたが、いまは必らずしもそうではない。應召者は普通の兵隊さんたちがつて、みな現に張家口に家をもち、家族をもち、財産をもつたものばかりである。すなわちみな居留民である。だから居留民を引揚げさせようというときに、これらの應

召者が居留民であることを、全く忘れてゐるかのような軍當局の態度に對して、腹が立つたのは當然である。應召者たちが動搖するのは當然である。ほつておけば脱走者がでるかも知れない。防衛隊を即刻解散して、各自の家財をまとめ、家族とともに引揚げさせるか、さもなくばこの引揚げ列車に武装したままで乗りこませて、どこまでも居留民の生命財産をまもらせるところにこそ、防衛隊の防衛隊たる面目があるのでないか。こういうことを述べて助力を乞わんがため、ほかの大隊のひとつと一緒に、わたくしが大使館へ交渉に行つてゐたあいだに、あとで問題となつた、居留民急ぎよ引揚げの命令が出たらしかつた。

表へ出ると、荷物をまとめて停車場へ急ぐ居留民が、あとからあとからと續いてゐる。徒歩のもの、洋車で行くもの、馬車で行くもの、その中には見知り越しの顔もまじつてゐる。さよならさよならといつて手を振つてゐる。とにかく日本人だけがあわてふためき、日本人だけが逃げてゆく。ついこのあひだまで指導民族をもつて任じてゐた日本人であるだけに、この態度は、いかにも見苦しいものであつた。わけわからずに傍觀してゐる現地人にだつて、この見苦しだけはわかつたであらう。

大隊の宿舎にかえると、なにか騒然としてゐる。どうやらわれわれの希望の一つがいれられて、防衛隊は引揚げ邦人の列車の警備につくこととなつたらしい。もう日は暮れてゐた。騒然としてゐるのは、第一中隊がこれからすぐ驛へ繰り出すところだつたからである。もう張家口へは歸つてこないのだぞ、と誰れかが大聲で注意を與えてゐる。するとわたくしも大隊本部と一緒に、今夜の中に汽車に乗りこむことになるかも知れない。さては見當ちがい！ わたくしは解除を考え、居残りを考えてゐたから、研究室の方も宿舎の方も、そつくりそのままにしてある。いわゆる環境の整理がまだ一つもできてゐない。

さいわい部隊は、その夜はもうそれ以上動かない様子だつたので、夜半に近かつたが、劍つき鐵砲の護衛を一人たので、大境門外の宿舎へかえつた。女連はもう引きあげてゐなかつたが、最後まで留守をまもつた梅樺のほかに、防衛隊の藤枝、幸田もまた荷物をとりに歸えつてゐた。停電してゐたので、各自ランプや蠟燭をつけて、おそくまで荷造りをした。わたくしの荷物はルックサック一箇・スツケース一箇・軍用行李一箇、それにはいり切らなかつたものは、全部ボーイにやつてしまつた。そしてその翌朝、假りの宿りとはいえ一とせあまり住みなれし、宿舎とそしてその宿舎に風情をそえてゐた門前の二本のドロの木、裏山の斜面のニレの老孤木、その斜面のつきるとところから眞つすぐにつつた大きな岩壁、さては對岸の長城をのせた山——その山の斜面に草を

喰む山羊の群れを眺めながら、わたくしは白酒バイカを嗜んだ——それから奥地旅行の忠實な従者であつたボーイの王、三匹の犬の仔、そういつた一切のものを、あとは記憶という忘却と紙一重の危なかしい世界にほおりこんで、わたくしたちはまた部隊へかえつて行つた。二十一日の正午すぎ、わたくしたちを乗せた汽車は張家口をはなれた。市街のところどころから火事の煙りがあがつてゐた。

二十三日の朝、わたくしは北京の西直門驛で召集解除をうけた。北京でおりたいといつてゐた連中も、さきに出た家族たちが天津へ行つてゐるかも知れないと思つて、いざとなつておりるといふ決心がにぶつた。わたくしにしても、いろいろな點で不愉快の多い雜軍生活ではあつたが、それも二週間を一緒にくらしただけの人たちが、ほとんどみんな、このままこの汽車で天津へ行くのに、ここで別れてしまふというのは、そして自分の世界へ一人でかえつてゆくというのは、何となしに心細さをもよおさせるものがあつた。

北京の叔父は國策會社の重役をしてゐたので、豪壯な公館にすんでゐた。さつそくわたくしのために一室をあてがってくれたが、それは洋式の明るい部屋で、窓ごしに廣い庭の植え込みを眺めることができた。隣りにつづいた廣い部屋は應接間だつた。叔父夫婦と二人の従妹は、この一棟とは

反對側にある房子にすんでゐて、この二つを結ぶ房子の中に食堂がしつらえてあつた。これらの房子に圍まれた中庭には、青々と芝生が茂り、たくさん實をつけた大きな海棠の木が二本あつた。ひさしく大境門外の蝸牛の殻のような家にすんで、向い三軒兩隣りと、しよつちゆう鼻をつきあわしながら、くらししてきたわたくしにとつて、この生活空間の廣さが快適でなくてなんであらうか。アソペラの上にな、貨車の中にうづくまつてゐてきたものが、その夜から急にベッドの上で眠ることになつた。あくる朝、わたくしの夢は鳩笛の音にさめたのである。

この恵まれた環境にあつて、わたくしは頭の混亂を整理し、仕事のつづきをしなければならぬと思つた。しかし最初にわたくしの頭を占めたのは、そんな高尚なことではなかつた。わたくしが北京で下車したのは、叔父の一家を訪ねずに、北京を素通りして天津へ行つてしまつたのでは、どうしても氣の濟まないところがあつたからである。だからせいぜい二三日の後には、わたくしもみんなのあとを追つて、天津へ行くつもりであつた。そのつもりだつたから、一旦ブラットホームにおろした荷物の中から、持ち運びにくい軍用行李だけは、さきに天津まで運んで貰うことにして、わざわざこれをも一度汽車に積みこんだのである。しかるに北京に腰を落ちつけてみると、この軍用行李の行方がしきりと氣になりだした。なぜあのとき一緒に持つてこなかつたであらうか。

もともとの軍用行李というのは、張家口出發の際に、チツキにするつもりで持ちだしたものだから、あるとき張家口驛のプラットホームに、置いてきぼりを食つたところで、文句のいえないものであつた。いまさらわづかの私財に戀々たるのは、自分としてもいさかはずかしい氣がした。それですこし落着いてから、一緒に運んできたルックサックとスーツケースの内容を調べてみるに及んで、この行李に對する執着は、自然とうすらぐようになつた。というのは、あのくらいランプの灯影で、匆卒のあいだにこしらえた荷造りではあつたけれども、ルックサックやスーツケースと、チツキに出すつもり軍用行李とで、意識的にその自身の仕分けをしてゐたことがわかつたからである。肌着類やワイシャツ・春廣などは、一と通り冬物までがスーツケースから出てきた。家内の手紙はルックサックの中から、新しいノートと一緒にでてきた。それは去年京都から持つてきたものであつたが、重要な書物をすててこんなノートを入れてゐるといふのは、長男からノートがあつたら送つてほしいといつてきていたことを、忘れずにゐたからであらう。張家口を引きあげるといふことは、わたくしにとつては、京都の家へ歸えるということと同義であつたにちがいない。それゆゑ北京で下車することをためらつた氣持ちの中には、集結地が天津であるといふのは、すぐにも塘沽から歸國の船が出るのでないかしら、といふ、懸念がふくまれてゐなかつたとはいえないであらう。

あろう。

しかし、天津に集結した連中も、いつになつたら歸國できるかわからない、といふ事情が、次第にはつきりしてきた。それと同時に、こんどは別のことがわたくしの心を苦しめはじめた。あんな見苦しい態度をして、われわれまでが、はなして引きあげるべきであつたらうか。いまこそ純粹な文化人として、當然引きあげるべき軍にかわつて、われわれが第一線をお引きすべきではなかつたらうか。第一線である以上、ソ聯がきても八路がきてもやむを得ないが、われわれにはわれわれの立場から、かれらと應待する途が残されてゐなかつたらうか。そして、われわれ文化人の世界の中には、國家や民族に解消しきれないものがあるといふことを、すすんで示すべきではなかつたらうか。あるとき宿舎には、相當な食糧（米四俵・砂糖二袋・白麵六袋・罐詰二箱など）がのこつてゐたから、あれを荷物と一緒に研究所の方へはこんで、あの大家をとざしあの中で起居することにしたら、それこそあの日からでも仕事にかえれ、仕事をつづけることができただであらうに。日蒙一如などといつてもいつてゐたくせ、いざとなつたら、軍はもとより、大使館も政府も現地民をおきざりにして、さつさと逃げてしまふ。キリスト教の宣教師だつたら、おそらく逃げだすようなことはすまぬ。

もつとも逃げるならあの汽車よりなかつた。翌日にはもう八路軍が市街へ入りこみ、つづいてソ聯軍もはいつたというから、その後の張家口については、いろいろな噂さがたつた。日本人が惨殺されて、その死体が道路上に積み重ねてあつたなどという噂さをきくと、やつぱり逃げるより他なかつたのではないかと思う。反對に、日本人はなんらの危害も加えられてゐない、どうしてあんなにあわてて逃げ出したものだろう、などという話になると、研究室に残してきたものの惜しさも手傳つて、群集に投じて引き上げてきた自分の不甲斐なさといつたものが、無性に悔やしくなる。もちろんあのとき防衛召集にかかつてゐなかつたら、もう少し冷靜な處置がとれたにちがいない。召集部隊が引上げるというので、否應なしに引きずられて行つたというところもある。しかし、かりにあの場合正當な手続きによつて、解除になるみちがあつたにしても、自分ひとりでもよいから残るといふだけの勇氣を、わたくしはたしかに持ち合わせてゐなかつた。

けつきよく敗走である。敗走でしかない。この數年來日本人は何萬と進出してきたが、軍はもとより、一般居留民も、日本人は日本人だけの社會をつくろうとした。その社會と現地民の社會とは遊離してゐた。日本人は安くて配給物をうけとり、日本人はいわゆる治外法權の特權階級として、

現地民の社會にまで根をおろす必要を、ほとんど感じないで暮らしてゐた。この日本人の社會が風に吹かれて動揺するとき、これをとどめる力は、現地民の社會からでてこなければならぬということ忘れてゐた。日本人は、自分らの生命財産の保護のためには防衛召集をやつても、現地民の生命財産のことは考えてゐなかつたのだから、現地民だつて日本人の生命財産を保護しなければならぬといわれはなからう。けれども現地民に長年くらして、現地民のあいだにとけこんで生活してゐたものなら、個人的にその生命財産を保護してくれる現地民の友だちだつて、すこしはあつてもよかりそんなものではないか。そうした友だちがあつたならば、われわれはたとえ逃げださなければならなかつたにしても、後の處置は心配せずにすんだのではなからうか。敗走はけつきよく日本人のつくつた、浮き草のような日本人社會そのものの敗走である。

奥地からかえつて以來、この敗走の豫感が、われわれのあいだにうすうすながら感ぜられたのであろう。現地民のあいだに、なんとかしていまのうちに根をおろさねばいけない——そう考えれば考えるほど、いよいよもつてわれわれの生活と現地民の生活とのへだたりを、強く感ずるばかりであつた。だが誰れにもよい考えは浮かばなかつた。根をおろす手がかりさえないのである。もちろんわたくしの支那語などでは、ものの用をなさない。

日本側で經營してゐるある女學校の卒業生に、一人色白のきれいな娘がゐた。日本語が巧みで、どこかの日語の先生をしてゐるといふ。日本語をつかつて現地民のあいだにはいつてゆけるなら、わたくしとしてこれほど有難いことはない。彼女が回民の娘であるといふことは、わたくしにとつてはなにも問題でなかつた。民族學はわたくしの専門でなかつたが、専門の連中が回民の研究に、多少行き詰つてゐたときだから、わたくしはむしろ彼女を通して、回民の生活に關するドキュメントを作らうかと考えた。わたくしはさらに許されるならば、彼女と一緒に生活してみたいとも考えた。混血を、わたくしは欲してゐたのである。血の交流をもつと頻繁に行なうことによつて、世界の民族は一つにならなければならないというのが、わたくしの平素からの主張であつたから、わたくしにすれば、適當な相手さえ見つければ、この主張の實踐に忠實でありたいと願うのは自然である。わたくしは彼女を適當な相手と考えたかつたのである。

しかしこれは、わたくしが現地に根をおろそうとしてあせつてゐるとき、でつちあげた、一つつたない論理にすぎなかつたのであるまいか。敗走の日わたくしは、ついに張家口をへい履のごとくすててしまつた。そこにはわたくしの心をつなぎとどめる、一人の現地人もなかつた。平素の主張を實踐にうつさずして立ち去つたといふことも、研究室にのこしてきたカードや書類ほかに、

敗走の悔恨を深めはしなかつた。

もう忘れたはずだつたのに、あの回民の娘のことが、いまごろになつて思い出された。色白なところもすうりとした体つきも、なるほど彼女だ。しかるにいま、わたくしの記憶に蘇つてきた彼女の顔は、なんと、三十年も忘れてゐた、小學生時代の一女生徒の顔ではないか。わたくしはあの娘の顔を、もう一度はつきり思い出そうとして努力するのだが、どうしても思い出せない。その女生徒の顔が邪魔をして、あの娘の純粹な顔は、もうどうしても思い出せない。

フロイド流に解釋すれば、小學生時代に印象をうけた異性のことが、三十年來潜在意識となつて、意識下で生活をつづけてゐた。たまたま張家口のあの娘に、この異性とどこかよく似たところがあつたため、潜在意識がわたくしを操つて、その心をあの娘の方へ向けさせてゐた。しかし、わたくしが張家口をはなれ、もはやあの娘とはふたたび會うことも難しかろうといふことがわかつたとき、いままで蔭にかくれてわたくしを操つてゐたものが、ようやくその正体を曝露した。それは潜在意識となつたその日本女性への思慕である。フロイド流の精神分析なら、きつとそのように解釋するにちがいない。

はたしてそんなものだろうか。どうもわたくしには、合點のゆかないところがある。だいいち小學生時代に印象をうけたといつたところで、大したことはないではないか。そのうえ内氣なわたくしは、その異性と話しをかわしたとさえ、ついぞなかつたのである。またその頃のことを思い出せば、小學生のわたくしに印象をとどめた異性は——あえてわたくしが多情多恨ならずとも——けつして、このひと一人ではあるまい。そうなるとこの暗合の必然性がだいぶ怪しくなってくる。身体も心も、つかれみだれたようなときには、これぐらいのとんちんかんは起こるものとみてよいであらうか。

そこで、わたくし流の解釋をくだしてみることにしよう。三十年前にわかれた女生徒の記憶が、どこかに残つてゐたということは否定しがたい事實だ。しかし、わたくしの眼前に蘇つてきたその映像が、寫眞にでもとつたように、正確に三十年前の印象を再現してゐたであらうか。その映像はたしかに十二三の少女であつたらうか。そうではない、年ごろからいへば張家口の娘を思い出してゐたことになる。しかるに、そのときの顔がその女生徒の顔とあまりよく似てゐたものだから、突然その女生徒の名前を思い出したというだけで、あれがやはり、わたくしの記憶にのこつた張家口の娘の顔なのだ。それならどうしていままであの娘の顔が、その女生徒の顔に似てゐることを氣づ

かなかつたのであるか。じつさいは、あまり似てゐなかつたのかも知れないと思う。それを似させたのは、いわば記憶のトリックである。映像の記憶は頭のなかでつねに整理されてゐる。ちがつたものがつねに綜合されてゐる。それは記憶の經濟とも考えられるし、また記憶による創造とも考えられる。われわれはこうしてつねにつくり變えられてゆく映像の記憶を、いつまでたつても變わらぬ名前と結びつけ、名前によつてとらえようとするから、間ちがいが起こるのであつて、わたくしを苦しめた問題の映像のごときも、それはすでに張家口の娘の生きうつしでもなければ、まして三十年もまえにわかれた女生徒の生きうつしであらうはずもないのである(註)。ただこの場合に、記憶の整理とか綜合とかいつても、すべての異性の映像が、一つに整理されたり綜合されたりするのでは、もちろんない。おそらくわれわれの頭のなかには、いくつかの——數はわからぬが——好ましい異性の類型というものが、すでにストックとしてできあがつてゐるのであらう。たまたま張家口の娘は、整理にあつて、その女生徒がはいつてゐるのと同じ類型に入れられたのである。その類型のなかに綜合され、同化されたのである。

機能的にみたならば、これははじめから、綜合されやすい、同化されやすいものを求めてゐた、ということになるかも知れない。それは記憶の經濟が、あるいは精神の經濟が要求するところであ

るだろう。するとフロイドほどの決定論ではないけれども、やはりわれわれの精神生活における一種の偏好、もつと一般的な言葉をつかうならば、傾向を認めたことになる。ここに至つてわたくしは、この結論が、さきあげた「チャハル印象記」の結論と、一脈相通するもののあることを知るのである。大草原にいかにも魅力があつても、そこでわたくしの心は安住できない——この景色という限定はないにしても、わたくしはけつきよく山があり、川があり、また森のある景色でなかつたならば愛しきれない。それと同じように、わたくしはけつきよくある型の異性でなければ愛しきれない。わたくしの精神の構造が、もはやそのようにでき上つてしまつてゐるのでないだろうか。異國へきて、そこにいままで経験しなかつたような自然美を見出すとともに、またその女性美を見出したという気持ちは、多かれ少なかれ、誰れしもが持つてゐるところであろう。だがわたくしは張家口の娘になんを見出してゐたか。ひとは回民の娘に振り袖の着物をきせて、踊りを踊らせたりすることに、なんの意義があるかといつて、よくかげ口をきくのであつたが、こうした教育をうけたこの學校の卒業生には、その物腰し態度に、どこか普通の中國娘とはちがつた、優しさ柔かさがあつた。そしてあの娘にしても、そこがまづわたくしの心をとらえたのでないと、はつきりいゝきれぬであらうか。

こんなことをいつたのでは、はじめから日本人の蒙妻をもち、疊・味噌汁・和服という日本的生
活から脱けきれないでゐた連中に、物笑いの種を與えたことにならぬともかぎらない。しかしこの
一般的傾向に抗して立つべかりしわたくしもまた、悲しいかな、すでにかたくな四十男の一人と
して、現地に根をおろすどころか、いかに敗走以外に途のないものであつたかということに對する
これが最後の辯明である。もう軽々しく、世界の民族は一つになるべきであるなどと、いわぬつも
りだ。

(一九四五・一〇・六 北京にて)

註 寺田寅彦が「われわれの頭の中にある他人の顔は自分と一處に、しかもちやんときまつた年齢の間隔を保
存しつつ段々年をとるのではあるまいか」といつてゐることを知つた(冬彦集、初版六六頁参照)。

動物記

犬

張家口の宿舎におちついてから間もなく、わたくしはボーイに、どこかで犬の仔をさがしてこいといつた。一匹の犬の仔が貰われてきた。レスと名づけた。わたくしは考えて、もう一匹もらつてこないかといつた。いつそう小さな、白い犬の仔が貰われてきた。これはチビと名づけた。ボーイも犬が好きとみえて、よく世話をした。おりをみて、わたくしはボーイに、^{ニダ}爾的と貰つてきた二匹の犬の仔を、蒙古旅行に連れてゆくつもりだということを、打ちあけた。彼は承知した。いくら料理に興味をもつてゐるのを見て、わたくしは彼を、エキスペディションのコックに使おうと考えた。犬をつれて歩こうという考えを、わたくしは車中のつれづれに讀んだ、ヘディンの本から得たのである。長期にわたる、單調なステツペの旅行に、犬がよい伴侶であるというばかりでなく、いままで一緒に行動したことの無い隊員が加わつてゐても、それはいつでも、全隊員に共通な話題を提

供する、いと口となつてくれるであろう。また、われわれの中であた一人の漢人である、ボーイ兼
 コックの王を、蒙古人地帯においてさびしがらせずにすむであろう。犬もつれてゆく以上は、二匹
 にしておいた方が、仲間があつてよろこぶであろう。ただ、張家口生まれの犬に、蒙古高原の冬の
 きびしさ、耐えられるかどうかは疑問であつた。

犬の品種のごとなどわたくしにはよくわからないが、蒙古へ行くと蒙古犬といつて、毛の深くて
 黒い、尻尾の大きな犬が、どこの蒙古人の家にも飼われてゐる。そして、その相当獠猛な性質も一
 般に知られてゐた。そのなかへ種類のちがつた犬が飛びこんでいつた場合に、彼らはいつたいどん
 な態度をとるであろうか。鬭争の危険は、こちらがまだいづれも仔犬であるということによつて、
 當分はいくらか緩和されるであろう。しかし、大きくなつてからのことを考えると、雄犬よりも雌
 犬の方が無難なものでなからうか。二匹の仔犬はいづれも雌であつたから、わたくしはこの點をそう
 心配してゐなかつた。

しかるに、これは大きな誤謬であつた。蒙古人地帯へはいつての、最初の足だまりにえらんだ肅
 親王牧場には、じつにたくさんの犬があつた。からは大きかつたけれども、その大部分は春に生まれ
 た、まだ一人前になつてゐない連中だつた。そして、うちの犬ともすぐ仲好しになつたので、われ

われは安心してゐたところ、ある日ここから數町はなれたバター工場の犬に、レスが見つかつて、
 包圍攻撃をうけ、とうとう咽喉ぶえを噛みきられて、無慘な往生を遂げてしまつた。王は悲んで、
 死んだ犬の墓をつくつてやつた。レスが一匹でふらふら歩いてゐたのがいけなかつたのであろうか。
 攻撃者の方に群集心理がはたらいたのであろうか。それがレスでなくて、チビであつても、やはり
 噛み殺されたであらうか。

われわれが牧場を出て、廂白旗の旗公署へむかうとき、一匹の犬がついてきたことを、わたくし
 は知つてゐたが、それは案内についてきたものとのみ思つてゐた。ところでこの犬は、あくる日に
 なつて、案内が馬をひいて歸えるときがきて、いつころについて行こうとはしないのである。そ
 のうへ、いつもわれわれに與えられた部屋のまえにがんばつてゐて、われわれには頭をなでさせる
 が、見知らぬ蒙古人がその部屋をうかがいに來たりすると、いまにも噛みつきかねない様子を示す
 のである。雄犬で、体格は堂々たるものであつたが、性質のどこかに間の抜けたところがあつて、
 大きさからいえば三分の一にも足りない、小さなチビにふざけられ、鼻の頭を噛まれると、抵抗も
 せずにひいひい悲鳴をあげてゐた。ちようどレスを失なつたあとだつたので、かわりにこの雌犬を
 つれてゆくことにして、トクという名を與えた。

それにしてもトクは、なにを好んでわれわれについてきたのか。また、ついてゆくうとしてゐるのか。植物や下等動物のように、このトクの行動を物理化學的に説明するわけにはゆかぬであらう。牧場では毎日犬に充分な餌を與えてゐたから、われわれについていた方が給養がよい、というような誘引があつたとも考えられない。それならほかに、われわれについてくる犬が、何匹があつてよかりそうなものだ。また、仔犬のチビに心ひかれてついてきたものとも、解するわけにゆかなかつた。たくさんの犬のなかには、こんな氣まぐれ者もあるのだ、ということにしておけば、それは犬のあいだに個性の差を認めたことになる。と、犬の行動のうちには、盲目的な本能だけでは説明のできぬ、もつと選擇的な、精神的な要素を認めざるをえないのである。おそらく、牧場にゐたたくさんの犬のなかでも、とくにトクとわれわれ——あるいはわれわれのうちの誰れか——とのあいだに、なにか意氣投合するようなものがあつたのに相違ない。

もすこしせんざくするならば、犬の個性に、野性的な傾向の強いものと、非野性的な傾向の強いものがあつて、後者の強いものほど、人間に馴れやすく、また人間との共同生活をより必要としてゐる、のではないかと思う。そして、牧場の犬のように、十何匹も一緒に飼われてゐる場合には、たとえ日日の食事が缺かさず支給されてゐたところで、その一匹一匹の犬にとつては、それが一匹

づつ飼われた場合ほどに、人間との共同生活を緊密に味わつてはゐないであらう。それだけにまたその犬たちのあいだでは、より野性的な空氣のかもしれない可能性がある——レスを殺したバタ——工場の犬たちのあいだに、そのような空氣がなかつたであらうか——。けれどもそういう空氣の中にゐては、非野性的な個性の強い犬なら満足できない。彼は適當な機會に、仲間の犬をすてて人間に走り、より飼い犬らしい地位を求めるようになる。

このように、トクの場合は、人間と犬とのあいだの意氣投合と、みたいのであるが、われわれはまた、犬と犬との意氣投合を介して、野性的な個性の強い犬が、次第に飼い犬になつてゆくプロセスをも見ることができた。それはトクの友だちになつた、カクの場合である。

カクは砂丘地帯へはいつてから、われわれの知らぬ間に、キャラバンについてくるようになったので、その素性はよくわからない。トクよりもやや小さく、毛も短かつたけれども、やはり蒙古犬で、當歳の若犬である點はトクとかわりなかつたが、ただセツクスはチビとおなじ雌犬であつた。はじめのうち、なかなかわれわれに馴れようとしなかつたし、またその眼つきのどこかに險があつたところなどから考えると、浮浪生活をしてゐたのであらう。飼いならしてゆくうちに、カクの眼の險がとれるであらうか、ということが、われわれのあいだの話題になつたりした。

すつかりなつくようになつてからのちも、トクとカクとは、かなりはつきりした個性のちがいを現わした。それはセックスのちがいからきたものではない。トクはよく蒙古人に噛みついたので、廟に泊まつたりするときには、しばつておく必要があつた。しかしカクは、人に吠えつくようなこととは決してしなかつた。チビは毛が短かつたから、寒かろうというので、天幕や包の中で寝さすことにしてゐたから、蒙古人はチビを彼らのハボ(狎)と同じものと思つてゐたであらう。トクとカクとは蒙古流に、夜も戸外で寝さした。夜中に狼の鳴き聲を聞くと、人には吠えないカクも、トクと聲を合わせて、さかんに吠えた。そして、どんな寒い晩でも、カクはけつして天幕の中にはいるうとしなかつたが、トクの方はのつそりとはいつてきて、許されるならばわれわれの傍らで、寝たい様子であつた。

晝間は、われわれと犬たちとは、かならずしも一致した行動をとらなかつた。キャラバンは馬に乗つたわれわれと、荷物をはこぶ牛車隊との二群におのづからわかれ、犬たちは元來そのどちらにも屬さぬフリーランサーであつたから、われわれについて走るようなこともあつたが、前進してもときどき思ひだしたように、あとがえりをはじめ、そして、牛車隊に出合ふところまで戻つて、そのまた最後尾の車を見とどけたのちに、ふたたび前進をはじめた。この行動を一日のうちに何回も

くりかえした。これからみると、彼らは自分では、フリーランサーでなくて、牛車隊の方に屬してゐる、と思つてゐたのかも知れない。最後尾の車にはいつも王が乗つてゐたから、行進中はこの王の位置が、なにか彼らの行動空間を規定するに必要な、行動中心あるいは據點——實際にはそれもたえず移動してゐたのであるけれども——の役目を、果たしてゐたように考えられる。

犬たちはこうして前へ進んだり、後へもどつたりするほか、兎や狐をみつけると、これを追つかけるのに夢中になつた。すい分速くにあるものでもよく見つけだすのは感心だが、忍び足でそつと近よるといふような藝當は、彼らにはできないらしい。はじめからまつしぐらに驅けてゆくのである。だからむこうでもすぐにそれと氣がついて、逃げだすのは必定である。それをまた、どこまでもどこまでも追つかけてゆく。追つかけること自身が、彼らのスポーツであるかのように。そのうちには、ぼんやりした兎か、びつこの狐にでも出くわして、獲物をさげてかえつてくることもあるだろうと期待してゐたが、ついにとらえたためしがなかつた。そして、こういうスポーツでは、たいていカクの方がさきに見つけて、さきに走り、トクはカクについて走つてゐる場合の方が多かつた。

ステツベに雪がつもりだして、われわれが馬と牛車のキャラバンを、駱駝のキャラバンに編成がえするころには、トクもカクも、大きな一人前の蒙古犬になつた。ことにトクは、つれて歩いてゐても、もうこれより大きい犬に出あうようなことはめつたにないほど、大きくなつた。しかし、チビだけはいつこゝろ大きくならないで、いつまでも甘つたれであつた。

やがてカクにさかりがつきだした。どこからか知らぬが、雄犬がよつてきたのである。タムチン・タラを越えるときには、もう何匹か集まつてゐた。彼らは、駱駝におくれまいと走つてゐるカクのあとをつけて、機會あらばその脊に乗りかかろうとするのであるが、なにしろ嫁一人に聳たくさんである。いきおい競争がおこり、それが闘争にまで展開する。組打ちがはじまり、牙と牙とで應酬するこの闘争は、なかなか物凄く、ほんとうに血みどろになるところまでゆくこともあつた。傷つき敗れた犬は、もうかえればよかりそうなものを、なおも斷念しきれずに、後尾の方からついてきた。

強い犬同志が、必死の闘争をやつてゐるあいだに、漁夫の利を占めたやつもあつた。そうしたいきさつを、駱駝のうえから眺めてゐるのは、よい退屈しのぎだつた。では、うちのトクはこの場合どうしてゐたかというに、最初のうちはまだ、事情がのみこめなかつたらしい。しかし、二三日た

つうちに、本能が眼覺めてきて、彼も仲間入りするようになり、どうやら優位な地位を保つてゐるようであつたが、トクだつてカクを獨占するというわけにはゆかなかつたであらう。彼も闘争して眼から血をだし、それが一生きずになつてのこつた。

熱中してゐるのは雌だけで、雌の方は全然ラヴァフェヤーに興味がないのか、こんなときでも兎が見つかると、カクはすぐさまそれを追つた。すると、ついてゐるだけの雄犬が、みなそろつてカクのあとを追つて走る。交尾のための集團が、そのまましばらくのあいだは、狩獵のための集團に切りかえられるのだ。もうあとをつけだしてから十日以上にもなるのがゐるが、そのあいだはろくろく食もとつてゐないにちがいないから、腹だつてへつてゐることだろう、よくへばらぬものだ。それにわれわれは毎日移動してゆく。よい加減にかえらぬと、あまり遠くまでついてきては、かえれぬようになりはしないか、といらぬ心配までしみたが、彼らは熱中してゐても、やはり一定範圍の行動圏を自覺してゐて、その限界を越えるようなことはないとみえる。ついてくる雄犬の顔ぶれは、いつの間にか變つていつた。

駱駝隊になつてから、犬どもにとつては、それ以前のような行動中心がなくなつたせいか、二二三度迷子になつたことがあつた。そんな場合は、どうやら例のあとがえりをして、前夜の宿泊地ま

で行つてしまふ。

そしてそこにわれわれのゐないことがわかると、こんどはもう一度引きかえして、われわれのあとを追つかけるようだ。夜になつてやつと追いついてきたこともあつたし、その夜は姿を見せず、翌日の午後になつてようやく追いついてきたということもある。そして、そんなときには、われわれを見出してじつにうれしい、といった表情をした。それはトクとカクとの話して、チビは足が弱いから、迷ひ子になるほど遠くまで、道草を喰ひにゆくこともなかつたし、道のりの遠い日は、牛車や駱駝にのせてもらつてゐた。

そのチビまでが、トクやカクと一緒に、迷ひ子になつて、歸つてこない晩があつた。そのときは、犬どもがさきへ行きすぎたのであつて、行きすぎて、ある廟まで行つたところ、そこでカクが二三十頭の雄犬につけられたため、とうとうみんな歸えれぬような破目になつたらしい。どこでどんなにして夜を明かしたのか知らぬが、翌朝われわれはその廟で彼らを收容した。その日はたいし氣にかかり、王の駱駝にのせてやるようにいつけようと思いつつ、ついそのままになつてゐた。そしてとにかく目的地につくまで、チビはおくれずについてきてゐたのに、しばらくして氣がついたときには、もうチビの姿はどこにも見あたらなかつた。そして、ふたたびその姿を現わさなかつた。

た。

張家口からつれてきた犬は、二匹ともおらなくなつた。われわれは蒙古犬であるトクとカクの二匹をつれて、旅をつづけた。もう交尾期もおわつたとみえ、カクについてくる雄犬もなかつた。チヤハル盟を、上都・崩黃・正白と横断して、明日のうちには崩白旗にはいるという、正白旗の旗公署に泊まつてゐた。出發の朝、カクの姿が見えなかつた。カクのことだから、すぐ追いついてくるだろうといつて出かけたが、カクはどうとう追つかけてこなかつた。王はこのあいだから、カクは食物をとらない、つわりだという。犬につわりがあるかどうか知らないが、カクは妊娠したことが原因となつて、われわれと一緒に行動することを回避したのだ。おそらくかれに生まれついた野性的な個性が、もう一度蘇つてきたのであろう。カクは野犬の子供だつたのかもしれない。

かくして半年に近い、長い蒙古の旅をおえて、そこで支那のお正月を迎えるべく、われわれがもう一度肅親王牧場へかえつてきたとき、つれてゐた犬は、この牧場で生まれ、ここからわれわれについてきたトク一匹だつた。だがトクは、生まれ故郷にかえり、無事に兄弟のなかへかえつてきたことを喜んであろうか。それともどこまでも、われわれについて行くことを望んだであらうか。わたくしはもちろん、ここで正式にトクを貰ひうけて、張家口の宿舎へつれてかえるつもりだつた。

が、右翼旗からの乗り物のことを考えると——われわれは旗公署のトラックに便乗することになつてゐたので——こんな大きな犬まで連れこむのは、どうやら遠慮すべきであつた。それでこんど訪ねるときまで預かつてもらう約束をして、われわれは張家口へかへつた。しかし、七月に、わたくしがトクをつれに、もう一度牧場を訪れたときは、トクが流行病にかかつて死んだ後だつた。

(一九四六・一一・六)

狼

わたくしの子供のころには、狼のはなしをしてくれるひとは、まだたくさんゐた。狼が墓場から屍体を掘りだして喰うというはなしや、丹波から夜道を山越えでくるひとは、送り狼の害をふせぐために、類に短刀をつけて歩くといううなはなしは、子供にとつては氣味の悪いはなしであつた。小學校へはいつて聞かないころ、ある朝、近所の大人たちが表にあつまつて、明け方たしかに狼の鳴くのを聞いたと、緊張した顔つきで語り合つてゐたのも忘れられない。この鳴き聲の正体は近く、工場ではじめてつかつたサイレン——あの空襲警報でおなじみのサイレン——であつたことが、ほどなくわかつたけれども、當時の人たちの頭には、まだそれほどに狼というものが、ほんとうにその姿を見たりその聲を聞いたりしたことの無いものにまで、深く刻みつけられてゐたのである。

はじめて山に登りだしたころのわたくしは、日本アルプスのような高山はしばらくおき、吉野の奥山のようないわゆる深山には、狼がまだ棲んであるものとはかり思つてゐた。それが、だんだん動物學の知識を吸収してゐるうちに、いつの間にか日本の狼——*Canis lupus hodophylax*——は一九〇四年に大和の鷲家口で買われて、大英博物館の標本となつたものが、學界で認められてゐる最後の狼であり、その後狼の出現に關する正確な報告がないところをみると、もはや絶滅してしまつたものと考えてもよい、という見解に従うようになった。するとこんどは、どういふわけで日本の狼は、絶滅しなければならなかつたか、という疑問がおこつてきた。それは生態學の問題である。

大學を出て間なしは、だれでも氣の多いときであるが、そのころわたくしは、いままでのようにただスポーツとして山へ登るばかりでなく、山へ行つたらもつといろいろなことを見たり聞きだしたりして來ようと、考へてゐた。狼は絶滅したというが、そんなら絶滅に關する資料も、山村で集めてみよう。そして、それには漫然と集めるよりも、どこか一地方を選定して、そこで得られた資料から、絶滅に關する概念をまずつかんだ方がよいであろう。絶滅したことは間ちがないにしても、もしかすると一九〇四年という記録を破つて、最後の狼の出現期をもつと近いところに持つてこれやしないか、というはかない望みも、こうした調査に興味をつながせるものとして、はたら

いてゐたであろう。とりあえずわたくしは、滋賀縣と三重縣とのさかいをなす鈴鹿山脈をえらんで、自分でも出かけ、また印刷物をつくつて、ふもとの村役場や小學校にくばつてその回答を求めた。

しかし回答は、わたくしの豫期したほど多くは得られなかつた。また回答をえても、そこにでてる狼というのが、はたしてほんとうの狼なのか、それともただの野犬なのか、はつきりしない場合があつた。狼にであつたという人の話しを聞いてゐるうちに、その狼が、ぶちの狼であつたりするとから、次第に疑いぶかくなつたのである。それでもこうして集めた資料を綜合すると、明治のはじめにはなお盛んに出没してゐた狼が、一八八〇年代の終りから一九〇〇年代のはじめにかけて、その最後の姿を見せたきりで、その後はもうふたたび現われてゐない、というところに落着くのであつて、これはほかの地方から得た資料ともほぼ一致するのである。

回答のなかには、例外的に、いまでも出てゐる。目撃したものもあるし、鳴き聲を聞いたものもある、というようなものもあつたか、わたくしはなにかの間ちがいだらうと思つて、取りあげなかつた。しかるに意外にも、昭和九年に出た大浦豊氏の「日本犬の研究」という本のなかに、同年三月新潟縣で一頭の狼が射殺された。そしてこの狼は、それを聞いてただちに現地へ驅けつけた同氏の所有に歸するところとなつたといつて、そこにはくわしい記載や測定値があげられてゐるのである

(同書、六八―八五頁)。わたくしはこの記載が、その後學界において認められるところとなつたかどうかをよく知らないが、これを疑わない以上、狼はすくなくとも一九三四年までは、日本のなかに生きてゐた。もとのように数は多くないから、人眼につくこともめつたになかつたらうが、それでもどこかにひそんで、細々ながらよくもまあ生きながらえてゐたものだ、ということになる。

そんな生き方でも生きてゆけるということになると、話しがすこしちがつてくる。鈴鹿にだつて、ある場所にかざつてすこしはゐるのかも知れない。昭和のはじめごろ、雪の伊吹で道にまよつて、夜になつても里に出られなかつたとき、狼につかれたという話しを本氣にしないで聞いてゐたが、それもあるいは幻覺である、といきれないものであつたかも知れぬ。大台ヶ原や四國の脊稜山脈には、冬になると雪の上に、犬よりも大きな足あとをのこしておくものがある、という程度の話ならこのごろでもまだ聞くことができるのでなからうか。わたくしは獣殺した資料の出所を、もうすこし丹念にしらべなおしてみる必要があると思つた。しかし狼のことはそのころから次第に後廻しになつて、わたくしは國のためにもつと役立つと思われた仕事に、精力を集中していつた。

戦争が不首尾におつたので、わたくしはこれからはまたもとどおり山へでも登らうと思ひ、そうならば中途半端でうつちやつておいた狼の調査をつづけるのも、わるくなからうと、かつての調査

資料を引きだしてきた。そして變うつな氣持ちになつてしまつた。みじかいように思つてゐたのにあの頃からも十數年もたつてゐる。狼はそのあいだもどこかの山にかくれて、生きながらえてきたかも知れない。そうであればそれは日本から絶滅したということにはならないであらうが、じつさいに姿を現わさないかぎり、個々の村についてはやはり何年以來あなくなつたという記録を變える必要はないわけである。そしてそれがわたくしの求める、狼の絶滅に關する記録であつたはずだ。わたくしが發送した調査表には、わざわざつぎのような文句が印刷してあつた。

——この問題は村の古老が生きてゐられる間に聞き糺しておかないと、折角の貴い材料が、永久に消滅してしまつて、一片の傳説という以上には價値のないものになつてしまふ懼れがあります——
回答に徴してみても、最後の狼の目撃者というのは、その頃にもう六十以上の年寄りか壓倒的に多かつた。いま十數年をへだててもう一度狼の調査をはじめようというとき、わたくしの氣持ちはくらくさせるのは、わたくしがもはや調査のチャンス逃がしてはゐなからうかということである。願わくば村の年寄りたちよ、いまもなお達者であれかし。

日本の狼が、かりにいまなおどこかの山にかくれてゐるとしても、その数はまことに寥々たるも

のに相違ない。したかつてそれは日本全體としてなお絶滅するに至つてゐないというだけで、絶滅に瀕し、絶滅への道を進んでゐるといふことにおいては、明治の中葉以來すこしも變わらぬ傾向を示してゐるものといえるであらう。ではなにゆゑ日本の狼は、絶滅の道を進んでゆかねばならなかつたのか。

この問題に對し、日本の生物學者は沈黙をまもつていままで誰れも解答を與えてゐない。もしいままでこの問題に對する解答を呈出したひとがあつたとすれば、それはむしろ民俗學者であり、また民族學者のなかでも日本民俗學の泰斗柳田國男氏を以てほかにはないであらう。そこで一應「孤猿隨筆」(昭和十四年)中に収録された、日本の狼の絶滅に關する同氏の所説を紹介することにした(同書、二一七―二八三頁)。

同氏はまづ、狼というものが、本来ならば群れをつくつて生活するもののように考へておられる。換言すれば、狼の生活様式として、群れをなすのが常態であつて、單獨であるのは、なにかこの常態の維持を許さぬような環境の變化に、反應したかたちであるといふのが、同氏の假説の中核をなしてゐるのである。すなわち一方で、「日本の狼には秦大津文の物語の如く、單獨行動に出でた例が古くから見えてゐるが、それらは多くこの獸の靈異を説く場合に限られ、實際の遭遇談にはやはり

群れをなしてゐたというものが多し。その群れ生活が近代に入つて崩壞したらしいのである」(同書、二六七頁)といひ、他方では、「最近の百年間に各地であつた出來事として、比較的精密な記録の存するものは、例外も無くすべて孤狼の害であつた」(同書、二三〇頁)といつて、狼が直接人間を害するようになつたことと、この群れ生活の崩壞といふこととのあいだに、關聯性のあることを立論せんがため、わたくしたちには縁の遠い多くの古記録が引用された。

さらに一步すすめて、しからは何ゆゑ群れは解体しなければならなかつたか、その結果として生じた孤狼はなにゆゑ人間を害するようになつたか、またこれら二つの現象が、日本狼の絶滅といふ問題とどういふように結びつくのか、といふことになつてくると、ここでどうしてもまへもつて明らかにしておかねばならぬことが、一つでてくるのである。それは動物社會學の根本問題の一つであつて、しかも同時に難問題の一つである、「群れ生活とはなんのために成りたつてゐるか」といふことに對する解釋である。そしてこれに對する柳田氏の見解は「狼の食物として最初から豫定せられてゐるのは、力のより弱い鳥獸の肉で、群れの組織のごときもこれを獲るがために發達したのであらう」(同書、二七〇頁)とあるから、これなら生物學者が普通に考へるところと、ちつともちがつてはゐないであらう。しかしここで注意しておきたいことは、もしこの見解がちがつてゐ

る、この出發點におけるちがいが、のちのちまでも食いちがいのものとなつてくるだろう、といふことであつて、じつをいえばわたくしの見解というのは、これとはだいぶ趣きを異にしてゐるのである。

この相違についてはすでに數年前に、わたくしは簡単に發表しておいたか（あきつ、第二卷、一〇八一—一〇九頁参照）、いづれこの機會にもう一度蒸しかえさねばならぬであらう。しかしそうすることはもうすこしさきに譲つて、ここではもつぱら柳田説の紹介にとめたい。食物獲得のために群れ生活が必要であつたということを念頭に入れておいて、さて群れの崩壊に對する同氏の説明を求めてみるのに、「開墾に基づく山地面積の縮少、これに伴なう食料の制限のほか、やはりまたこれに調和せぬ口數の増加が、かえつて彼らの群れの解体を促す一つの動機になつたのかと思う。他の動物でも皆同じかも知れぬが、狼の群れ生活の無意識なる目的といへば、食物獲得と配偶選擇との二つの他にはない。しかも一方は一年のある短期間に、その必要を感じるだけであるに反して、食物の方はその數量の乏しくなるにつれて、次第に大きな群れで行動することが邪魔になり、少なくとも多くの友をもつ必要を感じしめなくなる。これが最初に一つ狼を多くした原因であつたらしい」（同書、二三八—二三九頁）とあつて、第一段の原因を食物の不足においてある。

ところで自然の與える食物は缺乏したかもしれないが、人間が狼に與えてゐた食物の方は必らずしも缺乏してゐなかつたはずだとして、昔は牛馬が死んでもその肉を食わずに棄ててゐた場合が多かつたのだし、また死人の埋葬法も簡單だつたから、狼はたいして勞せずともこつた屍体を食うことができた、ということも挙げたのち、「狼群崩壊の一つの端緒は、こういう容易な食料の世と共に増加し、必らずしもその獲得のために協力を要しなくなつた點にあつて、單なる活きた人間の壓迫ではなかつたようである」（同書、二七一頁）とあるから、ここではまゝとは正反對に、食物がたやすく得られることすなわち食物の過剩が、群れの崩壊に對する條件として數えられてゐる。

これが狼のたどつた絶滅過程の第二段階である。第三階段となつて、狼はふたたび食物に困つてくるのであるが、それは人間が牛馬の肉を自分で食うようになり、また埋葬法が發達して、墓を狼に荒らされるようなことが少なくなつたからである。そこではじめて飢餓にせまられた狼が、女や子供をねらうようになつた。あるいはその頃ようやく開かれだした牧場に出没して、放牧の牛馬を襲うようになつた。そうなるに狼はもう人間の公然の敵である。この狼の習性の變化に應じて人間の習性も變化し、これまで畏敬の對象にしてゐた動物を憎惡するようになつた。またすすんでこれを殺戮するようになつた。この變化の重要さは柳田氏も認めておられるところであるが、ただ

同氏はこの第三段階から絶滅までの過程を辿らせたものも、やはり狼の社会それ自身のうちに内在してゐたと考えて、どうしたものか人間の直接の影響ということにはほとんど注意を拂われてゐない。しかし藩政時代においても賞金を出して、狼の捕殺は奨励されてゐたようであるし（黒岩米吉著「犬と狼」、昭和十七年、七六頁）、明治になつてから銃殺された狼も、すくないといつてもその正確な數字はわかつてゐないのである。わたくしの調べた最後の狼に関する資料からいえば、飛驒の牧場地帯では、最後の狼が毒殺されてゐるような場合もまたすくなくはないらしい。このところはもうすこし念入りに資料かためをやつた方が、よさそうである。

わたくしは何故こういふことをいうかというのに、狼のたどつた絶滅過程として、以上にのべた三つの段階は、もし最後のところを狼が人間に敵視され、また人間に敵對しがたくなつて滅びる、というようにすることができたならば、群れ生活の崩壊ということとははなれて、それはそれだけでより明快なしかもより形のどつた狼滅亡史になるのでなからうか、と思うからである。しかるに群れ生活が狼の社会の常態である、という假定から出發した柳田氏にとつては、狼が孤獨であるということそれ自体に、すでになにか不吉な徴候が宿つてゐなければならぬ、というように考へられたであらう。したがつて絶滅の原因を「普通に想像せられるのは生殖率の激減、その原因

であつた配偶交通の障碍、そのまた原因としての群れ生活の解体」（柳田前出、二四七頁）というように、どこまでも群れの解体というところへもつてゆかねばおさまりがつかなくなつたのであるが、これではまるで狼というものが、食物のために繁殖を犠牲にしてしまつたというのも同然であつて、このような單純な理論では、群れをつくることを常態としてゐない多くの動物の繁殖を説明しがたいのはもとより、狼にしたつて、一應絶滅したといわれた明治中葉から、もしどこかで生きながらえてゐるものなら、今日までの四十餘年間を、どんなにして血統を絶やさずにきたか、説明に窮することとなるであらう。

日本の狼は、柳田氏の考えたように、その滅亡史の第一段階以前には、常態としてはたして群れ生活をしてゐたであらうか。わたくしはそうではなかつたと思う。そうでなかつたということを立證する、直接の證據をにぎつてゐるわけではないが、狼一般の習性というものから推して、わたくしはそうと斷定せざるをえないのである。狼の社会が、熱帯の森林の梢上にみいだされる狼の社会や、乾燥地帯の大草原にみいだされる有蹄類の社会のように、常態として群れ生活をするものではないということは、まづ、眼もあいてゐないし、また毛もほとんど生えてゐないといつた、生まれ

たてのひよわい子供を抱えた雌に、群れ生活が可能であるかどうかを考えたならば、おのづから明らかになつてくるのであつて、この點で生後間なしに成獣と行動のともにできる、有蹄類の子供の場合には問題にならないにしても、猿の子供は母親の胸にしがみつき、カンガルーの子なら母親の腹の袋にはいつてゐるからよいようなもの、そういう工夫のないものは、腹の袋にかわるものとして、いきおい洞穴かなにかを求めて、その中へ子供をかくしながら育ててゆくよりほかないであろう。するとかりに、狼は群れ生活をなすべきものであつたにしても、子持ちの雌はこういう理由から、どうしても群れをはなれて生活しなければならない。そうすれば、そこにすでに常態においても、多くの孤狼が存在してゐてよいことになるのである。

しからば雌が育児にかかつてゐるあいだは、雄だけで群れをつくつてゐるであろうか。鹿などだと繁殖期以外には雄だけの群れのできることも知られてゐるけれども、狼に關するかぎりこういつたことはまづ無さうである。むしろシモン (Simon, E. T., Life-histories of northern animals, vol. 2, 1910) などは、舊大陸の狼に近縁なアメリカの森林狼では、雌が雌をたすけて育児に参加するといひ (同書、七五七頁)、あるいはまた育児の初期には雄は一度姿を消すが、子供が大きくなつて走ることができるぐらゐになると、もう一度かえつてきて家族に加わるともいつて (同

書、七五九頁)、こういうことから森林狼が完全な、また永續的な一夫一婦主義でなからうか、といふことさえ示唆してゐる (同書、七六〇頁)。しかしブレーム (Brehms Tierleben, Bd. 3, 1915) には、狼の雄が育児に参加するといふことについてはまだ確證があがつてゐない、と疑いをさしはさみ (同書、二二〇頁)、かえつて雌は子供を見つげ次第、食つてしまふといふ報告の方を、條件つきで正しいものに見なそうとしてゐるが (同書、二一九頁)、いづれにしても育児期すなわち春から秋にかけて、雌だけの群れができるというようになことを述べたところはないのであつて、そうすればこの期間には、雌雄二匹で現われることはあるにしても、少なくとも狼が群れをなして押しあるく、といつたような現象は、まづ常態としておこらないものと見ておかねばならぬ。

すると狼が群れをつくつて行動するやうなことがあるとすれば、それは一つの育児期がおわつてつぎの育児期がはじまるまでのあいだ、すなわち冬のあいだということに限られてくるであろう。小鳥のなかには育児期には、雌雄二羽で巢をつくつて雛をそだてるという、家族単位の生活をいふんでゐるが、雛が一人前になつて巣立ちするようになると、巢をすて、家族生活を解消して、群れ生活にうつるといふものが少なくない。彼らは毎年、家族生活と群れ生活とを季節的にくりかえしてゐる。狼の社會生活にもこれと同じ週期があつて、夏は家族生活、冬は群れ生活ということに

なつてゐたのでなからうか。狼が群れをなして通るのに出あつたと、いう古記録をあつめて、そのときの季節を吟味すればよいのであるが、それはわたくしなどよりも他に適當なひとがあることである。ここにはただ一例として、座右にある本のなかから「遼野物語」(明治四十三年)を開いてみる。そしてその中から、わたくしは狼の群れのでてくる記事を二つ発見するのであるが、その一つには季節の記載がなかつた。他の一つをつぎに引用しておこう——「和野の佐々木嘉兵衛、ある年境木越の大谷地へ狩にゆきたり。死助の方より走れる原なり。秋の暮のことに、木の葉は散りつくし山もあらはなり。向こうの峯より何百とも知れぬ狼此方へ群れて走り來るを見て恐ろしさに耐へず、樹の梢に上りてありしに、その樹の下を頼しき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。その頃より遼野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり」(同書、三三頁、傍點筆者)。

そこでこんどはもう一度、この點についてシートンとブレイムにたよることとする。ブレイムには簡単に「狼は春と夏とは一匹、二匹乃至は三匹で生活し、秋には家族で生活するが、冬になると多かれ少なかれ群れをつくつて生活する。群れの大きさはその土地の状態によつて一定してゐない」とある(ブレイム前出、二二四頁)。シートンの方はやくわしく、まづ群れの大きさについて、自分の見た群れは五匹であつたが、話しに聞いてゐるところでは三二匹からなる群れもあることを記した

のち、「こうした群れ(pack)は、どうやら冬だけつくられるものらしい。それでわたくしには、狼の群れがカモシカの群れやアカシカの群れと、同じような意味をもつた群れであるとは思われなす。おそろしくこの狼の群れというのは、平素から彼らの社交圏内にある個体が、なにか食物とか、それとも配偶とかいうようなことに關係した、一時的な目的または理由のために、集まつてきたものにすぎぬであらう。したがつてその目的が達せられるか、その理由がなくなるかすれば、群れは解体する」(シートン前出、七五五頁)はすのものであると考へた。六匹の狼が湖の氷上に一匹の鹿を狩りだし、これを倒して食い平げたのち、めいめいが別々の方向にむかつて退散していつたという實例は(同書、七五六頁)、彼のこの考へを支持するもののようなものである。なおここでいう狼とは、まえにも出てきた北米の森林狼——*Canis nubilus*——のことである。

戦争になつてから、わたくしはしばしば大陸に渡るようになったが、終戦のまえの年、この狼と
 いろいろものが、もはやひとびとの記憶から消えさうとしてゐる國をはなれて、しばらく居を大陸に
 移すこととした。そこは蒙疆の張家口であつて、わたくしの考へは、そこを根據地として内蒙古の
 草原を歩きまわろうというのである。

張家口へ行つてみると、その民家の土塀には、大きな白まるが、いくつも並べてかいてある。注意してみると、どの家にもたいていは描いてあつた。そして、それが狼よけのまじないであるということを知ると、わたくしの記憶のなかの狼が、ふたたび蘇つてきた。わたくしは狼のゐる國にきてゐる、現に狼と共存してゐる、そう思うことはつねに一種の感慨を伴つた。すぐる年の水害で死人がでたとき、その屍体を食ひに町のなかへ入つてきた奴が、いまでもときどき出沒するのだという。どこそこで子供が食われたなどという噂さがひろがつたりした。夜になると、ひとびとはステッキや金棒をついて歩いた。うちのボーイなどは、明け方に裏山を歩いてゐる姿をみるとささいつた。しかしわたくしは、張家口ではとうとうほんものの狼をみないでしまつた。

それからわたくしは、半年ちかく奥地を旅行して、そのあいだに何回かほんものの狼をみてきたから、それをここに誌して、いままで論じてきたことに對する資料の補いとしたのであるが、ただ残念なことに、わたくしの資料はその季節が、秋から春にかけての冬半年にかざられてゐる。それゆゑ蒙古の狼——*Canis lupus laniger*——の習性を、一年にわたる完全な記録にするために、まづアンドリウス (Andrews, R. C., 1932, *The new conquest of central Asia*) から、狼に關する記載を拾ひあつめてみることにしたい。アンドリウスの探検隊は、わたくしの場合とは反對に、

5つも春から秋にかけての夏半年に行動してゐたからである。

蒙古の狼がこの季節に、單獨で行動してゐたか、それとも群れをなしてゐたか、ということが狙ふところなのであるからして、觀察の年月日や場所を省略して、いきなり拾ひだした資料を羅列してみると、

- 1 一匹の狼を目撃 (同書、四八頁)
- 2 一匹の狼が黄羊の群れを追撃するところを觀察 (同書、二二八頁)
- 3 一匹の狼を發見、石を投げつけた (同書、三九八頁)
- 4 一匹の狼が現われて、一匹の羊を噛み殺すのを目撃 (同書、四二五頁)
- 5 一匹の狼を發見、射殺 (同書、四四四頁)
- 6 二匹の狼が毒餌によつて斃れてゐるのを發見 (同書、一七頁)
- 7 二匹の狼がキャンプに接近せるを發見、これを追跡して一頭を射殺、他の一頭は傷けたがついに見失なう (同書、四三八頁)
- 8 一匹の雌狼が二匹の子供をかくしてゐる巢を發見、子供を捕えた (同書、七五頁)
- 9 二匹の狼と二匹の子供を、巢からすこし離れたところに發見 (同書、四四〇頁)

蒙古でいく夏を送つたアンドリウス隊のことであるから、その隊員が発見した狼、あるいは射殺した狼の数は、もとよりここにあげた資料の何倍かに達するであろう。たとえば第5例にあげた狼のごときも、おなじキャンプに滞在中に射とめた第十三番目の狼であるという。けれどもそれらの狼が、どれもこれも似たような生活状態のもとに発見されたからこそ、いちいち記載してないのだと考へるべきであつて、もし一度でも群れをなした狼が発見されてゐたら、これを書きもらすようなアンドリウスではないのである。もつとも「數匹の狼を見た」というところもあるが(同書、四〇〇頁)、それは一度に見た數匹でなくて、つぎつぎに見た數匹であつた、と解することができよう。だから上にあげた資料は、アンドリウスによる蒙古の狼の習性が、ブレームやシートンの記したところとも完全に一致して、夏は群れをつくらないということを、明らかにしたものとみてよいと思ふ。

そこでつぎには、わたくし自身の集めた蒙古の狼の、冬のあいだの習性に關する資料を、觀察順にならべてみる。

- 1 一九四四年一月四日、サインホーブルにて、水を飲みきた黄羊の一群のあとを追うて、一匹の狼が出現

- 2 同年同月七日、メーリンホトック―西ジャラン・スーム間で、一匹の狼を目撃
 - 3 同年同月一八日、オングチンホトック―ウランホトック・スーム間で、一匹の狼を目撃
 - 4 同年同月二二日、ジュンエルグン―フルム・スーム間で、一匹の狼を目撃
 - 5 同年十二月二五日、チャガンチヨロー―滂江間で、四匹の狼を目撃
 - 6 一九四五年一月一〇日、ターヤンチンラミン・スーム附近で、四匹の狼を目撃
 - 7 同年同月二四日、チャガンハターベリク間で一匹の狼を目撃
 - 8 同年二月一日、バインドロン・スーム―肅親王牧場間で、三匹の狼を目撃、これを追跡したところ、山蔭にさらに二三匹の狼のゐることを発見、射撃せしも當らず
 - 9 同年同月一八日、肅親王牧場―ハビルカ間で、一匹の狼を発見、射撃せしも當らず
- これを見て、まづ注意しなければならぬ點は、冬でも一匹で行動してゐる狼が、意外に多いということである。わたくしは一九三八年九月二四日にも、東コチトで一匹の狼、東コチト―西ウジムチン間でやはり一匹の狼を見てゐるから、狼が秋は家族生活をし、冬は多かれ少なかれ群れをつくつて生活するという、ブレームのさきあげた引用は、少なくとも蒙古の狼に關するかぎり、これを一般原則とは認めがたいであらう。またさきにシートンは、五匹でも群れと見なしてゐたから

四匹の場合だつてこれを群れと見ていけないわけはなからうが、狼は犬とちがつて、一人前になるまでに一八ヶ月かかる(シートン前出、七六四頁)ということを考えにいれると、こうした群れは、あるいは夏以来の、親と子からなる家族にすぎないかも知れぬのであつて、かかる家族の延長にすぎない群れと、一旦家族を解消して、個体の立場にかえつたものが、もう一度より集まつてつくる群れとでは、同じ群れといつてもその成立条件がちがい、したがつてその生活内容もまたちがつてゐてよいはずであるということが、やがて群れの意義を検討する場合に、重要となつてくるのである。

わたくしは以上にのべてきたところから、狼は常態として、夏はもとより、冬といえども必ずしも群れをつくるものでない、しかしもし群れをつくることがあるとすれば、それは夏でなくて、必ずらず冬にかざられる、と結論したい。そこでいつたいどうして冬にかざつて狼は群れをつくるのであるか、あるいはこうした狼の群れには、どういう合目的性が含まれてゐるのか、ということもここでもう一度考えてみなければならぬ。そして合目的性ということになれば、まづ食物獲得のためか、それとも配偶選擇のためか、と考へるのが、われわれの習わしであるだろう。

狼というのは肉食で、兇悪で、年中鹿や黄羊ばかり捕つて食つてゐる。そうでなければ家畜を

とつてくうというように、考えられがちであるが、もすこし詳しく調べてみると、狼の食物も夏と

冬とでだいぶちがうようである。すなわち肉食といつても、夏は主として、ネズミ・モルモット・

鳥・魚・蛇・昆虫といった小型の動物を選び、冬になつてこつた小動物が姿を消すに至り、はじ

めて本格的に、鹿のような大型獣を狩りだすといふ(Olson, S. F., 1938, A study in predatory

relationship with particular reference to the wolf. Scientific Monthly, vol. 46, p. 329)。

だから小動物をあさつてゐる夏のあいだは、なにも食物獲得のために、群れをつくらねばならぬ必要

はないであろう。これに對し、狼が協力して狩りをするというのは、さきあげた例でもわかるよ

うに、その對象が大型獣の場合であり、そしてそれはまた冬に多いということになるから、オルソ

ンはここに着眼して、群れをつくるのは、食物獲得のためであるという見方に傾いてゐるようだ(前

出、三三三—三三三頁)。

けれどもここで一つ注意しておきたいのは、狼は群れをつくらねば鹿や黄羊を捕えることができない、というのではないということである。群れをつくつて協力すれば、効果的であるにはちがいない。しかし一匹でも捕える能力をもつておればこそ、冬でも一匹で歩いてゐる狼があるのである。狼は犬がそうであるように、比較的社交性に富んだ動物であるから、一匹の獲物をねらつて近

所から集まつてきたものたちが、獲物を争うよりも、むしろ突嗟に共同戦線を張つてこれを捕え、捕えた獲物も、これをまえにして獨占を争うようなことなく、みんなしてこれを食い平げる。それからさきはまた思い思いにかえつてゆくと、シートンの例にもあることだから、食物獲得を目的として、あらかじめ冬中つづくような群れがつくられるというのも、狼にしてはすこし窮屈すぎた話のように思われる。もつとも夏の家族生活の延長と認められるような群れだつたら、あらたにつくられる必要もないし、またそんな群れなら狩獵後に解散することもないであろう。オルソンもだから、個体数の少ない群れは、これを親子づれとみてゐるが（前出、三三二頁）、親子づれか親子づれでないかが、一つ一つの群れについて確認されたわけではないから、いまのところ冬現われる狼の群れのなかには、こうした家族的な群れもあるのではないか、という程度以上にはつきりしたことは、いえないのでなからうか。

オルソンは食物獲得に重點をおいたためか、配偶選擇ということについては一言も觸れてゐないけれども、冬はまた狼にとつては交尾期でもある。もし狼がいひ傳えられるように、数年あるいは生涯にわたつて、一夫一婦制を厳守するものなら、配偶選擇のためにわざわざ群れをつくる必要もないであろう。そうだとすればまた、冬に家族的な群れの存在することに對する間接的な支持にも

なるであろう。しかしこれもまだ確證された事實ではないのである。かえつてルカーンキンなどは「バルガにおいて余の觀察した狼の交尾期は、一月—二月で、このときには群集して、雌につき纏う」といつてゐるし（北滿經濟調査所編「北滿野生哺乳類誌」昭和十四年、六八頁、わたくしの聞いた話）でも、冬ホロンバイス地方にみられる狼の群れは、先頭にたつのが雌である、というのである。

狼と犬とは、その習性のすべてが同じであるとは、もちろんいわないが、發情した雌犬のところへ、方々から雄犬がより集まつてくるように、そしてその場合に、雄犬同志のあいだの格闘もじつさいおこるが、さりとてもつとも強い雌が雌を獨占してしまうということもなければ、弱い雌が格闘に敗れたからといつて引きさがることもなく、お互いにチャンスをねらつて、發情期間中は雌からはなれないように、狼にもこうした交尾期の、雌を中心とした群れができることを、わたくしは認めたいと思う。それは食物關係について認められたのとおなじ犬や狼の社交性が、配偶關係について現われたものと、解することができるのでなからうか。それは狼の社會にみられる交尾のためのおつまりである。そして狼の社會には、こうしたおつまりにある間は、食物をとつていけないというタブーも別段なさそうだから、好餌が見つかったときには、この交尾のためのおつまりが、そのままただちに狩獵のためのおつまりに、變わることもあつてよいのである。わたくしはこういつ

たことも、蒙古犬についてなら観察してゐる（本書二二五頁参照）。

狼は犬と同じように、ときには十匹以上も子供を生むことがある。だからもし、狼の群れが、どこまでも家族としての親子づれの群れであるとしたならば、一と腹の子供の數できまるその群れの大きさというのは、いくら多くてもせいぜい十數匹までということになつて、三〇匹にも及ぶ群れが、家族として成りたつようなことは、とうてい考えられないのである。そこでオルソンは、大きな群れはいく家族かの集合によつて、できたものだということにしてゐるが（前出、三三二頁）、これでは假定のうえに假定を重ねたこととなるであらう。しかるに交尾のためのあつまりなら、その數が何匹までという制限があるわけでないから、棲んでゐる場所により、あるいはその他の事情によつて、その數が、四、五匹のこともあつてもよし、ときにはまた三〇匹にも及ぶようなことがあつたところで、あえて怪しむには足らぬのである。ただ狩獵のためのあつまりでもそうであつたように、交尾のためのあつまりも、そのあつまりの對象——この場合は雌の發情——がなくなれば、あとはもう解散するより仕方がない。そういう意味で、狼の群れを一時的なものとして、これを有蹄類にみるような持続的な群れから區別しようとしたシートンには、ここであらためて敬意を表しなわけにはゆかぬであらう。

こうした交尾のためのあつまりは、單なる狩獵のためのあつまりにくらべると、それでも多少は持続的であるといえる。これも犬から類推することが許されるならば、狼の雌もその發情期間は、三週間はつづくと思われるからである。そして、そのあいだつづくであらうこの一時的な群れが、一箇所にばかり膠着してゐるといふことも考えにくいから、それはある程度まで移動して歩くかも知れない。そうして動いてゐる群れに出あつたら、おそらく狼の群れが押し歩いてゐた、という印象を受けることであらう。しかしその移動の範圍というのはきまつてゐる。彼らは方々からより集まつてきたといつても、その範圍におのづから一定の限界があるように、彼らは移動する場合にも、この限界の外にでるようなことはない。つまり、その限界というのは彼らの社交圏の限界であり、彼らはその社交圏内を移動してゐるのである、とわたくしは思う。だから、狼の群れが二週間か三週間に同じところへ戻つてくるといふオルソンの報告は（*Ecology*, vol. 19, p. 168, 1938）、その群れをしいて狩獵のためのあつまりと解しなくても、これを交尾のためのあつまりと解して、すこしも矛盾を生ずるものではない。また彼らの社交圏に一定の限界がある以上は、交尾のためのあつまりであるといつても、そのあつまりの數に、やはり一定の限界があることを知るべきであつて、シートンの三二二匹に對し、オルソンのあげた最高數は三〇匹であつた。そして、こういったことは

いづれも、狼の社會生活の常態とはいかなるものであるかを、のみこんでおくうえに必要なのである。

狼は子供のある夏のあいだは、家族中心の生活をしてゐるが、子供の大きくなつた冬になると、しばしば狩獵のためや交尾のためにあつまつて、一時的な群れをつくるのであるならば、昔はもつぱら群れ生活をしてゐたものが、近世になつてから孤獨生活に變つたというようなものではなくて、昔のはなやかなりし頃でも、それがようやく滅亡に脅かされるようになってからのちでもいつも同じように、狼には孤獨で見いだされる面と、群れをしてゐるところを見いだされる面との、二つの面がそなわつてゐたにちがいない。換言すれば、いつの世にだつて、孤狼も群狼も見いだされてゐるのであつて、柳田氏の考えたように、一度孤狼になつたものは、ふたたび群れにかえりえないというようなものではなかつた。

ところでわたくしは、こういう説明ではどうしても割りきれないような狼が、やはりある時代の日本にゐたのでないか、という疑いをいだくものである。その狼というのは、わたくしがさきに引用した遠野物語に出てくるような狼である。かりにあの記録は、事實を忠實に傳えたものであると

しよう。季節は秋の末というから、狼はもう群れをつくるようなことがあつてもよいし、その数が三〇匹ぐらゐまでなら、あるいは交尾のためのあつまりであつたかも知れぬという解釋もつく。しかしそれは、百をもつて數えるような大きな群であつた。また、ある範圍を移動してゐて、何日かたつと、また同じ場所へ姿を現わしてくるような群でなくて、それは一度現われたきりで、どこかへ行つてしまつて、二度とふたたびその姿を現わさぬような群れであつた。わたくしがいままで書いてきた、狼の社會生活の常態とは、どこか本質的にちがつたところがある。それはまさに異常な群れでなければならぬ。

かかる異常な群れが出現するということは、なにか生存上の危機と結びついた異變が、狼の社會に發生したことを示すものでないだろうか。環境の變化してゆく方向は、いづれにしても狼の生存に不利な條件を興えるばかりであつたから、ほつておいても狼は絶滅に瀕してゆくのはかなかつた、というのも一つの見方である。これに對し、環境の惡化にある程度まで抵抗し、また順應もしてみただが、それもある限度までのことであつて、その限度がきたときには生物として、いままでとは全然ちがつた反應を現わして、これに答えるようなことがないであらうか。そして、窮鼠かえつて猫を嚙むように、この反應がむしろ常態をもつては説明できないところに意義がある。だからわたくし

しにいわせると、日本の狼も絶滅の一步手前というところまでいつたから、こういう異常な群れをつくらねばならなくなつたのだ。しかも、こういう異常な群れの現われた遠野郷では、そのあと狼の数が激減したというのであるから、それは實際にも絶滅の先驅的現象であつたといふことができる。柳田氏は群れの解体のなかに絶滅の前兆をみようとしたが、わたくしは反対に、こうした異常な群れの成立のなかに、日本の狼の絶滅の前兆を認めたいのである。

それにしても、こんな大群をつくつてどうするつもりだろうか。またこの大群はどこへ行つたのだろうか。

狼のような肉食獣に關してはまだ知られてゐないようだが、ヒープをみると、草食獣——とくにアフリカの羚羊や、ノールエーのレミングなどには、ときどきこういつた大群の移動が見られるとスウ (Heape, W., 1931, Emigration, migration and nomadism)。その説明として、そこにじつとしてゐたのでは、もはや、過剩となつた人口を支えるにたるだけの食物がえられなくなつたからであるといへば、一應とおるが、それならばこの移動は、移住を目的とした移動である。だからうまく處女地を發見して、そこにこの大群が落ちつくことのできた場合を考えると、この行動にもはつきりとした合目的性が認められ、それは絶滅の前兆どころか、かえつて絶滅を救う前兆という

ことになるのであるが、じつさいはそういうように事の運んだためしがないらしい。彼らはほとんど盲目的に前進をつづけ、ついにはどこかの海岸へ到達して、それでもなお前進をやめないものだから、けつきよくみな溺れ死んでしまうようなことになるのである。

こうなると日本のような小さな島にすんでゐるものは、ちが早い。あの狼の大群も、ほどなくどこかで大平洋か日本海の海岸にでたことであろう。そして波に吞まれてしまつたであろう。こういう現象が全國的に同時におこつたとも思われないが、あちらこちらでくりかえされてゐるうちに、日本の狼もその数がだいぶ減つたことであろう。わたくしは遠野物語に出たつた一例をとらえて、すいぶん想像を逞うしてしまつた。しかし、これと同じような異常な群れの記録が、ほかにはないものだろうか。人を噛んだというような狼のことなら、かえつて記録にも残りやすいのであるが、なにしろ狼ほどの鼻のよい動物が、樹上にひとのひそんでゐるのを感じずかぬはずはないのに、そんなものには眼もくれないで、足早やに通りすぎていつたのである。こうした群れを見る機会も、案外少なかつたかもしれない。

それに狼は犬とおなじように、水を泳ぐことができるはずだ。溺れ死んだにしても、海岸の波打ちぎわに證據をのこすような醜態は、しなかつたかも知れぬ。そこで最後に思いあたることは、狼

の足には水掻きがあるといういいつたえであつて、そのことは柳田氏の本にもちよつとのつてゐるが（前出、二二二頁）、わたくしは新潟縣の笹ヶ峯で一獵師から、狼の足には水かきがあるから、みな日本海を泳いでシベリアへ渡つてしまつた、それでこの邊には狼がゐないのだ、という話を聞いたことがある。いつたいこのような言いつたえが、どこからでてきたものであるうか。わたくしはそれが、柳田氏の考えられたように、狼の足の解剖學的智識と結びつたものでなくて、むしろ狼の生態學的智識と結びついてゐるのでなからうかと思ふ。すなわち、誰れかがじつさいに海岸にたつて、狼の大群の海を泳いでゆくところを見たものがあつて、その驚異を表現するのに水かきというものを持つてきたのでなからうか、と思うのである。しかしこままでくると、もうだいたいわたくしの領分から逸脱したことになる。問題を狼の足あとの消え去らぬ間に、はやく民俗學者の手にかえさねばならぬ。

（一九四七・三・一三）

あとがき

本書は、さきに發表した「草原行」の姉妹篇として、わたくしの第三次蒙古行（一九四四—一九四五年）を取扱つたものである。

「草原行」はあれで一應、ナレーチブという体裁のもとに、纏めることができた。それにくらべると本書の内容には、たしかに統一がない。それはミセラネアスである。それについて、すこし説明しておきたい。

巻頭にかかげた「草原の自然と生活」は、奥地旅行にでるまえに、わたくしが、フロンチア・インテリゲンチヤの一人として、張家口でこころみた講演の原稿なのであるが、そのなかには、わたくしがどういう立場から蒙古をながめ、また調査にあたつて、どういふところに重點をおくべきか、ということを、あらかじめ明瞭ならしめてゐるところがあると思われる。そういう點では、いわばわたくしの第三次蒙古行に對する、一種の豫告篇

あとがき

にも當たるものであるから、これを巻頭にのせておくことは、讀者にとつてもまた、全巻に對する見とおしを興えるうえに、役立つだろうと考へたのである。

しかし、じつさいに本書の中心的内容となつてゐるものは、わたくしが、この第三次蒙古行において、いままでに持たなかつた知識や経験を、記録したところの、一種の現地報告である。それはどこまでもわたくしの興味が中心になつてゐる。「草原行」さえ、蒙古についてのづぶの素人には、取つつきにくいところが少なくない、という批評をうけてゐるのである。本書はさらに、その傾向を強めてゐることであろう。つまり、友人にはおもしろいが、素人にはおもしろくない、というのが本書の特色だといわれるかも知れない。わたくしはもちろん、誰れでもが取りつけるような、より一般的な、調査の報告書を、いづれは出すつもりである。しかしそのまゝに、もし本書の内容を充分に味わつてみようというひとがあるならば、そのひとに豫備知識を興える良参考書として、まづ後藤富夫氏の「蒙古の遊牧社會」をおすすめしたい。

公式な報告書というものは、誰れにでもわかるように御行儀よく書いてあるかわりに、それだけ味のうすい、个性的でないものにちがいない。わたくしが、そういつた報告書にさきだつて、本書を出版しようとする所以も、じつは現地でしたためたもののもつ、個人的なかおりを生かしたいからであつて、その點では、蒙古の實情をつたえるうえで、いかに一般讀者に不親切であろうと、わたくしはあえてこれを問題とはしてゐないのである。むしろわたくしとしては、本書の内容がミセラネアスであるといつてゐるものの、そのなから、讀者がなにかその底流となつてゐるようなものを、くみとつてくださることを望んでゐるのである。「遊牧論」と「狼」とは、表面的にはなんの關係もないであろう。しかし、そこには兩者に共通した、生態學的な、あるいは生物社會學的な、原理が脈うつてゐないだろうか。

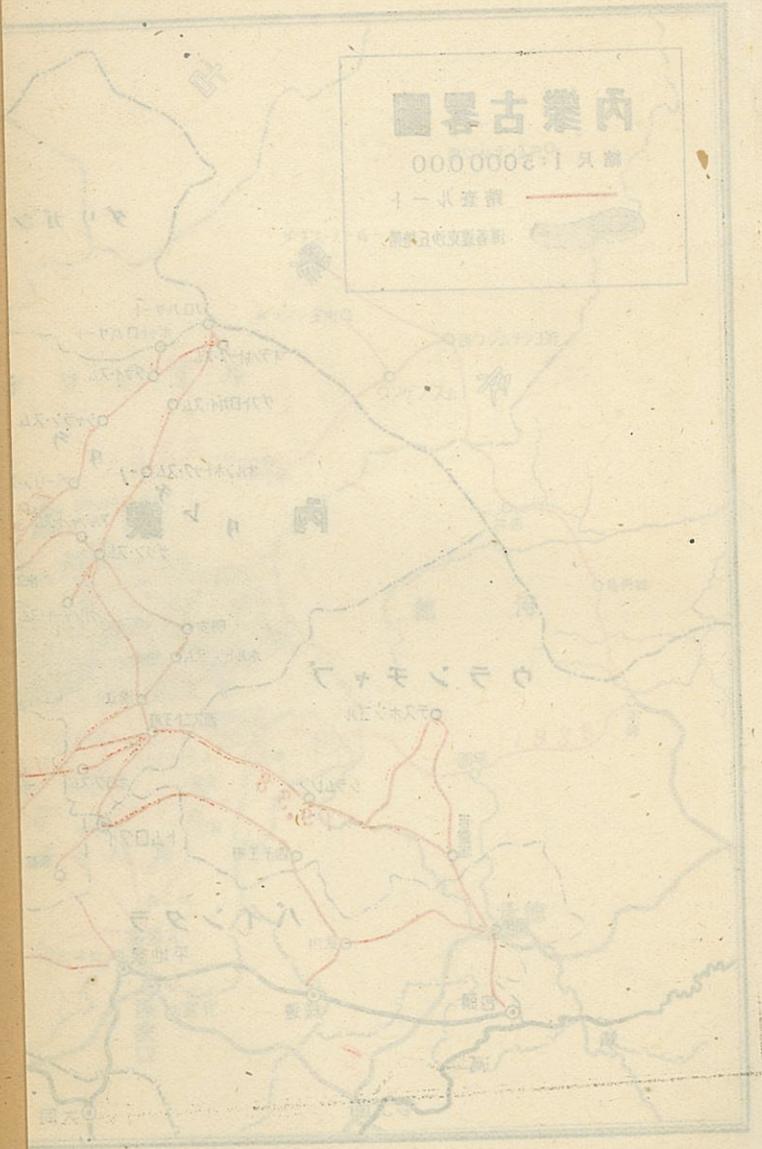
そういえば、「チャハル印象記」や「張家口落ち」のようなものでも、それがわたくしの感興を表現し、それをつたえてゐるところがある以上、まだ科學的な意味での原理を結晶さす、というところまでには至つてゐないにしても、すくなくともそこになにか、わたくしのなかなる生きた學問といつたものが、發散してゐるにちがいないと思う。そこに、わたくしの學問のベースベックがある。そこに、「遊牧論」や「狼」と、「チャハル印象記」とがならんでゐても、亂雑とは思へぬところがないであらうか。ミセラネアスだと

いつても、本書に統一がないであろうか。

文學者が書く場合はいざしらず、科學者がこういうものを書くとき、ただきままな筆のすさび——隨筆——として、軽くあつかわれてしまうおそれがないでもない。隨筆として讀んでもらつても、一こうさしつかえないが、本書はそれでも、わたくしにとつては、その生活史の一時期をうつした、まじめな記録である。内容のすべてが生態學に通ずる生々しい記録であると考へてゐる。

おわりに、本書の上梓について心をくばられた、秋田屋編輯室の八東清氏に謝意を表する。

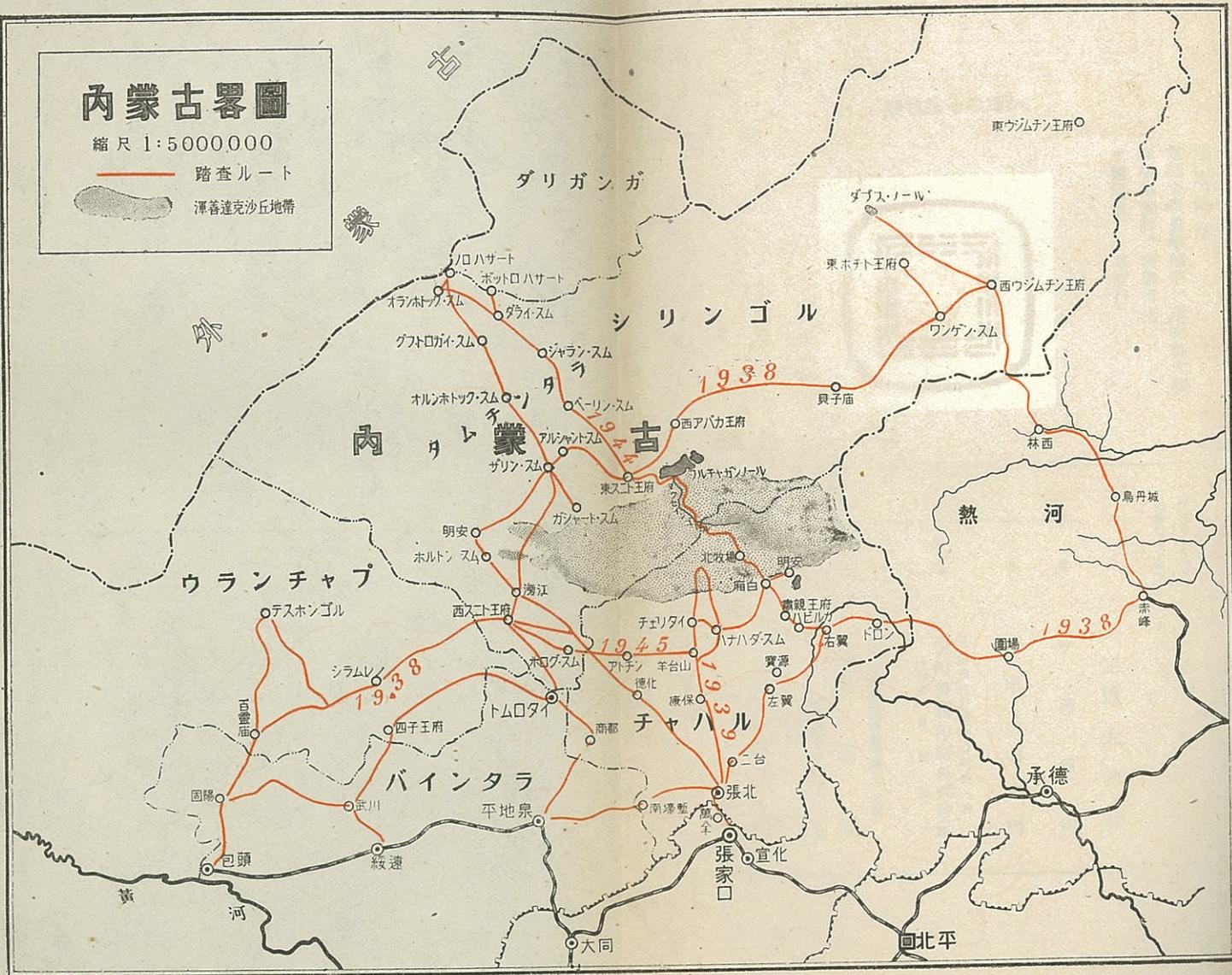
— 一九四七・一一・五 —



内蒙古略圖

縮尺 1:5000000

— 踏査ルート
— 渾善達克沙丘地帯



る。
まわりは、本書の上巻について心をくばられた、秋田屋編輯室の八東清氏に謝意を表す

遊牧論そのほか



著者略歴
 京都大學農學部卒、現京都大學
 理學部講師、理學博士
 主要著書 草原行

昭和二十三年三月一日印刷
 昭和二十三年三月十日發行

定價 九拾圓

著者 今西 錦司

發行者 田中 太右衛門

印刷所 大阪市住吉區濱口町四一四
 岩岡書籍印刷株式會社
 代表者 岩岡 忠一

發行所 大阪市阿倍野區阿倍野筋二ノ三回
 株式會社 秋田屋
 會員番號 A-101100番
 振替大阪 五一四〇〇番

配給元 日本出版配給株式會社

